山口大学構内遺跡調査研究年報

昭和56年度

1 9 8 2

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報

昭和56年度

1 9 8 2

山口大学埋蔵文化財資料館

発刊にあたって

山口大学の吉田地区への総合移転は昭和41年１月に、農学部・教養部建設用地の地鎮祭と鍬入れが行なわれたのに始まり、その後およそ７年の歳月を要して昭和48年１月経済学部の移転をもって完了した。

現山大キャンパス内に遺跡が埋在している可能性は、遺物の散見によって昭和25年頃から予想されていた。すなわち、現キャンパス72万m²はいわゆる吉田遺跡の上に立地していることになる。

昭和41年に本学の統合移転が開始されるに伴い、この地に遺物包含層が発見されるとともに遺物の出土をみた。これが契機となって、文化財保護委員会の要請で予察調査が行なわれ、昭和42年７月に市川学長のもとに山口大学吉田遺跡調査団が組織されて本格的な調査に取り組むことになった。調査に当っては文化財保護委員会、地理学談話会、文化会考古学部の方々の助言、協力のもとに、また山口県及び山口市教育委員会から多大の協力と援助を得て実施された。そして本学構内の洪積台地から沖積低地にかけて縄文時代晩期から弥生・古墳時代はもとより中世・近世の各時代の遺跡が点在していることが次第に明らかにされてきた。

このような状況のもとで、昭和53年には山口大学埋蔵文化財資料館が設立され、調査団の業務が着実に継承、発展されている。

最近では人文学部校舎新営、本部管理棟２号館新営、養護学校新営、教育学部校舎増築、図書館増築等に伴う調査が行なわれ、住居跡を中心として生活遺構や多種多量の遺物が見出されている。

埋蔵文化財資料館は、これら発掘された遺物資料で満杯になりかけている。今回、資料館から年報として発掘報告書が刊行されることになったことは大いに意義のあることと喜びに堪えない。我々が学問をし、研究をし、教育をし、学習をしているこの場で、往年の人々がどのような姿で、どのような生活をしていたかに思いを致すことは、まさに温故知新の諺のとおりで、単なる興味以上の意義を考える必要があろう。

この企画が将来にわたって大きな意義を持ち、ますます発展していくことを祈念してやまない。

昭和58年３月

山口大学

学長　小西俊造

序　文

吉田遺跡を包括する山口大学吉田キャンパスは、悲恋の伝承まつわる姫山を背に、南流する椹野川流域の平坦耕地を通して瀬戸内海岸へ約16km。中世大内文化の開化した西の京山口、こもれる里の一隅に所在するものである。この地は今日でもそうなのだが、格別、古代人にとって住まうに好個な場所であったろう。この地に住みついた先人たちは、木の実を採り稲を育て、そして魚を漁(と)り塩を焼き、鼓腹撃壌の平和な現世を謳歌したことであろう。

山口大学がこの吉田地区に統合移転するに先立って実施した発掘調査、また引き続いて各施設の新営に際して行った諸調査の結果は、かかる事実を立証するのみならず、畿内と九州を結ぶ古代史研究上の空白を埋めるに足る埋蔵文化財の出土を斉らしたのである。とくに昭和56年度における教育学部増築に伴う事前調査は、本資料館開設後実施した本格的発掘であるが、今後このいわゆる吉田遺跡の全貌を解明し、もって本遺跡のもつ学術・研究上の課題を探求しうるという確信を関係者一同に与えたものであった。したがって本資料館は、既往の未発表資料の整理をすすめるとともに、これからの発掘調査を展望しつつ、定期的に調査研究年報の公刊を企図した。そしてその第１報は、まず56年度発掘調査の研究報告を中心に刊行することとした。

本調査研究年報が今後わが国の埋蔵文化財にかかわる学術研究のみならず、広く文化財に対する認識と理解を深める一助になれば望外の幸せと存ずる次第である。かく念ずるとき、卒然として肥後、国は隅府にある菊池武光ら縁の正観寺。かつて寺僧のご接待をうけて一夜の宿を賜ったその客室に掲げられた、蘇峰徳富猪一郎翁の雄筆「国家依歴史尊　歴史依史蹟昭……」、を想わざるをえない。

なお調査の実施と本年報の発刊にあたり、ご指導およびご協力を賜った関係各位に対し、あらためて深甚の謝意を表したい。

昭和58年３月

山口大学埋蔵文化財資料館

館長　中　山　清　次

例　　言

1．本書は山口大学埋蔵文化財資料館が昭和56年度に山口大学構内で実施した調査の報告書である。

2．調査位置および層序、遺構の位置は大学構内を国土座標に沿った50ｍ方眼によって区画し、東西に西からＡ～Ｚ、南北に北から１～24の番号を付した。その際、Ａ－24区東西隅を起点（構内座標x ＝０、y ＝０）とした構内座標値で表示するが、国土座標第Ⅲ座標系における座標値（Ｘ、Ｙ）は構内座標値（x 、y ）と下記の計算式で変換される。

$$\begin{cases} x = X + 206{,}000 \\ y = Y + 64{,}750 \end{cases}$$

3．遺構の略号は下記の記号で表記した。

住居跡……ＳＢ　　土壙……ＳＫ　　溝……ＳＤ　　柱穴……ＰＨ

4．遺物番号は同一遺構内出土のものについて通し番号を付し、本文、図版と一致させた。

5．遺物実測図の縮尺率は土器1/4、石器1/3および1/2に統一した。

6．遺構実測図の縮尺率は必要に応じて1/30、1/40、1/60、1/80を該当させた。

7．遺構の実測図は山口大学考古学研究室の援助を受け、遺物の実測図ならびに遺構・遺物の製図、本文の執筆は河村吉行が行ない、浄書は井上直明、西山和子（山口大学考古学研究室）、竹内真弓の協力を得た。

8．遺物の復原は小田優子が行なった。

9．調査組織は下記のとおりである。

調査主体	埋蔵文化財資料館	館長	中山清次
			河村吉行（調査担当）
			小田優子（資料整理）
事務局	本部庶務課	庶務部長	足立卓三
		課長	田崎　智
		係長	石川俊輔
			広政　登
			岩佐厚子
			杉山美由紀

10．なお、調査にあたっては下記のかたがたの御協力を得た。

教育学部、経理部、施設部

足立セツ子、石津彰子、岡本イツ子、河村菊子、北村カヨ子、黒坂千代子、谷川美彩世、寺山久江、中井小梅、中野満子、中村キヨ子、福富禾久子、宮家静代、百村敬子、安常政子、山縣初子、吉村幸子

本　文　目　次

第１章　山口大学構内吉田遺跡の位置と環境 …… 1
第２章　山口大学構内吉田遺跡の概略 …… 5
第３章　昭和56年度山口大学構内吉田遺跡の調査 …… 9
第１節　昭和56年度山口大学構内吉田遺跡調査の概要 …… 9
第２節　教育学部構内Ｈ－19区の発掘調査 ……11
1　調査目的および経過……11
2　層序……12
3　遺構と遺物……12
(1)　住居跡……16
(2)　土壙……22
(3)　溝……28
(4)　柱穴……30
4　小結……31
第３節　教育学部構内Ｈ－16区の発掘調査 ……37
1　調査目的および経過……37
2　層序……37
3　遺構と遺物……39
(1)　溝……40
(2)　土壙……41
(3)　小結……42
第４節　教育学部構内Ｊ－19・20区の発掘調査 ……43
1　調査目的および経過……43
2　層序……43
3　遺構と遺物……46
Ａ地点……46

(1) 溝……46
(2) 旧河川跡……48
(3) 柱穴……49
B地点……49
(1) 溝……50
(2) 土壙……50
(3) 柱穴……51
(4) その他……52
4 小結……52
第4章 考察 ……53
第5章 昭和54・55年度調査の概要 ……59
第1節 昭和54年度調査の概要 ……59
第2節 昭和55年度調査の概要 ……62

挿 図 目 次

Fig. 1 山口盆地周辺地形図および遺跡分布図……2
Fig. 2 吉田遺跡旧調査区区分図……6
〈教育学部構内H－19区〉
Fig. 3 調査区位置図……11
Fig. 4 土層断面図……折込み
Fig. 5 遺構配置図……15
Fig. 6 1号住居跡実測図……16
Fig. 7 1号住居跡出土遺物実測図……17
Fig. 8 2号住居跡実測図……18
Fig. 9 2号住居跡出土遺物実測図……19
Fig.10 3・4号住居跡実測図……20
Fig.11 3号住居跡出土遺物実測図……21
Fig.12 4号住居跡出土遺物実測図……22
Fig.13 1号土壙実測図……23
Fig.14 2号土壙実測図……23

Fig.15　1号土壙出土遺物実測図……24
Fig.16　3号土壙出土遺物実測図……25
Fig.17　3号土壙実測図……25
Fig.18　6号土壙出土遺物実測図……26
Fig.19　4・5・6号土壙および溝2・6・7・8実測図……26
Fig.20　7号土壙出土遺物実測図……27
Fig.21　7号土壙実測図……27
Fig.22　溝5実測図……28
Fig.23　溝5出土遺物実測図……29
Fig.24　溝6出土遺物実測図……30
Fig.25　ＰＨ6出土遺物実測図……31
〈教育学部構内Ｈ－16区〉
Fig.26　調査区位置図……37
Fig.27　土層断面図……38
Fig.28　遺構配置図……39
Fig.29　ＴＲ2遺構配置図……40
Fig.30　ＴＲ4遺構配置図……40
〈教育学部構内Ｊ－19・20区〉
Fig.31　調査区位置図……43
Fig.32　土層断面図……44
Fig.33　遺構配置図……45
Fig.34　溝3・4・5・6実測図……46
Fig.35　溝3出土遺物実測図……47
Fig.36　旧河川跡実測図……48
Fig.37　旧河川跡出土遺物実測図……49
Fig.38　溝7実測図……49
Fig.39　1号土壙実測図……50
Fig.40　2・3号土壙実測図……50
Fig.41　4号土壙実測図……51
Fig.42　第4層出土遺物実測図……52
Fig.43　第11層出土遺物実測図……52
Fig.44　集落変遷模式図……55
Fig.45　Ｌ－14区遺構配置図……61

表　目　次

Tab. 1　1号住居跡主柱穴計測表……17
Tab. 2　2号住居跡主柱穴計測表……19
Tab. 3　3号住居跡主柱穴計測表……21
Tab. 4　4号住居跡主柱穴計測表……22
Tab. 5　竪穴住居跡一覧表……32
Tab. 6　土壙一覧表……33
Tab. 7　竪穴住居平面形態および床面積……56

図　版　目　次

本文対照頁

ＰＬ１　山口大学構内地区割および調査区位置図……９～10
〈教育学部構内Ｈ－19区〉
2 (1) 調査区全景（北から）……11
(2) 調査区遺構検出状況（東から）……11
3 (1) 調査区全景（東から）……12
(2) 調査区全景（北から）……12
4 (1) 1号住居跡検出状況（東から）……16～17
(2) 1号住居跡遺物出土状況（東から）……17
5 (1) 1号住居跡（東から）……17～18
(2) 2号住居跡検出状況（北東から）……19
6 (1) 2号住居跡遺物出土状況（東から）……19
(2) 2号住居跡（北から）……19～21
7 (1) 3・4号住居跡検出状況（北から）……21～22
(2) 3・4号住居跡遺物出土状況（南から）……21～22
8 (1) 3・4号住居跡（南から）……21～22
(2) 1号土壙検出状況（南から）……22～23
9 (1) 1号土壙遺物出土状況（南から）……22～24
(2) 1号土壙（南から）……22～23
10 (1) 2号土壙検出状況（東から）……24
(2) 2号土壙遺物出土状況（東から）……24
11 (1) 2号土壙（東から）……24

(2)　3号土壙検出状況（北東から）……24
12　(1)　3号土壙遺物出土状況（東から）……24～25
(2)　3号土壙（南から）……24～25
13　(1)　4号土壙検出状況（北東から）……25～26
(2)　4号土壙（北東から）……25～26
14　(1)　5号土壙検出状況（南東から）……26
(2)　5号土壙（北東から）……26
15　(1)　6号土壙検出状況（南東から）……26
(2)　6号土壙（北東から）……26
16　(1)　7号土壙検出状況（南から）……26～27
(2)　7号土壙（北から）……26～27
17　(1)　8号土壙遺物出土状況（南から）……27
(2)　8号土壙（南から）……27
18　(1)　溝2・6・7・8検出状況（北東から）……28
(2)　溝2・6・7・8（北東から）……28
19　(1)　溝5遺物出土状況（北西から）……28～30
(2)　溝5（南から）……28～30
〈教育学部構内H－16区〉
20　(1)　調査前全景（東から）……37
(2)　TR2西壁土層断面（東から）……37～39
21　(1)　TR2遺構検出状況（西から）……39～40
(2)　TR2溝（東から）……39～41
22　(1)　TR4西壁土層断面南半部（東から）……37～39
(2)　TR4西壁土層断面北半部（東から）……37～39
23　(1)　TR4遺構検出状況（北から）……39～41
(2)　TR4溝および土壙（北から）……39～41
〈教育学部構内J－19・20区〉
24　(1)　調査前全景（南東から）……43
(2)　調査区全景（北から）……45～46
25　(1)　A地点遺構検出状況（北東から）……45～49
(2)　A地点全景（北東から）……45～49
26　(1)　A地点溝1・2検出状況（北から）……46～47
(2)　A地点溝1・2（北から）……46～47
27　(1)　A地点溝3・4検出状況（東から）……47～48

(2) A地点溝3遺物出土状況（西から）……47
28 (1) A地点溝3（東から）……47
(2) A地点溝3・4（東から）……47～48
29 (1) A地点溝3・4埋土土層断面（東から）……47～48
(2) A地点溝3・4埋土土層断面（東から）……47～48
30 (1) A地点溝5・6検出状況（西から）……48
(2) A地点溝5・6（西から）……48
31 (1) A地点旧河川跡検出状況（北から）……48～49
(2) A地点旧河川跡遺物出土状況（北から）……49
32 (1) A地点旧河川跡（北から）……48～49
(2) A地点旧河川跡埋土土層断面（北から）……48～49
33 (1) B地点遺構検出状況（北から）……50～52
(2) B地点全景（北から）……50～52
34 (1) B地点溝7（北西から）……50
(2) B地点1号土壙（東から）……50～51
35 (1) B地点2・3号土壙検出状況（西から）……51
(2) B地点2号土壙（西から）……51
36 (1) B地点3号土壙（西から）……51
(2) B地点4号土壙（東から）……51
37 (1) H－19区1号住居跡出土遺物……17
(2) H－19区2号住居跡出土遺物……19
38 (1) H－19区3号住居跡出土遺物……21
(2) H－19区4号住居跡出土遺物……22
(3) H－19区6号土壙出土遺物……26
(4) H－19区1号土壙出土遺物……24
39 (1) H－19区3号土壙出土遺物……25
(2) H－19区7号土壙出土遺物……27
(3) H－19区溝6出土遺物……30
(4) H－19区溝5出土遺物……29
40 (1) H－19区溝5出土遺物……29
(2) J－19・20区溝3出土遺物……47
(3) J－19・20区旧河川跡出土遺物……49

第１章　山口大学構内吉田遺跡の位置と環境

吉田遺跡は山口県山口市大字吉田、山口大学構内約720,000 m²にわたって埋存する遺跡群の総称である。山口市は本州の最西端にあたる山口県のほぼ中央部に位置し、南北約12 km、東西最深部約４kmの紡錘形の盆地内にひらける。四周を囲繞する山塊は、北には涼山、古城ヶ岳、鋤尖山がそびえ、南には姫山、今山、高倉山、黒河内山が迫っている。また、東方は粟ヶ岳、西方は泉山、金山が盆地を閉ざすように展開し、台地をめぐる山塊の谷口には谷頭池が点在している。これらの諸山塊に源を発する入野川、一の坂川、吉敷川、仁保川は椹野（ふしの）川となって合流し、盆地中央部を南西に貫流して小郡湾へと注いでいる。

本遺跡はこの山口盆地の東縁部にあたり、椹野川左岸の沖積低地ならびに洪積台地上に展開する。すなわち、遺跡西部は椹野川の浸食により形成された平川面と呼ばれる沖積段丘上[1]に開析された沖積低地の一端を占め、東部は盆地内に入り込むように近接して伸びる姫山および今山から派生した丘陵南麓の洪積台地上に立地する（Fig.１）。

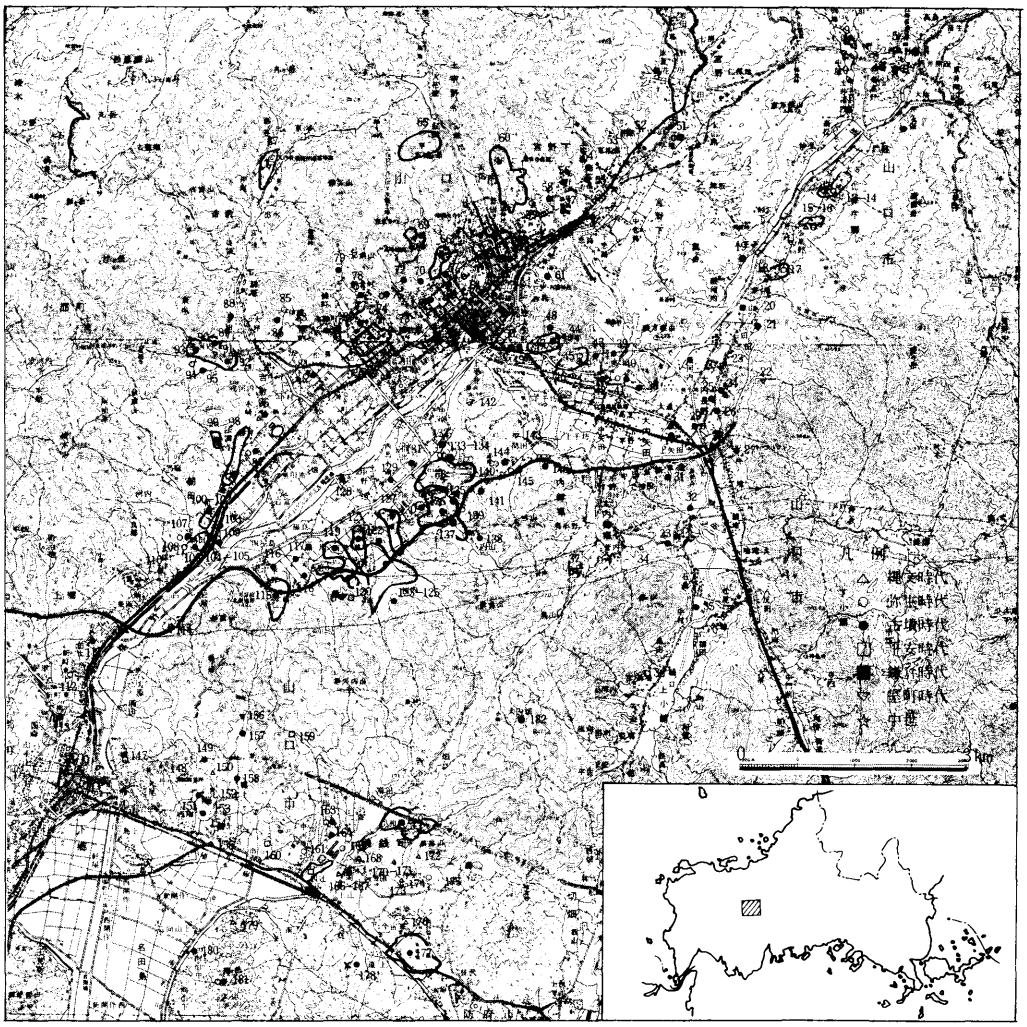
山口盆地周辺では旧石器時代から歴史時代にわたって約200ヶ所以上の遺跡の存在が確認されており、盆地内では本遺跡同様椹野川の氾濫原を除く沖積低地ならびに岡ノ原、桜畠、吉田などに形成された洪積台地上[2]に約100ヶ所以上の遺跡[3]が知られている。

盆地内における最初の人々の営みは、椹野川右岸においては花の木遺跡[4]、後河原遺跡[5]、木崎遺跡[6]等の縄文時代後期から晩期にかけての遺跡に散発的に認められ、盆地に南面する三つの山塊から派生したそれぞれの微丘陵上をそのフィールドとしている。左岸においては本遺跡から晩期の浅鉢形土器を出土した土壙等が検出されている。

弥生時代になると前代の遺跡を背景に沖積低地を臨む丘陵上あるいは山裾の小低湿地にその拠を拡大してゆく。すなわち、右岸では宮野岡の原遺跡[7]、江良遺跡[8]、亀山遺跡[9]、下東遺跡[10]、朝倉大歳遺跡[11]、伊梶堤遺跡[12]、荻峠遺跡[13]等の集落跡、朝田墳墓群[14]等の埋葬跡として展開する。

下東遺跡では主として前期末から中期初頭にかけての土壙36基、溝４条が検出されており、内部から土器のほかに石包丁、扁平片刃石斧、砥石等の遺物およびイネ科を中心とした各種の植物遺体が出土している。調査区域内においてこの時期の住居跡は検出されておらず、また、遺跡の立地、遺構の性格等から推して遺跡の規模はさらに広範囲にわたるものと思われ、住居跡・墓地との連関をうかがわせる資料の増加が期待される。

山口大学構内吉田遺跡の位置と環境



1	吉田遺跡	32	畠田遺跡	63	後河原遺跡	94	滝河内遺跡	125	中村遺跡	156	陶一里塚
2	原河内遺跡	33	毛割遺跡	64	亀山遺跡	95	若宮遺跡	126	五反地遺跡	157	峠堤遺跡
3	笠山経塚	34	原遺跡	65	古城ヶ岳城跡	96	木崎遺跡	127	小路遺跡	158	こぶし堤遺跡
4	梨畑遺跡	35	石畠遺跡	66	鴻ノ峰古墳群	97	太田遺跡	128	中島古墳	159	糸根山遺跡
5	植松遺跡	36	中ヶ迫経塚	67	白石古墳群	98	朝田墳墓群	129	馬木遺跡	160	鋳銭坊遺跡
6	高野台遺跡	37	仁平寺跡	68	茶臼山古墳	99	法満寺遺跡	130	上両家遺跡	161	下糸根遺跡
7	瑠璃光寺跡	38	金成古墳	69	高嶺城遺跡	100	和田上遺跡	131	郷遺跡	162	周防鋳銭司遺跡
8	台山遺跡	39	妙見社古墳群	70	糸米遺跡	101	和田下遺跡	132	日吉神社横穴群	163	糸根遺跡
9	船山経塚	40	高尾古墳群	71	山口高校遺跡	102	和田古墳	133	坂本遺跡	164	八ヶ坪遺跡
10	西遺跡	41	仏供田遺跡	72	木戸神社古墳群	103	三作遺跡	134	平井遺跡	165	上北田遺跡
11	平子氏館跡	42	山崎古墳	73	權現山古墳	104	大地西角遺跡	135	平清水石棺	166	東禅寺遺跡
12	片山ヶ原遺跡	43	山崎遺跡	74	荻峠遺跡	105	王子の森墳墓群	136	大塚遺跡	167	黒山遺跡
13	仁保岡の原遺跡	44	西ヶ谷遺跡	75	祇園ヶ森古墳	106	坊ヶ迫遺跡	137	吉田岡畠遺跡	168	舟木遺跡
14	丸山遺跡	45	入野石棺	76	湯田桑里跡	107	門前石棺	138	神郷大塚遺跡	169	和西遺跡
15	小高野遺跡 Ⅰ	46	入野遺跡	77	朝倉河内古墳群	108	門前遺跡	139	乗ノ尾石棺群	170	桐ヶ谷遺跡
16	小高野遺跡 Ⅱ	47	馬塚古墳	78	朝倉大歳遺跡	109	門前古墳	140	吉田大浴遺跡	171	尾口山遺跡
17	東園石棺	48	御堀遺跡	79	朝倉遺跡	110	仁保津遺跡	141	大浴古墳	172	壺釜遺跡
18	東園遺跡	49	御堀石棺	80	楠木町遺跡	111	丸山石棺群	142	姫山城跡	173	天神原遺跡
19	深野氏館跡	50	橋村石棺	81	生目八幡古墳	112	中郷遺跡	143	問田氏館跡	174	弥市原遺跡
20	上南原遺跡	51	宮野岡の原	82	赤妻古墳	113	国森石棺	144	問田山崎遺跡	175	星原遺跡
21	釜山遺跡	52	上窓路古墳	83	土師宮古墳群	114	林覚遺跡	145	問田遺跡	176	河原遺跡
22	四王寺遺跡	53	花の木遺跡	84	下東遺跡	115	堂道遺跡	146	新開古墳	177	長沢池遺跡
23	宮の馬場遺跡	54	庵河内遺跡	85	伊梶堤遺跡	116	平野遺跡	147	百谷遺跡	178	道の上遺跡
24	長野遺跡	55	上ノ山古墳	86	大判石棺	117	堂山古墳群	148	陶窯跡	179	潟上遺跡
25	大塚古墳群	56	平野古墳	87	凌霄寺遺跡	118	吉野遺跡	149	郷山遺跡	180	向山遺跡
26	荒神山石棺	57	三の宮古墳	88	泉山古墳群	119	西遺跡	150	百田遺跡	181	陶ヶ岳遺跡
27	長者ヶ原遺跡	58	竹の花遺跡	89	天神山古墳群	120	黒川遺跡	151	釜山遺跡	182	大内畑古墳
28	下長野遺跡 Ⅱ	59	江良遺跡	90	堂道古墳	121	岡小路遺跡	152	野津窯跡		
29	下長野遺跡 Ⅰ	60	七尾山城跡	91	吉敷毛利屋敷跡	122	広沢寺古墳	153	陶氏館跡		
30	生森古墳	61	古熊遺跡	92	天神山古墳	123	小出遺跡	154	地家遺跡		
31	神田山石棺群	62	大内氏館　鴬山遺跡	93	滝河内古墳	124	河内遺跡	155	柏木遺跡		

Fig. 1　山口盆地周辺地形図および遺跡分布図

朝倉大歳遺跡、伊梶堤遺跡は中期の遺跡として把握されている。

朝田墳墓群ではその詳細な時期は不明であるが、前期末の壺棺墓をはじめ丘陵の尾根上に主体は中期から後期にかけての土壙墓、石蓋土壙墓、石囲い墓、箱式石棺墓等が検出されており多様な葬法がみられる。また、相互に質的差異が認められないことなどから集団家族墓的色彩が強いものと推察されている。左岸では問田遺跡、坂本遺跡、吉田遺跡[15]等の集落跡、問田山崎遺跡、乗ノ尾石棺群[16]等の埋葬跡が知られているにすぎず、その内容については不明な点が多い。

このように概観すると、比較的早い時期に盆地の北西縁、東縁に相対峙し占地した下東、吉田の両遺跡付近がこの時期の中核的集落としての性格を有していたであろうことは、後代の高塚墳の造営ならびにその前面に広がる肥沃な生産基盤としての沖積低地の存在その他からも推察しうるのである。

古墳時代を迎えると遺跡数は飛躍的に増大し、現在までに300基以上の墳墓、30ヶ所以上の集落跡および遺物包含地が知られている。

墳墓は標高60m以下の盆地縁辺部の低丘陵地および盆地床の独立丘陵上に営まれてはいるものの、朝田墳墓群の一部の例を除いて見られるように傑出した首長者層の墳墓としての高塚墳は天神山古墳群[17]の出現に待たねばならない。すなわち、竪穴式石室を内部主体にもつ1号墳からは短甲1領のほか武器、農工具が出土し、その形式から5世紀前半に位置づけられている。次いで5世紀後半になると天神山古墳群の東方、直線距離にして約5kmを隔てた丘陵先端部に赤妻古墳[18]が構築される。内部主体は舟形石棺、箱式石棺で、位至三公鏡、巴形銅器などすぐれた副葬品が出土した。6世紀に到ると強力な首長者層の未分化に伴い個々の可耕地に裏打ちされた小規模な家族墓的様相を帯びるようになり、北部九州から招来された竪穴系横口式石室や横穴墓あるいは小円墳をもつ横穴式石室への埋葬へとその葬法を転換してゆく。鴻ノ峰古墳群[19]、朝倉河内古墳群[20]、茶臼山古墳[21]などがそれである。本遺跡周辺では5世紀代に椹野川右岸においてみられた豊富な副葬品を備えた高塚墳は未発見で、わずかに日吉神社横穴群[22]、広沢寺古墳[23]、大浴古墳[24]等の6世紀から7世紀にかけての墳墓が知られているにすぎない。

集落跡は丘陵の先端部あるいは小河川により形成された扇状地を中心に営まれ、下東遺跡、本遺跡等で竪穴式住居が検出されている。また、糸米遺跡、湯田楠木町遺跡[25]、和田遺跡、堂道遺跡[26]等をはじめとする遺物包含地の位置づけも今後の興味ある課題である。

律令制下における本遺跡周辺は、『防長地名淵鑑』および『山口県文化史』によれば、

吉敷郡浮囚郷に比定されている。この時代における盆地内の遺跡はあまり知られておらず、わずかに黒川遺跡[27]等における掘立柱建物跡、溝などにより知るのみである。

下って室町時代になると、大内氏ゆかりの遺跡が数多く残されるようになる。国指定史跡として著名な大内氏館跡、築山館跡、高嶺遺跡、凌雲寺跡などである。大内氏館跡の発掘調査は昭和53年から計画的に実施されており掘立柱建物跡、園池、溝、土塁等が検出されている。また、各遺構からは土師器、瓦器、軒平・軒丸瓦、陶磁器、鞴口、鉱滓などの多様な遺物が出土しており[28]当時が偲ばれる。

しかし、栄華を誇った大内氏も31代義隆のとき陶氏の力に屈し、以後、大内氏第一の家臣であった毛利氏の治世へと歴史の舞台は移ってゆく。

〔註〕
(1) 山口県立山口博物館 「山口県の地質」 1975
(2) 註(1)に同じ。
(3) 山口県教育委員会 「山口県遺跡地図」 1972
山口市教育委員会 「山口市文化財地図」 1981
(4) 昭和38年に土器、石器等が採集されている。
(5) 昭和27年に遺物が採集されている。三坂圭治 「山口県の歴史」
(6) 山口県教育委員会 「朝田墳墓群Ⅰ・木崎遺跡」 山口県文化財調査報告第32集 1976
(7) 昭和26年に弥生式土器、石鏃等が採集されている。
(8) 山口市史編纂委員会 「山口市史―名説篇―」 1971
(9) 亀山公園北麓から弥生式土器、磨製石斧、叩石等が出土している。弘津史文「防長石器時代資料」1929
(10) 山口県教育委員会 「下東遺跡・荻峠遺跡」 山口県埋蔵文化財調査報告第30集 1975
(11) 出土遺物は山口市歴史民俗資料館に保管されている。
(12) 山口考古学談話会における森田孝一氏の発表資料による。
(13) 註(10)に同じ。
(14) 註(6)に同じ。
山口県教育委員会 「朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰1号墳」 山口県埋蔵文化財調査報告第33集 1977
同 上 「朝田墳墓群Ⅲ」 山口県埋蔵文化財調査報告第37集 1978
同 上 「朝田墳墓群Ⅲ－B Ⅳ・糸米遺跡」 山口県埋蔵文化財調査報告第45集 1979
(15) 小野忠熙 「山口大学吉田遺跡」『考古学ジャーナル』 第9号 1967
同上 「山口大学構内吉田遺跡の性格」『学園だより』 第6号 山口大学 1970
山口大学吉田遺跡調査団 「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」 1976
(16) 山口県教育委員会 「美祢市内川古墳・山口市乗ノ尾遺跡」 山口県埋蔵文化財調査報告第24集
現在、平清水八幡宮境内に移築復原されている。
(17) 山口市教育委員会 「天神山古墳」 山口市埋蔵文化財調査報告第8集 1979
(18) 弘津史文 「周防國赤妻古墳並茶臼山古墳(其一)」『考古学雑誌』 18－4 1928
(19) 註(14)と同じ。
(20) 朝倉河内古墳群発掘調査委員会 「朝倉河内古墳群調査報告」 山口市埋蔵文化財調査報告第4集 1975
(21) 弘津史文 「周防國赤妻古墳並茶臼山古墳(其二)」 『考古学雑誌』 18－5 1928
(22) 大正7年に地元の青年団により調査が行なわれ、金環、鉄剣、須恵器等が出土している。出土品は山口県立山口博物館に保管されている。
(23) 横穴式石室を内部主体にもつ小円墳。
(24) 山口県教育委員会 「吉田岡畠・吉田大浴・下長野遺跡」 山口県埋蔵文化財調査報告第23集 1973
(25) 山口市教育委員会 「湯田楠木町遺跡第Ⅰ地区」 山口市埋蔵文化財調査報告 1975
同 上 「湯田楠木町遺跡第Ⅱ地区」 山口市埋蔵文化財調査報告第5集 1976
(26) 山口県教育委員会 「堂道・五反地遺跡」 山口県埋蔵文化財調査報告第22集 1973
(27) 同 上 「黒川遺跡」 山口県埋蔵文化財調査報告第57集 1980
(28) 山口市教育委員会 「大内氏館跡Ⅰ」 山口市埋蔵文化財調査報告第9集 1981
同 上 「大内氏館跡Ⅱ」 山口市埋蔵文化財調査報告第10集 1980
同 上 「大内氏館跡Ⅲ」 山口市埋蔵文化財調査報告第11集 1981

第２章　山口大学構内吉田遺跡の概略

現在の大学キャンパス内に遺跡が埋存している可能性は、遺物の散布から昭和20年代より予想されていた。しかるに、大学が昭和41年からこの地へ統合移転した際、工事中に遺物の出土をみたことが契機となって構内遺跡の調査、研究が開始された。当初は遺溝、遺物の有無および遺跡の範囲確認調査が主として実施され、翌昭和42年には学長を団長に小野忠熙氏を中心とした関連分野の専門家によって山口大学吉田遺跡調査団が組織され、統合移転諸工事にともなう発掘調査に着手しながら、吉田遺跡の内包する諸要素の抽出ならびに全体像の解明へと動き出した。そして、昭和53年には山口大学埋蔵文化財資料館が設立され、調査団の業務は着実に継承、発展されることになった。

調査団は大学キャンパス内を五地区に大別し、必要に応じてその内部に小地区を設定しながら発展調査を行なっている(Fig.2)。この大略は調査概報[註(1)(2)(3)]等によって知りうるが、現在当資料館に保管されている資料も合わせてその結果の概要を述べておく。

第Ｉ地区

キャンパス内の北部にあたり、姫山南麓から南西に伸びる低い洪積台地およびその周縁の沖積段丘上に立地する。標高約23ｍ、現水田面との比高は約４ｍである。発掘調査はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅの五つの地点で行なわれている。Ａ、Ｂ両区では発掘面積が狭いため、須恵器、土師器の包含層、弥生時代中期の竪穴住居跡と思われる掘り込みおよび柱穴群を確認するにとどまっている。Ｃ区は西方に伸びた台地が低地に接するあたりの傾斜変換点付近にあたり、３基の弥生時代後期の土壙、古墳時代に属するものと思われる２基ないしは３基の竪穴住居跡、土壙、溝状遺構等が検出されている。また、調査区全域にわたって古墳時代から歴史時代にかけての柱穴が数多く認められた。Ｄ区では排水溝掘削にともない７ヶ所で調査が行なわれ、第４地点で弥生時代中期の円形プランをもつ竪穴住居跡、第３・第６地点で古墳時代の竪穴住居跡をそれぞれ１基検出している。また、第３地点を除く各地点で溝が検出されているが、第５地点と第１地点に認められる弥生時代中期の溝および第２地点と第６・７・４地点に認められる弥生時代の溝との２条に集約されると調査者は述べている。Ｅ区は第Ｉ地区の東方標高約24ｍの台地に位置し、弥生時代および歴史時代の遺物包含層の下部に各時期、各種の遺構・遺物を確認している。竪穴住居跡は古墳時代前期のものが６基認められ、形状不明の２基を除いて一辺3.2ｍから5.0ｍの方形およ

び長方形の平面プランを持ち、いずれも壁溝を有していた。このうち2号住居跡からは東壁中央部付近を径約30cmの半円形に掘り込んだ造り付けの竈が検出された。また、4号住居跡は火災住居と想定され床面に焼土や住居の構造材の炭化物が出土した。この他、古墳時代後期の杭列をもつ溝、竪穴住居跡と同一埋土の土壙2基、歴史時代の柱穴等を検出している。出土した遺物は土器、石器のほかに土錘、金属器等多種にわたる。

第II地区

洪積台地上に立地する約30,000m²のうち南部の約2,000m²について調査を実施しており、古墳時代の竪穴住居跡および歴史時代の柱穴群が検出されている。また、調査区域内から結晶片岩の板石や埴輪等が採集されている。

第III地区

大学キャンパスの南西部にあたる地域で、沖積低地の最奥部に位置する。現在はグラウンドおよび野球場となっている。調査は四ヶ所について実施されている。トレンチを設定した試掘調査が行なわれた東南区と呼ばれる地点では、弥生時代前期および中期の竪穴住

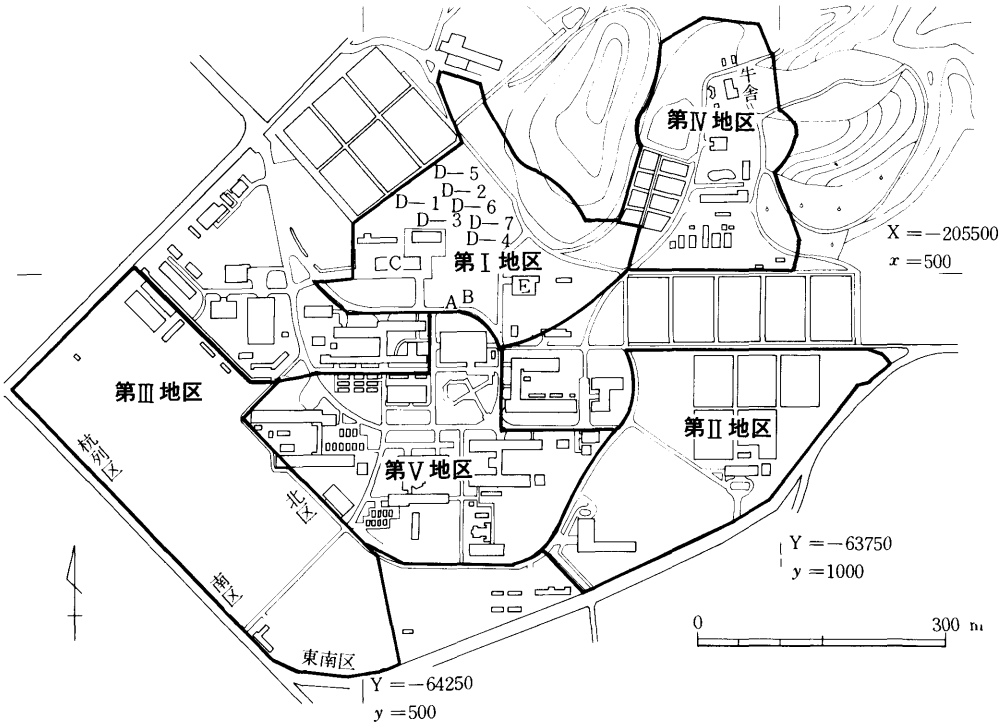


Fig. 2　吉田遺跡旧調査区区分図

居跡が検出されたという。南区では1,600㎡の調査区域内で砂礫層および青灰色粘土層の堆積する幅約60ｍの河道が検出されており、下部に堆積する砂礫層より縄文時代晩期の土器片が出土した。また、その流路に堆積した黒色粘土層や泥炭層中からは弥生時代前期から後期の土器、須恵器、土師器、石錘、紡錘車、木製鋤のほか多種の植物遺体が出土している。南区の東北約 120 ｍにあたる北区における調査では、14基の竪穴住居跡をはじめとして多数の土壙、溝、柱穴等が知られている。旧来は水田として利用されていた地域で、キャンパス造成時による平坦化が起因して表土下約20ないしは30㎝で遺構上面が検出される。現在資料整理中でその詳細は不明であるが、少なくとも弥生時代中期中葉から後半にかけてのもの２基、中期後半から後期初頭にかけてのもの６基、古墳時代前期のもの１基の３時期に大別される。各住居跡はいずれも削平が著しく、側壁の残存高は平均約10㎝前後で、壁溝あるいはわずかに残存する側壁等によってその存在の判断されるものもある。検出された住居跡のうち13号竪穴住居跡は火災住居で、約7.6ｍ×8ｍの長方形の平面プランをもつ。屋内施設として西側を除いた三側壁に沿って幅1.0ｍから1.5ｍのベッド状遺構、中央部に直径65㎝、深さ16㎝の円形の炉跡、また南部に1.5ｍ×1.0ｍの楕円形の掘り込み（調査者によると炊事場）が認められたという。さらに梍木と思われる炭化材が約20本放射状に検出されたことなどから寄棟造の住居を想定している。各種の遺構から出土した遺物は弥生時代前期から後期の土器、須恵器、土師器などの土器類のほかに石鏃、石包丁、凹石、紡錘車等の石器類および管玉、小玉などである。なお、この地域は学内の協力を得て現地保存がなされている。北区の西、南区の北西にあたる杭列区と呼ばれている地域では、層位的に三段階の杭列を検出し、「上位は現在の杭で……(中略)……層位的に古い下位は矢板に似た割り材を密に打ち込んでおり、中位の杭列は小丸材を用い」て構築されていたという。各杭列にともなう遺物は不明瞭で時期比定については今後の検討を要する。

第Ⅳ地区

大学キャンパスの東北部にあたり、南にのびる二つの丘陵の縁辺部とこれらに狭まれた谷あいの地域である。附属農場牛舎新営にともない発掘調査が実施された。その結果、弥生時代の土壙１基、溝状遺構１条、古墳時代後期の竪穴住居跡２基以上および瓦器を出土した歴史時代の竪穴住居跡が検出されている。遺構は削平が著しく、遺物もまた磨滅の進んだ破片が大半である。

第Ⅴ地区

大学キャンパスのほぼ中央部分から南部にかけての地域である。黒色、暗青灰色のシル

トおよび粘土層や泥炭層が堆積しており遺構はほとんど検出されていない。しかし、南西部において河川跡が検出され、内部から弥生式土器、土師器が出土している。

以上、調査団による発掘調査の成果を概観してきたわけであるが、調査区外の地域、例えば第Ⅰ地区の東方や西方の地域あるいは第Ⅲ地区東南区の東方の地域などにおいては資料が欠如している為、その内容について言及することは甚だ困難な状況にある。

〔註〕
(1) 小野忠熙 「山口大学吉田遺跡」『考古学ジャーナル』 第9号 1967
(2) 同上 「山口大学構内吉田遺跡の性格」『学園だより』 第6号 山口大学 1970
(3) 山口大学吉田遺跡調査団 「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」 1976

第３章　昭和56年度山口大学構内吉田遺跡の調査

第１節　昭和56年度山口大学構内吉田遺跡調査の概要

山口大学埋蔵文化財資料館は昭和53年発足以来、建物の新営およびその他の掘削工事に先だって関連部局をはじめとして学内、学外の全面的な協力を得て事前に調査を実施してきた。その際、埋設管工事、キャンパス内環境整備等にともなう諸工事の予定地においては立合調査を実施し、施設整備等にともなう建物新営工事の予定地においては吉田遺跡調査団による周辺地域の発掘調査を勘案し、試掘調査によって本格的な調査が必要であると認められた地区について事前調査を実施している。

本年度は試掘調査を含めた事前調査として下記の３件の予定地について実施した。

教育学部校舎新営予定地　（Ｈ－19区、ＰＬ.1－１）

教育学部音楽棟新営予定地　（Ｈ－16区、ＰＬ.1－２）

教育学部美術科・技術科実験実習棟新営予定地　（Ｊ－19・20区、ＰＬ.1－３）

校舎新営予定地における発掘調査では弥生時代中期から後期の竪穴住居跡４基、土壙８基、溝４条、柱穴、歴史時代の土壙、溝等が検出された。このうち弥生時代後期に属すると思われる円形の平面プランをもつ竪穴住居跡は外方へ階段状に張り出したテラスをもち、非常に特異な形態を有していた。また、本調査区は現地保存されている吉田遺跡調査団の呼称する第Ⅲ地区の北区に近接しており、キャンパス内において検出された個々の住居跡の時間的、空間的まとまりおよび推移を把握するうえで貴重な資料であるとの判断にもとづき保存の要請を行なった。その結果、周辺地域において将来検出されることが予想される同様な遺構についての資料を集積し、あわせて集落跡として吉田遺跡を明確に位置づけるべく記録保存による措置が講ぜられた。

また、立合調査においては下記の８件について実施した。

正門橋脚新営工事　（Ｈ－11区、ＰＬ.1－４）

時計塔埋設工事　（Ｈ－14区、ＰＬ.1－５）

本部構内擁壁工事　（Ｋ－14区、ＰＬ.1－６）

教養部構内擁壁工事　（Ｉ－17区、ＰＬ.1－７）

構内循環道路舗装工事　（　構内　、ＰＬ.1－８）

農学部中庭整備工事　　（Ｏ－17区、ＰＬ.1－９）
暖房施設改修工事　　（Ｏ－16区、ＰＬ.1－10）
学生部文化会車庫新営工事　（Ｌ－８区、ＰＬ.1－11）
学生部馬場整備工事　　（Ｍ－８・９区、Ｎ－８・９区、ＰＬ.1－12）

教養部擁壁工事、暖房施設改修工事、学生部文化会車庫新営工事については、埋蔵文化財に支障のない範囲内での工法等の配慮を求めた。掘削深度の浅い時計塔埋設工事、本部擁壁工事、構内循環道路舗装工事、農学部中庭整備工事においては、過去の調査資料の僅少さを補足し、将来の建物計画等を配慮して土層観察を目的とした立合調査を実施した。学生部馬場整備工事では、北方、東方から延びる丘陵がこの地区において著しく削平をうけており、表土下部はすでに三群変成岩よりなる岩盤となっていた。

第２節　教育学部構内Ｈ－19区の発掘調査

１　調査目的および経過

調査地区は大学キャンパスの西側、吉田遺跡調査団旧調査区でいう北区にあたり、昭和42年の発掘調査で検出された弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡十数基、土壙、溝等の一部が現地保存されている遺跡保存地区の北西約50ｍに位置する(Fig.3, PL.2－(1))。本地区への教育学部講義棟新営に伴い昭和56年３月16日から26日まで約10日間試掘調査を行なった。

調査当初よりこれらと相関する遺構、遺物の埋存が予想されたため新営予定地内西部と南部に幅２ｍの直交する２本のトレンチを設定し土層の堆積状況ならびに遺構の有無を観察した。この結果、弥生時代後期の竪穴住居跡をはじめとして土壙、溝、柱穴を確認した。これを受けて他の予定地内全域にトレンチと併行して設定した３ｍ方眼のグリッドにより遺構の有無および分布範囲の把握に努めた。東部では排水管埋設工事その他により幅１ｍから２ｍ、長さ15ｍにわたって破壊されていたものの、縄文時代の土壙、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡、土壙、溝、柱穴および歴史時代の溝が全域にわたって埋存していることが確認された。

上記の所見にもとづき新営工事予定地全域約400 ㎡について昭和56年４月13日から７月18日までの約４ヶ月間発掘調査を実施した。

なお、腐蝕土および構内造成時の置土は機械を使用して排除した。また、試掘調査の段階で未検出であった１号住居跡および８号土壙西側部分については遺構としての完結性を重視し調査区域を拡張して調査を行なった。

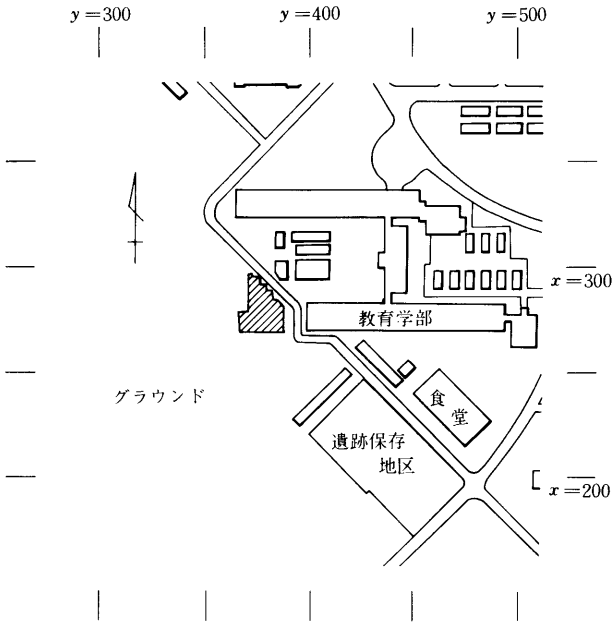


Fig. 3　調査区位置図（3600分の１）

2　層序

調査区域の現地表面の標高は約18.80ｍで地点により堆積状態に差異はあるがほぼ平担である。現在はラグビー場として活用されており、東側および北側を走る道路より約10cmから50cm低くなっている。

遺構が検出される地山面までの層序は８層に区分される（Fig.4）。すなわち、上位から第１層：腐蝕土層、第２層：構内造成時の置土、第３層：暗灰色砂質土層、第４層：黄灰褐色砂質土層、第５層：褐色粘質土層、第６層：黄褐色微砂土層、第７層：灰褐色砂質土層、第８層：茶褐色粘質土層となっている。第１層はラグビー場設営の際の化粧土等を指し、第２層の攪乱土層とは便宜上区別した。第２層は調査区域内全域にみられるが、東部、北部は約40cmの堆積で西部、南部にくらべて約20cm厚く置土を行なっている。第３層は水田耕作土であり２枚の水田を確認した。大学移転前のキャンパス内には水田が営まれており、$x=295$、$y=342$付近から$x=307.5$、$y=359.5$付近を結んだ北西への落ち込みラインは現在の学外の水田地割と一致している。第４層はいわゆる床土で５cmから10cmの堆積を示し、Ｄ－Ｄ′において第３層との整合関係をとらえることができる。第５層は南西部においてわずかにみられる程度で遺物は包含していない。第６層は褐色粘質土がブロック状に混入しており、第５層と同一層に取扱ってよいのかもしれない。第７層は調査区中央部に集中して堆積しており、縄文時代晩期の条痕文土器を包含していた。第８層は砂礫を若干含み所々に堆積している。地山は宇部火山灰層と呼ばれるややシルト味を帯びた黄褐色粘質土であり、中央部および北西部においては砂礫層となっている。調査終了後に調査区南壁に沿って幅50cmのトレンチを設定したところ黄褐色粘質土は砂礫層の上位に堆積していることが確認された。

調査区内は近世以後かなり削平を受けているものと思われ、竪穴住居跡は数cmの壁高を残すのみであった。遺構上面の標高は南東部で18.40ｍ、一段下がった北西部では18.20ｍ前後で両地区ともほぼ平担であるが、溝６でみると北西部におけるその深さが南東部にくらべて深く、また、約20cmの比高を考慮すると遺構が営まれた時点では南東部から北西部あるいは東部から西部へ緩やかに地形が傾斜していたことを窺わせる。このことは、本調査と併行して約20ｍ西方で実施したラグビー場ポール移設工事に伴う立合調査で地山は少なくとも現地表面から約1.2ｍ下部まで確認されていないことからも推察される。

3　遺構と遺物

検出した遺構は竪穴住居跡、土壙、溝、柱穴である（Fig.5，PL.2－(2)，3）。

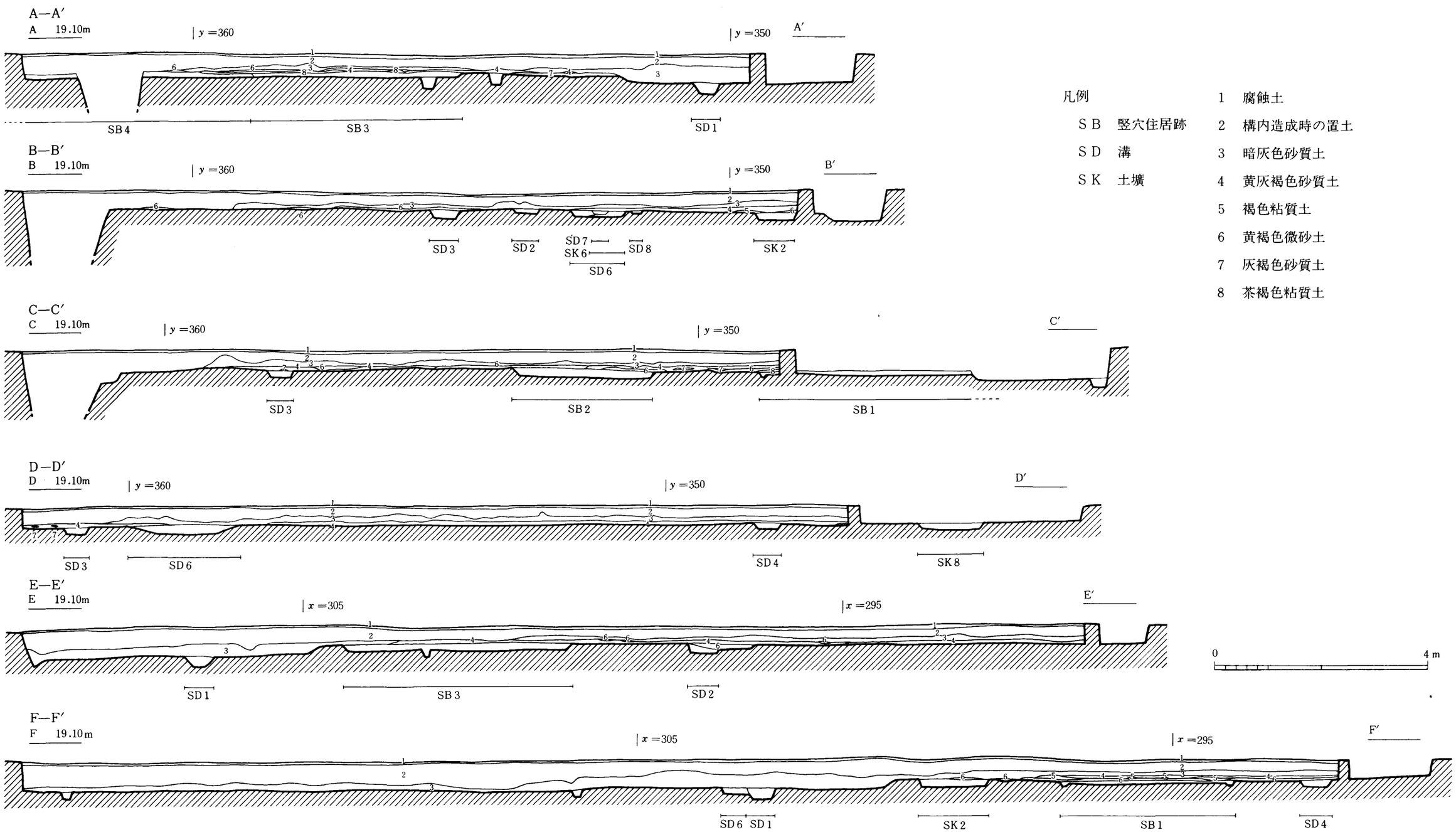

A—A′
A 19.10m
y =360
y =350
A′
SB 4
SB 3
SD 1
B—B′
B 19.10m
y =360
y =350
B′
SD 3
SD 2
SD 7
SK 6
SD 8
SD 6
SK 2
C—C′
C 19.10m
y =360
y =350
C′
SD 3
SB 2
SB 1
D—D′
D 19.10m
y =360
y =350
D′
SD 3
SD 6
SD 4
SK 8
E—E′
E 19.10m
x =305
x =295
E′
SD 1
SB 3
SD 2
F—F′
F 19.10m
x =305
x =295
F′
SD 6
SD 1
SK 2
SB 1
SD 4
凡例
ＳＢ 竪穴住居跡
ＳＤ 溝
ＳＫ 土壙
1 腐蝕土
2 構内造成時の置土
3 暗灰色砂質土
4 黄灰褐色砂質土
5 褐色粘質土
6 黄褐色微砂土
7 灰褐色砂質土
8 茶褐色粘質土
0
4 m

Fig. 4 土層断面図

調査区域内北西部は削平によりわずかに溝と柱穴を検出しえたにとどまったが、その他の地域においては遺構床面まで削平を受けておらず、比較的濃密な遺構の分布状態が確認された。

以下、各遺構および出土遺物について順次詳述することにする。

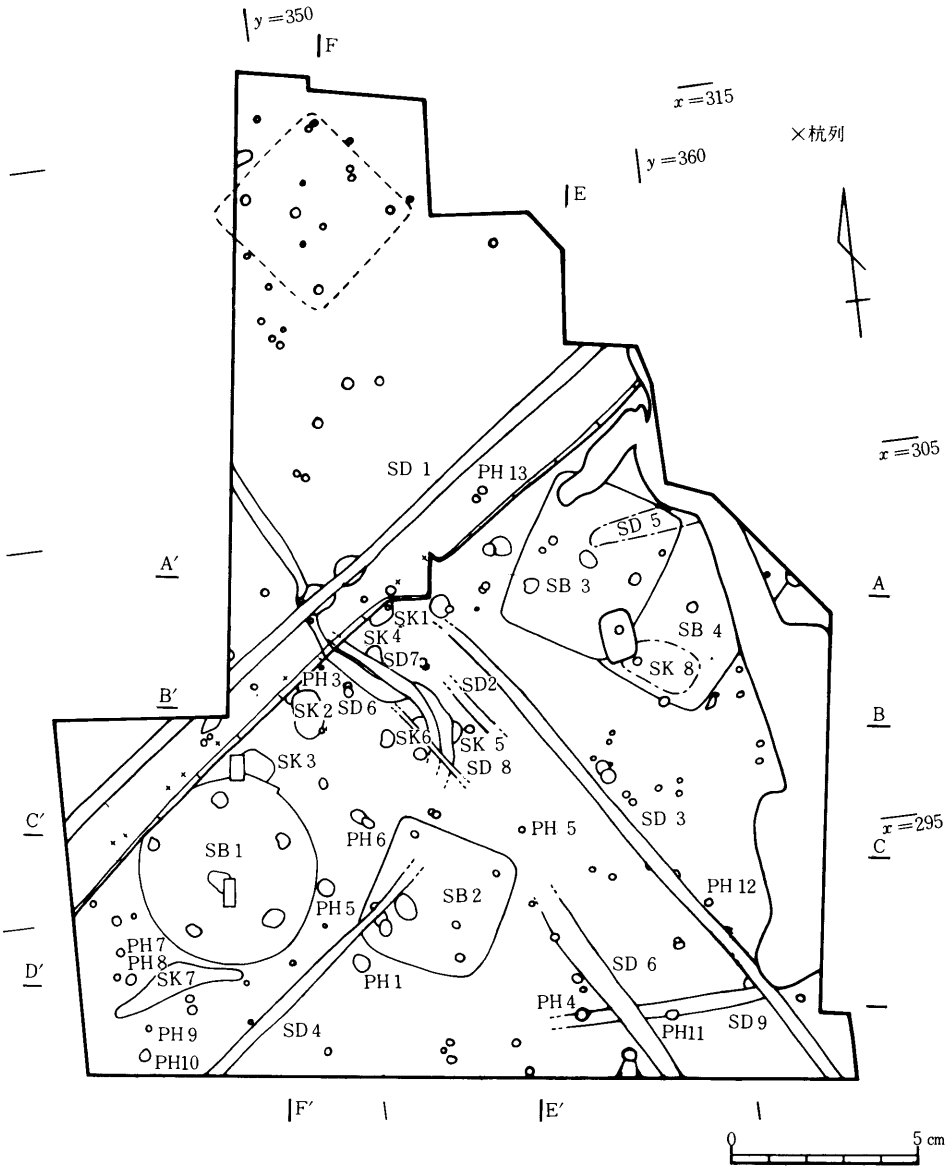


Fig.5 遺構配置図(200分の1)

(1)　住居跡

１号住居跡

調査区内南西隅において検出された住居跡である(Fig.6, PL.4～5)。土壙３を切っており、北西部の一部は水田造営の際に削平を受け消失している。平面形態は円形で径4.95m、床面積19.2m²の規模をもつ[1]。床面には５本の主柱を有し、柱間はＰ1－Ｐ2が216cm、Ｐ2－Ｐ3が246cm、Ｐ3－Ｐ4が246cm、Ｐ4－Ｐ5が222cm、Ｐ5－Ｐ1が220 cmである。炉跡と思われる70cm×44cm、深さ18cmの楕円形の掘り込みは南部に偏在し、内部に炭化物および焼土

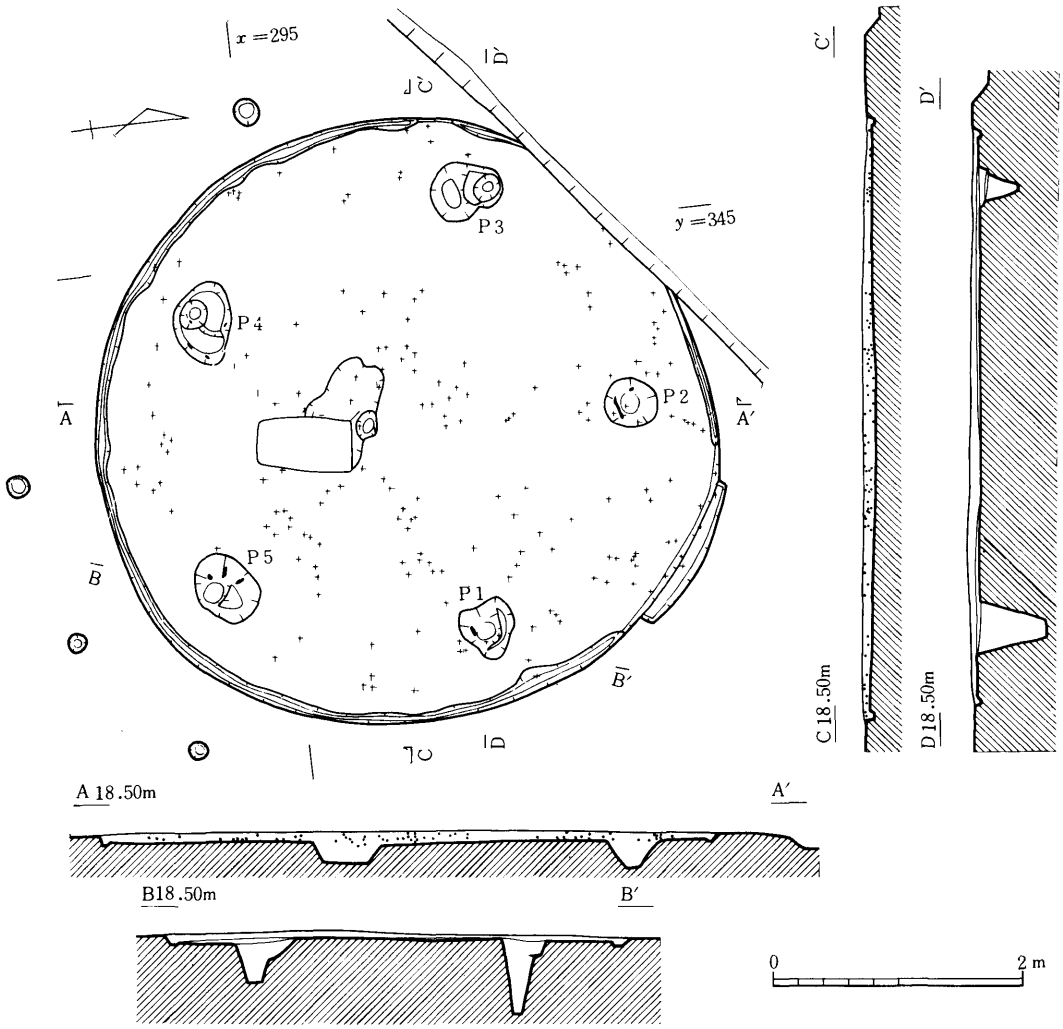


Fig. 6　１号住居跡実測図(1/60)

粒子が認められた。周壁は床面から6cm残存しており壁下には幅6～20cm、床面からの深さ3cmの壁溝がめぐっている。

また、北部では周壁に沿って幅15cm、長さ120cmにわたって外方へ弧状に張り出した階段状のテラスをもち、階段部分は堅く踏みしまっていた。出入口としての機能をもつものかもしれない。なお、このテラス状の施設および西部の一部では壁下に壁溝は検出されなかった。

Tab.1　1号住居跡主柱穴計測表（単位：cm）

要素＼柱穴番号		P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
平面形態		不整五角形	円形	不整楕円形	楕円形	楕円形
径	上面径（長軸×短軸）	44	43	57×33	64×47	57×46
	底面径	14	18	15	12	17
深さ		59	22	34	39	38
中心からの距離[2]		197	189	186	174	210
周壁からの距離[3]		48	59	39 (51)	46 (50)	43
備考		2段掘り		2段掘り	2段掘り	2段掘り

さらに住居跡の南側約60cm外方には径16～20cm、深さ15～20cmの4個の垂直に穿たれた柱穴を検出した。

住居跡内には黒褐色土が充塡しており、壺、甕、高坏等の弥生式土器が床面から若干浮いた状態で出土した（Fig.7, PL.37－(1)）。1・2・3は短く内湾ぎみに外反する甕の口縁部である。1は口径22.0cmで口唇部はやや尖りぎみに終る。胎土は微砂粒を含むものの良好。内外面とも灰橙色を呈し、焼成は良好。2は口径20.2cmで剥落が目立つ。外面は横ナデに

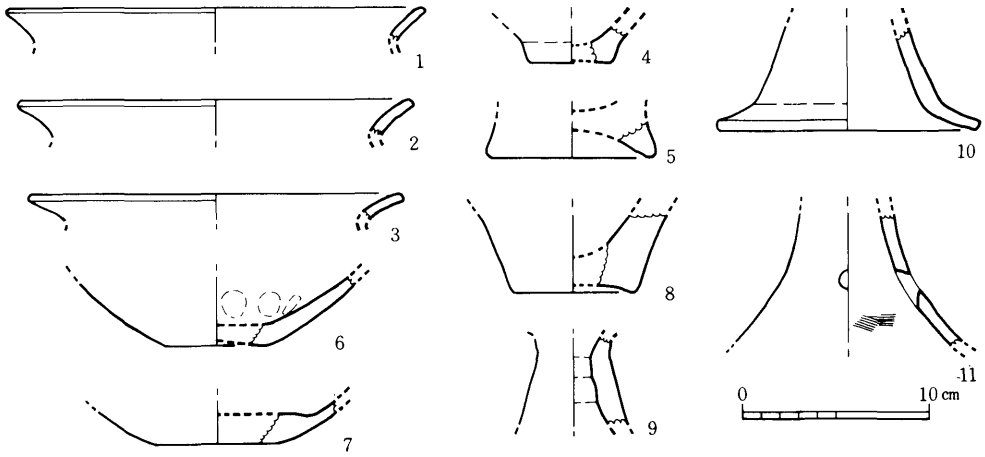


Fig.7　1号住居跡出土遺物実測図（1/4）

より若干段がつく。胎土精良、灰橙色を呈し焼成は軟質。３はほぼ均一の器肉をもち口径19.6cm。胎土不良で焼成は良好。外面黒褐色、内面灰橙色を呈す。１～３とも調整は横ナデ。４・５は甕の底部である。４はやや上げ底で内面への粘土の貼りつけによって胴部へ移行する。胎土良好、焼成甘く淡赤褐色。底径4.2cm。５も底径8.4cmの上げ底の底部で胎土、焼成とも良好。外面灰橙色、内面黄褐色。両者とも横ナデによる調整。６～８は壺の底部。６は内面に指圧痕が明瞭に残る。胎土、焼成とも不良で外面赤褐色、内面暗褐色。７は剝落著しく調整は不明。しっかりした底部から器肉の薄い胴部へ急激に移行する。胎土、焼成とも不良で外面黒色、内面灰橙色。８は大形品の底部であろう。９～11は高坏の脚部である。10は下半部で屈曲し直線的に上方へ伸びる。胎土良好で暗茶褐色を呈し焼成は堅緻。11は焼成前の内面からの穿孔がみられる。外面は不明であるが、内面は刷毛目仕上げである。胎土、焼成とも良好で赤褐色を呈す。

出土遺物はおおむね弥生時代後期の特徴をもつものが存在する。

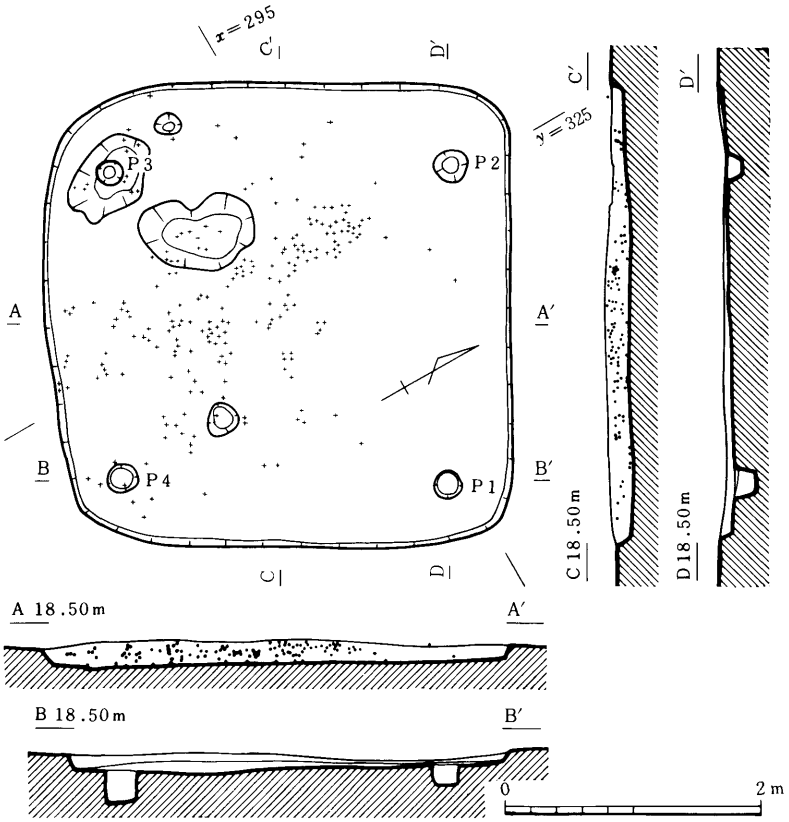


Fig. 8　２号住居跡実測図(1/60)

2号住居跡

調査区内南部で検出された住居跡で、1号住居跡の東約1.5mに位置する（Fig.8，PL5～6）。溝4によって南西隅を切られているが、溝底は住居跡床面まで達していない。平面形態は南辺がやや胴張りの隅丸方形である。規模は一辺3.56m、壁高15cmで床面積は12.7m²である。主柱はP1～P4の4本であろう。柱間距離はP1－P2が245cm、P2－P3が268cm、P3－P4が233cm、P4－P1が252cmである。壁溝および床面の焼痕は認められない。

Tab. 2　2号住居跡主柱穴計測表（単位：cm）

要素＼柱穴番号		P 1	P 2	P 3	P 4
正面形態		円形	円形	円形	ほぼ円形
径	上面径（長軸×短軸）	22	26	20	25×22
	底面径（長軸×短軸）	17	12	12	20×17
深さ		16	17	19	26
中心からの距離		183	172	172	180
周壁からの距離		41 42 南辺 東辺	60 43 北辺 東辺	54 40 北辺 西辺	39 36 南辺 西辺

また、中央からやや西寄りに長軸90cm、短軸44cm、深さ15～20cmの楕円形の掘り込みを検出した。

遺物は黒褐色覆土中より床面から浮いた状態で、おもに住居跡内西半分において壺、甕および紡錘車等が出土した（Fig.9, PL. 37－(2)）。1～4は甕である。1は内外面とも刷毛目調整を行ない「く」の字口縁をもつ。口縁部内面は横刷毛仕上げののち、ナデ消してい

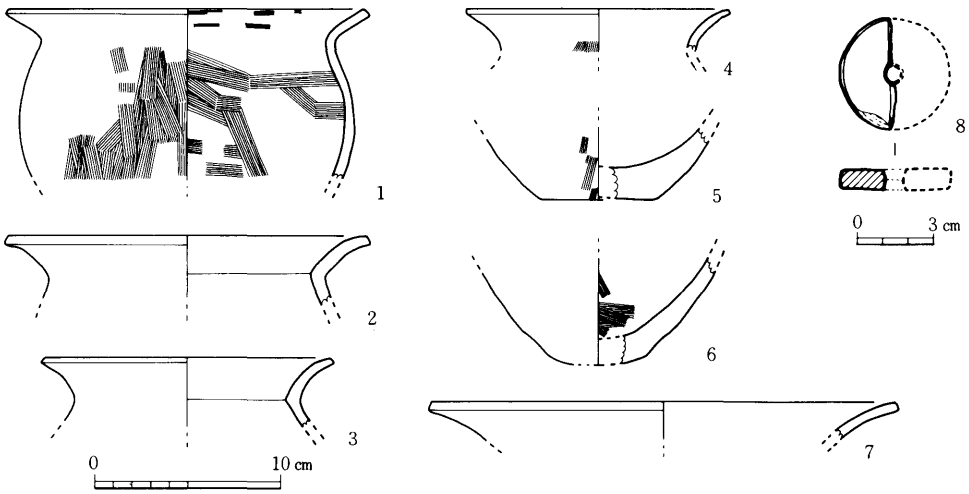


Fig. 9　2号住居跡出土遺物実測図（1/4）

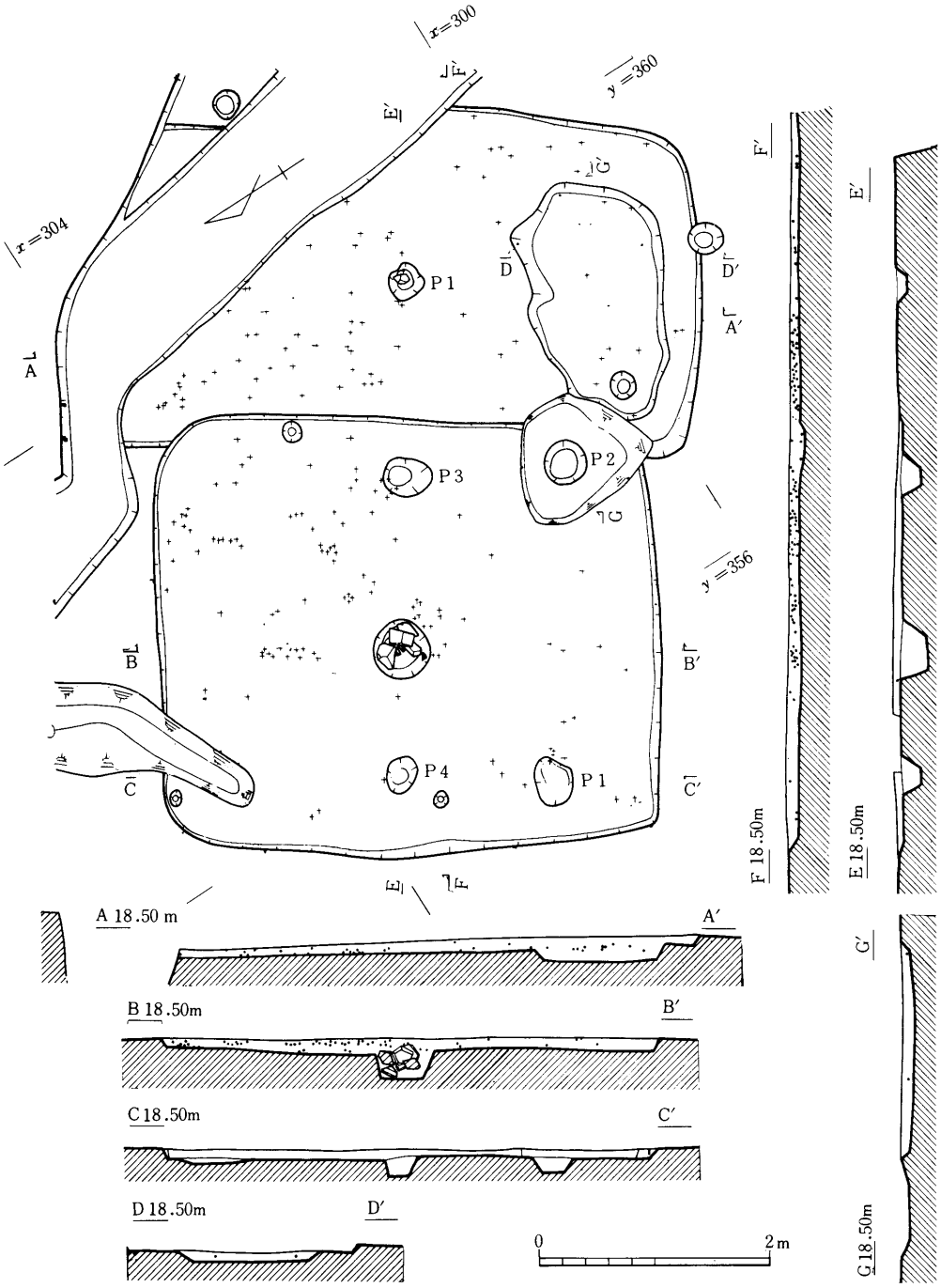


Fig.10　３・４号住居跡実測図(1/60)

る。口縁端部は平坦である。口径18.6cm。濁黄褐色を呈し胎土、焼成は良好。2・3・4は張りの強い胴部に「く」の字口縁をもつ甕である。口縁端部は平坦なものと尖り気味のものとがある。2は胎土、焼成とも普通で外面灰褐色、内面暗灰色を呈す。口径19.2cm。3は胎土精良で外面濁赤褐色、内面灰褐色を呈し焼成は軟質。口径15.0cm。4は胎土、焼成とも良好で外面濁黄褐色、内面赤褐色。口径14.0cm。5・6は壺の底部でやや上げ底のものと丸底気味の不安定な平底のものとがある。5は内面ナデ、外面刷毛目仕上げ、6は内面刷毛、外面ナデ仕上げである。7は高坏の坏部で口径24.6cm。胎土精良、赤褐色で焼成は甘い。8は凝灰岩を素材とした紡錘車である。径4.3cm、孔径1.0cm、厚さ0.8cm、重さ9.5g。

これらの遺物は弥生時代後期のもので前半のものかと思われる。

3号住居跡

調査区内の東部中央付近で検出された住居跡で、北辺の一部および南東隅は後世の掘削で失われている(Fig.10,PL.7～8)。平面形態は長方形で4号住居跡、溝5を切っている。規模は南北辺4.33m、東西辺3.70mで壁高は8cm残存している。床面積は16.0m²。住居跡に伴うのはP1～P4の4本であろうが北辺の状態からみて6本の可能性もある。各柱間の距離はP1－P2が268cm、P2－P3が152cm、P3－P4が256cm、P4－P1が135cmである。住居跡内中央部に約20cmの大きさの礫を充填した径50cm、深さ22cmの円形の掘り込みが検出されたが明確に炉跡と判断しうる痕跡はない。壁下に壁溝は

Tab. 3 3号住居跡主柱穴計測表(単位：cm)

要素＼柱穴番号		P 1	P 2	P 3	P 4
平面形態		不整楕円形	円形	楕円形	楕円形
径	上面径(長軸×短軸)	43×34	38	41×33	33×24
	底面径(長軸×短軸)	29×21	22	19×16	16×14
深さ		16	16	18	19
中心からの距離		177	189	120	129
周壁からの距離		49 82 西辺 南辺	29 65 東辺 南辺	43 東辺	59 西辺

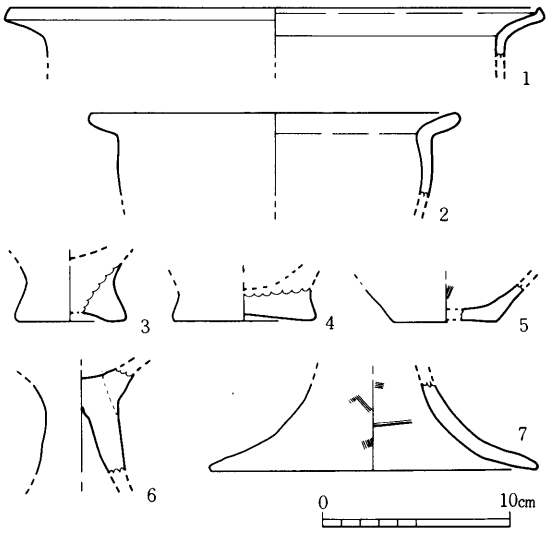


Fig.11 3号住居跡出土遺物実測図(1/4)

認められなかった。主軸方位はＮ－29°－Ｅである。

遺物は黒褐色を帯びた粘質の覆土から弥生式土器の小片が床面より高い位置で散発的に出土した。図示しうるのは壺、甕、高坏の７点である(Fig.11, PL.38－(1))。１・２は甕の口縁部。１は内面横ナデにより跳ね上げ状の口縁部をもち口径28.0cm。２は張りの弱い胴部に肥厚する口縁部をもつ甕である。口径は19.4cm。１・２とも胎土不良、灰褐色を呈し焼成は良好。３・４は上げ底の甕の底部。磨滅著しく調整は不明。両者とも胎土不良で焼成は良好。３は淡橙色、４は淡赤褐色を呈す。５は鉢の底部かもしれない。やや上げ底気味で、内面刷毛目仕上げである。６・７は高坏の脚部である。６は坏部を脚部側面に接合している。胎土精良で淡橙色を呈し焼成は普通。７はゆるやかに裾が広がり尖り気味の端部をもつ。内外面とも刷毛目仕上げである。胎土、焼成とも良好で濁黄褐色を呈する。

出土遺物はそのほとんどが接合不可能であり、大半が流れ込みのものと思われるが、弥生時代中期後半を上限とすることができよう。

４号住居跡

３号住居跡の東傍に位置し、溝５・土壙８を切り３号住居跡によって切られている。北東部および南西隅は後世の掘削によって消失している（Fig.10, PL.7～８）。平面形態長方形の住居跡と推定され南北辺4.86m以上、東西辺2.72mの規模をもつ。主軸方位はＮ－35°－Ｅである。床面は東から西にわずかに傾斜しており壁高は平均10cm残存している。住居跡内に柱穴は２個検出されたが、主柱と思われるのはＰ１であろう。床面に焼痕は認められなかった。

遺物は床面からの出土が多かったが、図示しうるのは甕の口縁部１点だけである(Fig.12, PL.38－(2))。口径28.0cmで口唇部は平坦である。胎土、焼成とも普通で橙褐色を呈する。

Tab.4　４号住居跡主柱穴計測表(単位:cm)

要素＼柱穴番号		Ｐ１
平面形態		不整円形
径	上面径(長軸×短軸)	33×30
	底面径(長軸×短軸)	17×13
深さ		13
中心からの距離		不明
周壁からの距離		249 南辺

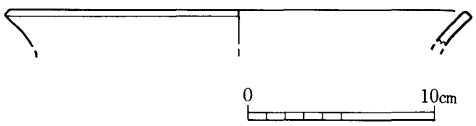


Fig.12　４号住居跡出土遺物実測図(1/4)

(2)　土壙

１号土壙

調査区のほぼ中央、１号住居跡と３号住居跡の中間に位置し、水田造営の際に北側を削平されている(Fig.13, PL.8～9)。平面形態は楕円形になろうかと思われ、規模は南北軸推定

53cm、東西軸80cm、深さ18cmである。東壁は上面から床面に垂直に下降している。

遺物は内部に充塡した黒褐色粘質土から中央部分に集中して壺・甕等が出土した（Fig.15, PL.38－(4)）。1は張りの弱い胴部に「く」の字に短く外反する口縁部をもつ甕で口径17.0cm。遺存状態悪く調整不明。胎土不良で赤褐色を呈し焼成は軟質。2～5は壺。よく開いた口縁部をもち、上下（2）あるいは下方のみ（3）に拡張した口唇部に3条乃至2条の不明瞭な凹線を施すものがみられる。2は口径18.2cm。胎土は粗い砂粒を多く含み不良で橙褐色を呈し焼成は良好。3は口径18.4cmで胎土精良、橙褐色を呈し焼成はやや甘い。2・3とも内面は横ナデにより仕上げ、外面は剥落著しく調整不明。4は内面刷毛目調整を行なう。胎土、焼成とも良好。外面橙褐色、内面濁黄褐色。5は球形の胴部にやや上げ底の底部をもつ。胴部外面下半は篦磨き、上半は左上がりの平行叩きを施す。内面はやや粗い刷毛目調整ののちナデている。外面橙褐色、内面黒色で焼成は良好。胎土には砂粒が目立

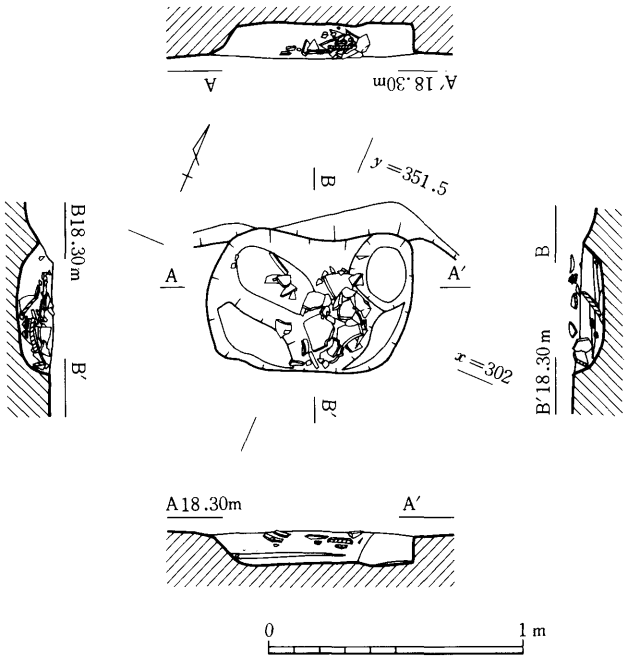


Fig.13 1号土壙実測図(1/30)

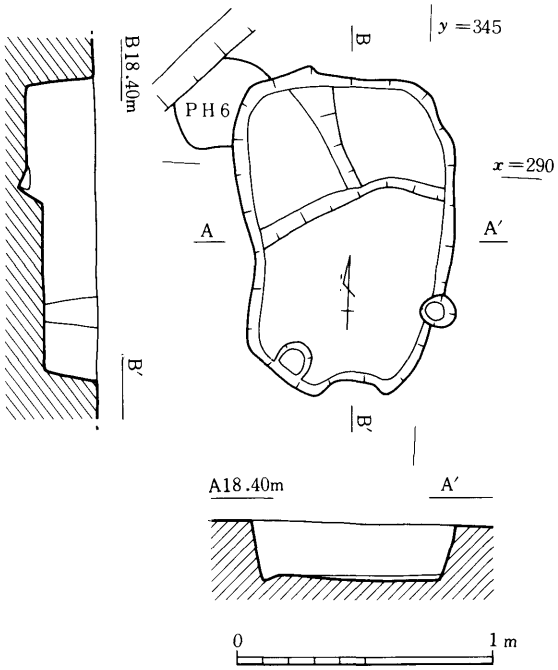


Fig.14 2号土壙実測図(1/30)

ち、金雲母を含む。弥生時代後期前半に属する。

2号土壙

1号住居跡の北東約2ｍに位置する(Fig.14, PL.10～11)。平面形態は不整形な楕円形で、南北軸117cm、東西軸80cmの規模をもつ。床面は南から北へ階段状に下降しており、最浅部の南側で深さ21cm、最深部の北西側で深さ29cmである。

覆土は黒褐色粘質土で弥生式土器二十数片が出土したが、いずれも図示不可能な破片ばかりであった。

3号土壙

2号土壙の南西1.50ｍで検出された土壙で、1号住居跡によって南側を切られている(Fig.17, PL.11～12)。円形に近い方形の平面形態を有し、南北軸104cm、東西軸108cm、最深部での深さ44cmの規模をもつ。西壁は床面から緩やかに立ち上がる。

覆土は2層に分層され内部から弥生式土器が出土したが床面付着のものはない(Fig.16, PL. 39－(1))。1は上層の黒褐色粘質土から出土した壺の底部である。内面および側面に指圧痕が認められる。胎土精良、外面赤褐色、内面濁黄褐色を呈し焼成は堅緻。前期末に属するものかと思われる。2は下層の褐色粘質土よりの出土である。「く」の字状の口縁部を

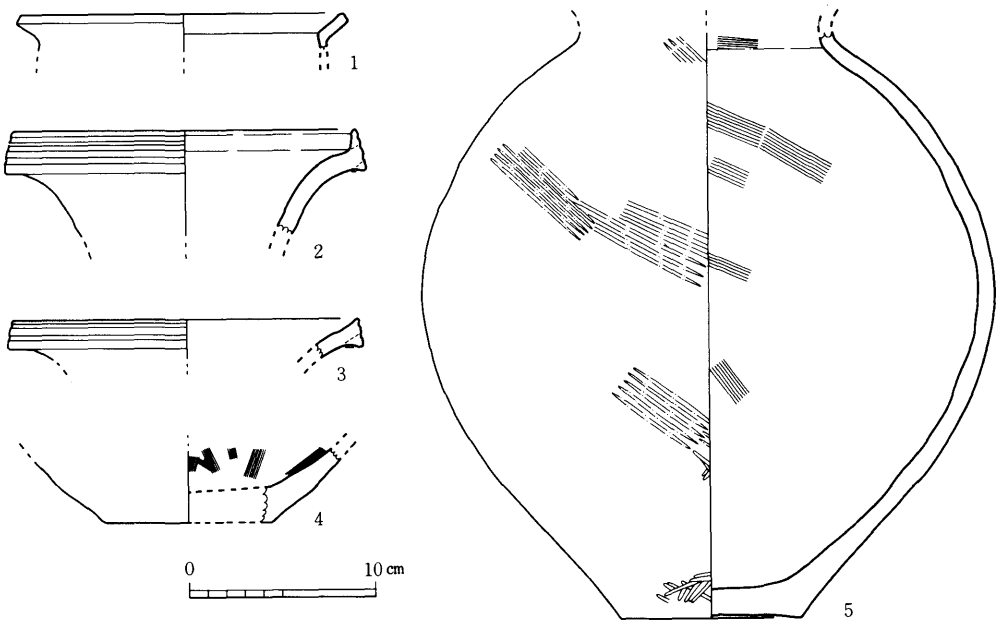


Fig.15　1号土壙出土遺物実測図(1/4)

もつ甕で外面粗い刷毛目調整、内面篦削りののちナデている。黒褐色を呈し胎土、焼成とも良好。中期後半のものであろう。

4号土壙

1号土壙の南傍で検出された土壙で、溝7によって切られている（Fig.19, PL.13)。平面形態は南北に長い楕円形で南北軸55cm、東西軸42cmを測る。上面の削平が著しく最浅部3cm、最深部7cmの深さを残すの

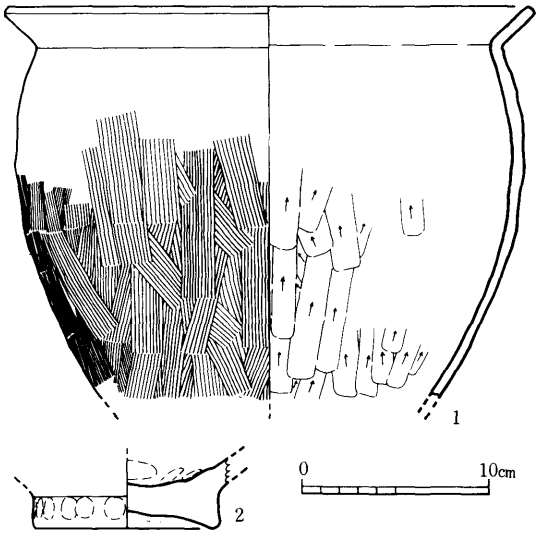


Fig.16 3号土壙出土遺物実測図(1/4)

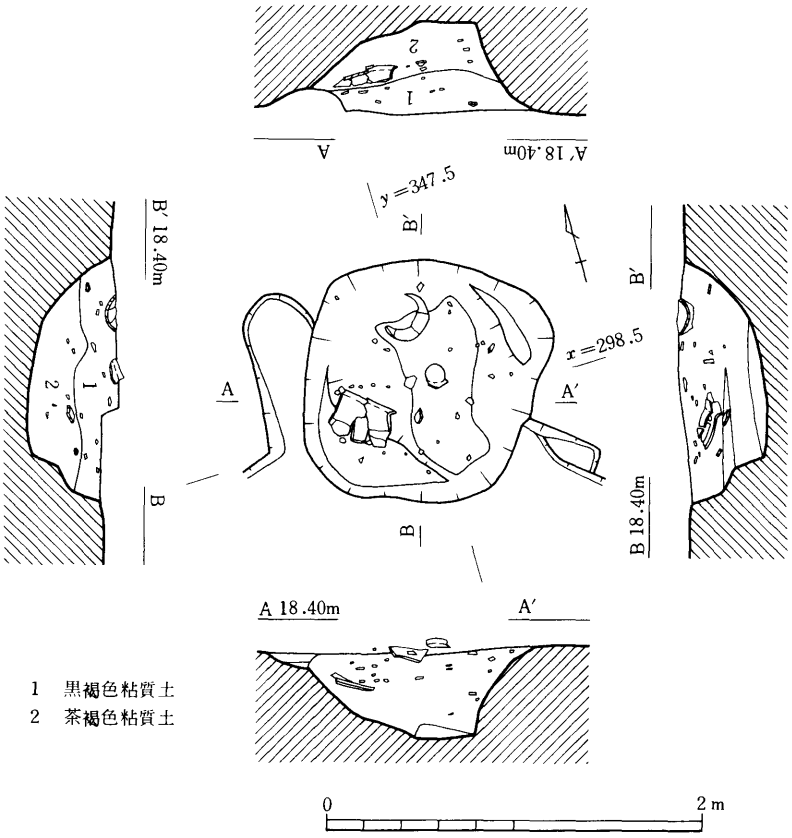


Fig.17 3号土壙実測図(1/40)

みであった。

内部には黒褐色粘質土が充塡しており、頸部に断面三角形の貼付突帯を２条付した壺等弥生時代中期の特徴をもつ土器片十数点が出土した。

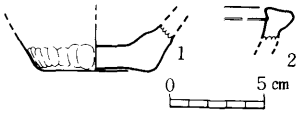


Fig.18　６号土壙出土遺物実測図(1/4)

５号土壙

２号住居跡の北側に位置し溝６に切られている(Fig.19, PL. 14)。平面形態は楕円形に近い円形を呈し、長軸55cm以上、短軸最大長53cm、深さ５cmの規模をもち上面の削平が著しい。

覆土からの出土遺物は皆無であった。

６号土壙

５号土壙の西に近接して営まれており、溝7によって切られている(Fig.19, PL.15)。５号土壙との新旧関係は判然としない。平面形態は不整形な楕円形になるものと思われ、規模は長軸最大長92cm、短軸最大長38cm、深さ平均４cmで、床面は西から東へゆるやかに傾斜している。

覆土からは弥生式土器が数点出土した(Fig.18, PL.38－(3))。1は壺の底部と思われるもので外面に指圧痕がみられる。横ナデおよびナデ仕上げ。胎土、焼成とも良好で外面赤褐色、内面黒色。２は高坏の坏部で口縁端部を肥厚させ内面に箆による沈線様の圧痕が認められる。胎土良好で外面赤褐色、内面暗灰色を呈し焼成は甘い。

中期後半かと思われる。

７号土壙

１号住居跡の南傍に位置し、調査区域の

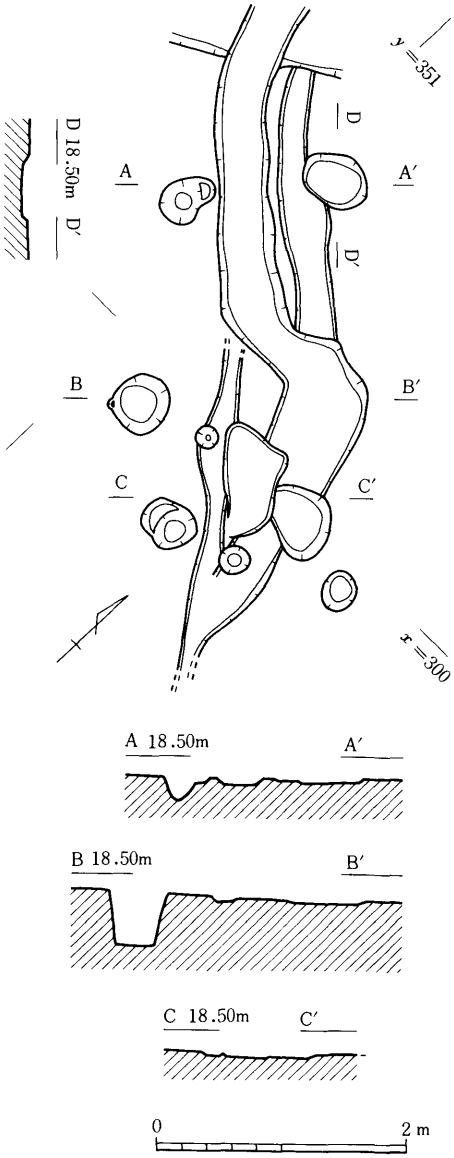


Fig.19　４・５・６号土壙および溝２・６・７・８実測図(1/60)

拡張によって完掘しえた土壙である(Fig.21, PL.16)。平面形態は東西に長い三角形状を呈し、東西最大長370cm、南北軸77cm、深さ22cmの規模をもつ。

茶褐色粘質の覆土から弥生式土器が十数片出土したが、床面付着のものはみあたらなかった。図示可能な遺物は1～4の甕である(Fig.20, PL.39－(2))。1・2は「く」の字状に外反する口縁部をもつ甕で、2は口縁端部が肥厚する。いずれも口縁部内外面は横ナデ、他はナデ調整を行なう。1は胎土、焼成とも普通で橙褐色を呈す。口径21.8cm。2は胎土精良、赤褐色で焼成は軟質。口径16.4cm。3・4は底部である。3は胎土、焼成不良で外面赤褐色、内面黒色。4は胎土、焼成とも良好で黄褐色を呈す。両者ともナデ仕上げ。

本土壙の上限は中期かと思われる。

8号土壙

4号住居跡内南隅で検出された土壙で、4号住居跡によって切られている(Fig.10, PL.17)。平面形態は不整楕円形で、東西軸198cm、南北軸122cm、深さ8cmの規模をもつ。

内部から縄文時代晩期の条痕文土器数点が出土した。

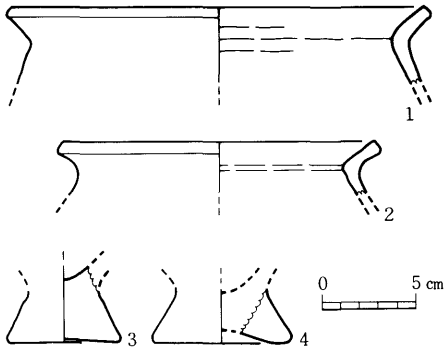


Fig.20 7号土壙出土遺物実測図(1/4)

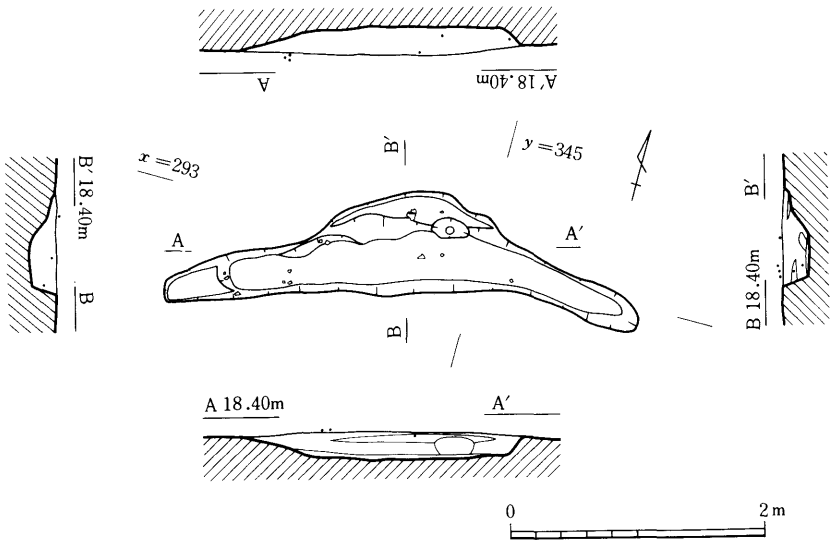


Fig.21 7号土壙実測図(1/60)

(3)　溝

９条検出された。覆土での観察によると少なくとも４時期に大別される（旧→新）。

黒褐色粘質の覆土	溝５・９
	↓
暗茶褐色粘質の覆土	溝６
	↓
明茶褐色粘質の覆土	溝７
	↓
暗灰色砂質の覆土	溝１・２・３・４・８

このうち北東から南西にかけての落ち込みラインと平行して走る溝１は、段落ち下面で検出された８本の杭列との相関関係が認められるようであり最も新しく、近世以後のものと思われる。断面形態は「Ｕ」字形に近いもの（溝１・３・９）、「Ｕ」字形乃至逆梯形のもの（溝５）、逆梯形に近いもの（溝２・４・６・７・８）がみられる。溝幅は溝５が60～70cm、溝８が20cm、他は30～40cmである。溝深は溝１が14～20cm、溝５が30～55cm、他は３～10cmである。

図示可能な遺物の出土がみられたのは溝５（Fig.22, PL.19）および溝6である。溝５からは壺・甕・高坏等が出土した（Fig.23, PL.39－(4), 40－(1)）。１～３は甕である。１・２は「く」の字状に外反する口縁部をもつ。１は口径に比べ胴部最大径が小さく、口縁端部は平坦である。底部を欠損する。胴部内外面刷毛ののちナデ、口縁部内面刷毛ののち横ナデ、外面横ナデで仕上げている。外面黒褐色、内面橙褐色を呈し、胎土・焼成とも良好。２は球形の胴部外面上半部に篦状工具による刺突文をめぐらしている。頸部内面にわずかに稜を残す。胴部内外面ナデ、口縁部内外面横ナデによる調整。胎土・焼成とも良好で外面赤褐色、内面橙褐色を呈す。３は強く張った胴部にしまりの強い頸部をもつ甕である。口縁部は水平に近く屈曲し、外面中央部は横ナデにより突出する。外面黒褐色、内面黄褐色で胎土、焼成とも良好。口径は１が24.7cm、２が28.8cm、３が15.8cm。４・５は壺。４は短い頸部をもち上下に拡張した口縁端部に３条の篦描き沈線を施すものである。調整は胴部外面篦磨きののちナデ、口縁部内外面

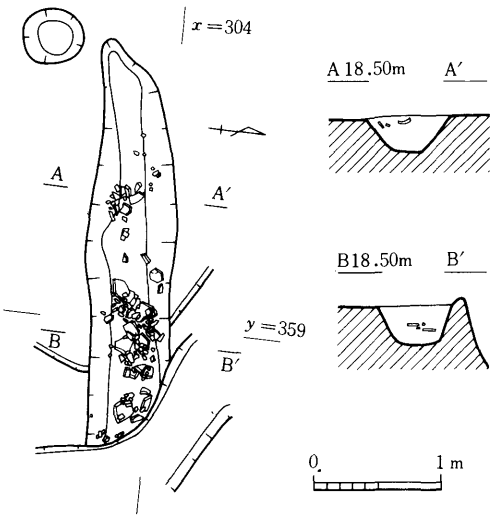


Fig.22　溝５実測図(1/60)

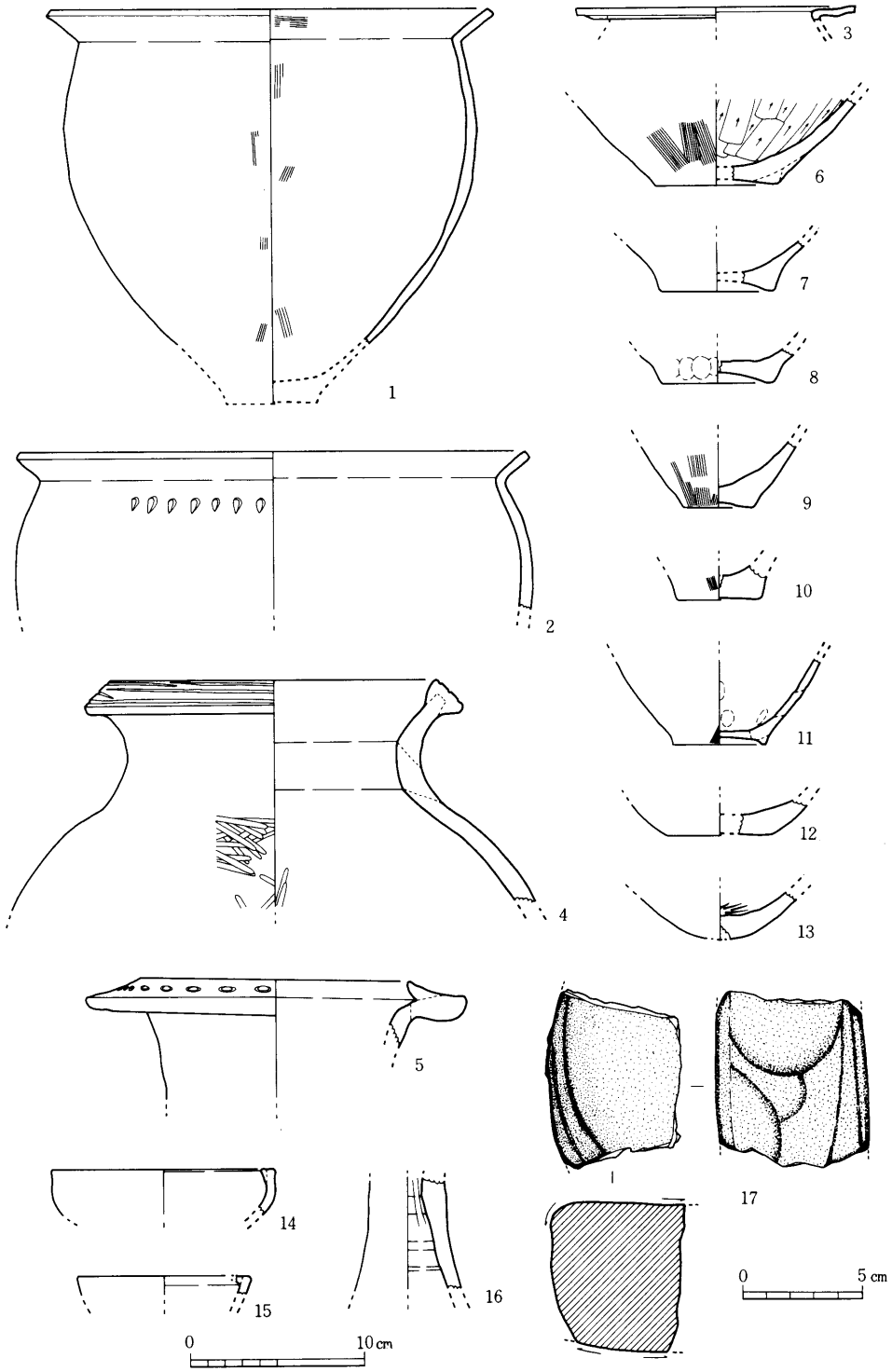


Fig.23 溝5出土遺物実測図（土器1/4・石器1/3）

横ナデ、胴部内面篦磨き。口縁部は沈線施文後横ナデを行なう。外面各所に丹塗りの痕跡がみられ、本来全面に塗布されていたものであろう。胎土、焼成とも良好で淡黄白色を呈す。５はいわゆる複合口縁をもつ壺であろうが、口縁部が未発達であり、また、成形が稚拙で定形化していない。内傾する口縁部外面に竹管文をめぐらしている。頸部外面ナデ仕上げ、他は横ナデによる調整。外面は丹塗りで口縁部の一部に黒斑がみられる。胎土良好、焼成普通で橙褐色を呈す。胎土に黒雲母を含む。口径は４が18.6cm、５が15.0cm。６～13は底部である。上げ底のもの（６～12）と丸底のもの（13）の２種がある。11は外底面に粘土を貼りつけ高台風に仕上げている。調整は不明のものもあるが、外面は刷毛目仕上げのもの（６・９～11）とナデ仕上げのもの（８・13）がみられ、内面は篦削りのもの（６）とナデ仕上げのもの（７・９・11～13）がみられる。13は外面に丹塗りの痕跡が認められる。胎土は11を除いて良好で７は黒雲母を含んでいる。焼成は全資料とも良好で特に13は堅緻である。色調は外面が赤褐色のもの（６・９～12）と橙褐色のもの（７・８・13）とがあり、内面は茶褐色のもの（６・７）、橙褐色のもの（８・９・13）、暗灰色のもの（10）、黒色のもの（11・12）がある。14～16は高坏。口縁端部内面に粘土を貼りつけ肥厚させるもの（14）と拡張させるもの（15）がみられ、いずれも端部は平坦である。両者とも内外面横ナデによる調整で胎土・焼成は良好。14は外面黄白色、内面黒色、15は内外面とも橙褐色。16は脚部の破片で内面にシボリ痕がみられる。調整不明で橙褐色を呈し胎土・焼成とも良好。17は置き砥と思われる砥石である。側面は欠損しているが、表裏両面および側面の一部に砥面がみられ本来は少なくとも３面の砥面を有していたものであろう。粒子は細かく仕上げ砥として使用された可能性が大きい。厚さ7.1cmと厚く重量420ｇ。砂岩製。

本溝は弥生時代中期後半から後期初頭にかけて使用され比較的短期間にその機能を失ったものと思われる。

溝６からは少量であるが遺物が出土している（Fig.24, PL.39－(3)）。１は土師器の高坏で磨滅剝落著しく調整が観察されたのは坏部内面の刷毛目のみである。胎土精良で濁黄褐色を呈し焼成は良好。脚部内面にシボリ痕がみられる。

２は弥生時代後期のものと思われる底部である。内外面ともナデ仕上げを行なう。外面橙褐色、内面灰白色を呈し胎土不良で焼成は良好。

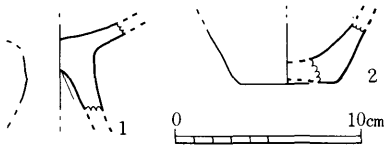


Fig.24 溝６出土遺物実測図（1/4）

(4) 柱穴

柱穴等の竪穴は総数138個検出した（Fig. 5,

PL.3)。覆土はすべて黒褐色の粘質土で、相互の識別は極めて困難であるため柱穴等の竪穴の同一覆土によるグルーピングはできなかった。

調査区北側で検出された柱穴群には住居跡の復原可能な4個の柱穴が認められたが詳細は不明である。また、ＰＨ１～３は径50～60cm、深さ55～65cmの規模をもち、他の柱穴とは性格を異にするものかもしれない。

柱穴内から遺物の出土がみられたのはＰＨ４～ＰＨ13で、ＰＨ４、ＰＨ７からは土師器、他の柱穴からは弥生式土器とおぼしき破片が出土した。図化しうるのはＰＨ６出土の凹石のみである(Fig.25)。長さ9.8cm、幅8.3cm、厚さ5.4cm。機能的には敲石と思われ正背両面にくぼみをもつ。砂岩製。重量680ｇ。

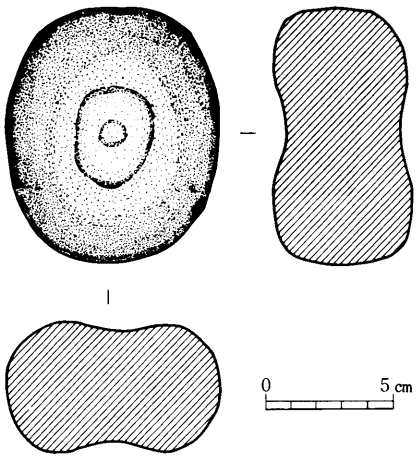


Fig.25 ＰＨ6出土遺物実測図(1/3)

4　小結

本調査区において検出した遺構は住居跡4(5)基、土壙8基、溝9条、柱穴138個である。ここではその調査結果を整理して小結にかえたい。住居跡はいずれも弥生時代の竪穴住居跡で出土遺物はその大半が流れ込みによるものと思われ、かつまた量、質とも良好な資料が得られなかったため詳細な時期比定は困難であるが中期後半から後期初頭(3号住居跡)、後期前半(2号住居跡)の2時期に大別されると考える。また、1号住居跡は後期、4号住居跡は3号住居跡に先行する時期のものと考えられる。調査区北西隅では住居跡の主柱穴を構成していたのではないかと考えられる4個の柱穴が検出されたが、削平により上面を消失しているためその規模、時期等については不明であり、かつまた倉庫的性格も考えられるので断言はできない。平面形態は長方形(3、4号住居跡)、隅丸方形(2号住居跡)、円形(1号住居跡)のものに区分され、少なくとも中期後半から後期初頭の段階で方形系統の住居跡がみられ、円形プランのものが後期の段階にみられる。主柱穴は1号住居跡が周壁に対応して円形にめぐる5本柱、2号住居跡がやや周壁寄りに立てられた4本柱である。3号住居跡は北辺の状態からみて6本の可能性もあるが検出したのは4本である。4号住居跡も同様で検出したのは中央部の1本のみである。

一般的に住居設営にあたっては竪穴内の掘削段階において住居占地地点決定後一定の深

PL.3)。覆土はすべて黒褐色の粘質土で、相互の識別は極めて困難であるため柱穴等の竪穴の同一覆土によるグルーピングはできなかった。

調査区北側で検出された柱穴群には住居跡の復原可能な4個の柱穴が認められたが詳細は不明である。また、ＰＨ１～３は径50～60cm、深さ55～65cmの規模をもち、他の柱穴とは性格を異にするものかもしれない。

柱穴内から遺物の出土がみられたのはＰＨ４～ＰＨ13で、ＰＨ４、ＰＨ７からは土師器、他の柱穴からは弥生式土器とおぼしき破片が出土した。図化しうるのはＰＨ６出土の凹石のみである(Fig.25)。長さ9.8cm、幅8.3cm、厚さ5.4cm。機能的には敲石と思われ正背両面にくぼみをもつ。砂岩製。重量680ｇ。

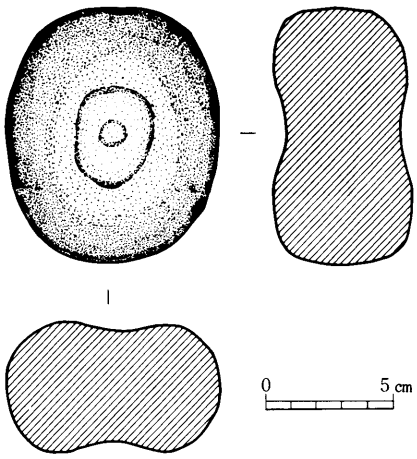


Fig.25 ＰＨ6出土遺物実測図(1/3)

4　小結

本調査区において検出した遺構は住居跡4(5)基、土壙8基、溝9条、柱穴138個である。ここではその調査結果を整理して小結にかえたい。住居跡はいずれも弥生時代の竪穴住居跡で出土遺物はその大半が流れ込みによるものと思われ、かつまた量、質とも良好な資料が得られなかったため詳細な時期比定は困難であるが中期後半から後期初頭(3号住居跡)、後期前半(2号住居跡)の2時期に大別されると考える。また、1号住居跡は後期、4号住居跡は3号住居跡に先行する時期のものと考えられる。調査区北西隅では住居跡の主柱穴を構成していたのではないかと考えられる4個の柱穴が検出されたが、削平により上面を消失しているためその規模、時期等については不明であり、かつまた倉庫的性格も考えられるので断言はできない。平面形態は長方形(3、4号住居跡)、隅丸方形(2号住居跡)、円形(1号住居跡)のものに区分され、少なくとも中期後半から後期初頭の段階で方形系統の住居跡がみられ、円形プランのものが後期の段階にみられる。主柱穴は1号住居跡が周壁に対応して円形にめぐる5本柱、2号住居跡がやや周壁寄りに立てられた4本柱である。3号住居跡は北辺の状態からみて6本の可能性もあるが検出したのは4本である。4号住居跡も同様で検出したのは中央部の1本のみである。

一般的に住居設営にあたっては竪穴内の掘削段階において住居占地地点決定後一定の深

Tab. 5　竪穴住居跡一覧表

住居跡番号	平面形態	規　模 (m)	深 さ (cm)	床面積 (㎡)	主柱穴	炉	壁溝	時　期	備　考
1号住居跡	円　形	径　4.95	6	19.2	5	有	有	後　期	張り出し
2号住居跡	隅丸方形	一辺　3.56	15	12.7	4	無	無	後期前半	
3号住居跡	長 方 形	4.33×3.70	8	16.0	4(6)	無	無	中期後半	
4号住居跡	長 方 形	4.86×2.72	10	13.2以上	1	無	無	～ 後期初頭	

さに竪穴を掘削し、さらに必要な部位に必要な数、規模の柱穴を穿つのが原則であろう。[(4)]
そこで後期前半の2号住居跡の主柱穴の配列をみてみよう。各周壁に沿う2ヶ所に穿たれた柱穴各々の中心点とそれが対峙する周壁下面点間の距離は東壁とＰ1、Ｐ2の距離が42cm、43cm、以下北壁―Ｐ２、Ｐ３が各々60cm、54cm、西壁―Ｐ３、Ｐ４が各々40cm、36cm、南壁―Ｐ４、Ｐ１が各々39cm、41cmである。また、機能的な作図によって求めた住居跡中心点と各柱穴Ｐ１～Ｐ４の中心点間の距離はそれぞれ183cm、172cm、172cm、180cmである。本住居跡に限れば、住居跡上面を削平されているため竪穴自身の深さに言及はできないけれども周壁と対峙する各柱穴間の距離は極めて近い値を示している。このことは対角線上に位置する柱穴中心点相互を結ぶラインが住居中心点を通過しないことを考えあわせて、住居掘削の際の偶然の所産なのか、それとも柱穴掘削箇所選定にあたって何らかの基準となるものによって各周壁から一定の距離をおいて柱穴を穿っているか、大いに問題の残るところである。いずれにせよ、作図上の計数処理によるものでおのずと制約があり検討資料の増加を待ちたい。床面積はいずれも20m²以下で遺跡保存地区で検出された同時期の住居跡よりも小規模である。この問題については第5節に譲ることにする。炉跡、壁溝は1号住居跡のみに認められた。炉跡は、住居床面を皿状に18cm掘りくぼめた楕円形のもので中心部よりやや南に偏在する。壁溝は幅6～20cm、深さはおおむね3cmで部分的に若干の差がある。また、2ヶ所において壁溝のめぐらない部分を確認した。

さらに1号住居跡においては北西部の竪穴周壁から住居跡外へ弧状に張り出した階段状のテラスをもち、階段部分は堅く踏みしまっていた。この部分には壁溝はめぐっておらず柱間に位置する（実際にはＰ２の方向にややずれている）ため出入口としての機能は十分に果たしうるものと思われる。しかし、旧来東から西へ傾斜していたと思われる旧地表の等高線と平行して張り出していることになり、特に除湿性さらには冬場における季節風を

考慮すると耐寒性等において劣るものと思われる。

このように１号住居跡でみられるような出入口と考えられる周壁の拡張が、平面形態円形の住居跡（方形・長方形の平面形態をもつ住居跡も含めて）に通有のものなのか、あるいは個体差、時期差、さらには地域差を反映しているものなのか出入口としての機能を与える場合問題の残るところである。

また、１号住居跡の南周壁外方に周壁に沿って径16～20cm、深さ15～20cmの垂直に穿たれた４個の柱穴を検出した。これらの柱穴が本来１号住居跡とセット関係にあるのであれば、問題外で棰木を受ける柱の存在も考えねばならないであろう。[5]

土壙は８基検出した。いずれも上面を削平され遺存状態は良好とはいえず、他の遺構との切り合いもあって平面形態をとらええたのは２基のみであった。時期不明のものを除けば縄文時代晩期のもの１基、弥生時代中期後半のもの２基、弥生時代後期のもの１基、弥生時代中期のもの２基である。出土遺物は土器のみで遺物の出土状況をみると土壙廃棄直後に遺物を投棄したと思われる１・３号土壙以外は、すべて土壙廃絶後の流れ込みによるものであり、その量は少ない。平面形態は円形乃至楕円形で７号土壙はやや特異な形態をもつ。深さは数cmのもの（４、５、６号土壙）、20cm前後のもの（１、２、７号土壙）、40cm前後のもの（３号土壙）がみられる。

弥生時代中期の段階で貯蔵穴として捉えられるものがあることが知られているが、本調査で検出された土壙においては不明と言わざるをえない。また、これらの土壙がいかなる

Tab. 6　土壙一覧表

土壙番号	平面形態	規模 (cm)		出土遺物	時期	備考
		長軸×短軸	深さ			
１号土壙	楕円形	80×(53)	18	弥生式土器(壺・甕)	後期前半	北部削平
２号土壙	不整楕円形	117× 80	21～29	弥生式土器		
３号土壙	ほぼ方形	108×104	44	弥生式土器(壺・甕)	中期後半	１号住居跡に切られる
４号土壙	楕円形	55× 42	3～7	弥生式土器(壺)	中　期	溝７に切られる
５号土壙	ほぼ円形	(55)×53	5			溝６に切られる
６号土壙	不整楕円形	92× 38	4	弥生式土器(壺・高坏)	中期後半	溝６に切られる
７号土壙	三角形	370× 77	22	弥生式土器(甕)	中　期	
８号土壙	不整楕円形	198×122	8	縄文式土器	晩　期	４号住居跡に切られる

単位集落、さらには住居跡に帰属するものか調査面積の狭小さのため明確な解答をもたないが、住居跡と同時期に併存したと思われる土壙が存在することは事実であり周辺地域での資料の増加を待って言及することにしたい。

また、１基ではあったが縄文時代晩期の土壙が検出されたことは大きな成果であった。

溝は北西部にくらべて、削平があまり溝底におよんでいない南東部を中心に９条検出された。切り合い関係および覆土から少なくとも４つの時期に区分されるが、時期の判明する溝は少なく溝５が弥生時代中期後半から後期初頭、溝６が弥生時代後期に位置づけられよう。他の溝は溝６より後出のもので、近世に及ぶものもあろうかと思われる。暗灰色砂質土の覆土をもつ溝１・２・３・４・８のうち、溝１と溝４は平行して営まれており、溝１・４と直角方向に存在する溝２・３・８についても同様のことがいえる。溝深は削平により知るすべをもたないが、調査区南東部において溝５が30～55cm残存するのに対し他の溝はすべて３～10cm残すのみである。また、断面形態は溝５を除いて「Ｕ」字形あるいは逆梯形を呈し、断面形態による時期差は明確でない。これらの溝のなかにあって規模、形態等からみて溝５はやや特異といえる。すなわち、セット関係はとらえられないけれども、祭祀的要素の強い丹塗りの土器が投棄された状態で出土しており、溝内祭祀を含めた集落内祭祀の形跡をうかがわせる。

次いで出土遺物についてみると、各遺構における量の多寡はあるものの、その大半が土器でありわずかに紡錘車（２号住居跡）、砥石（溝５）、凹石（ＰＨ６）等の石器がみられるにすぎない。そのうち溝５において出土した壺は長い頸部をもちあまり開かない口縁端部内面に小規模ながら断面三角形の粘土帯を貼りつけたものである。これは粘土帯接合により明らかに上方への拡張を意識したもので拡張部分外面に施文帯を造出し、刺突文を施していることからもうかがえる。しかし、複合口縁壺として定形化しておらず極めて稚拙な感じをうける。また、同一溝から出土した壺においても口縁端部を肥厚させ凹線様の沈線を施したものが認められ、セット関係は不明であるが両者とも一般的には後期初頭に位置づけられるものであろうか。

以上述べてきたように本調査においては、吉田遺跡南西部に展開する集落形態の一端を垣間見るにすぎないものであり、水田経営を媒介にした農業共同体のあり方について、周辺諸地域における既存資料および今後の調査による資料との有機的な連関をもって検討究明がされねばならない。

小　　結

〔註〕

(1) ここでいう床面積とは周壁に囲繞された部分の面積をさす。以下同じ。

(2) 機械的に求心した住居跡の中心点と柱穴の中心点間の距離をさす。以下同じ。

(3) 機械的に求心した住居跡の中心点の柱穴の中心点を結ぶラインの延長上に位置する周壁下面点と柱穴中心点間の距離をさす。以下同じ。

(4) ここでは炉は除外する。

(5) 近年では辻田西遺跡の6号住居跡で竪穴外東部における5個の柱穴を住居跡とセット関係にあるものとし、「棰木先が直接この穴にはいるとは考えられず、いわゆる棰木先を受けて固定する垂直の柱が立つものと考えざるを得ない」としている。
北九州市教育文化事業団 「辻田西遺跡」 1982

第３節　教育学部構内Ｈ－16区の発掘調査

１　調査目的および経過

本調査区は大学キャンパスの北西部にあたり、教育学部構内Ｈ－19区発掘調査地点の北約130ｍに位置する（Fig.26, PL.20）。吉田遺跡調査団によって大別された調査区外の地域であるが、$x=405\sim x=417$, $y=374\sim y=395.5$の範囲内に包括される。昭和44年に実施された本地区周辺の試掘調査では「遺構らしい遺構は見当らなかった」[(1)]とされており、これを受けて本地区への教育学部音楽棟新営計画に伴い昭和56年10月12日から11月17日まで調査を実施した。調査にあたっては土層の堆積状況、遺構・遺物の有無ならびに埋存状態の把握を主眼として新営予定地内に幅２ｍのトレンチを南北３ヶ所、東西２ヶ所に設定して調査を行なった。

その結果、東部において著しい攪乱が観察されたものの、中央部ＴＲ２およびＴＲ４において溝７条、土壙１基が確認された。

なお、大学移転前の立地環境から推して相当量の造成時の置土が予想されたため、機械を使用して排除し、それ以下は分層発掘を行なった。

２　層序

現地表面の標高は調査区東部で19.40ｍ前後、西部で19.20ｍ前後で東部から西部にかけてゆるやかに傾斜しており、西側を走る道路部分でグラウンド方向に40～50cm落ち込んでいる。また、北傍体育館敷地部分は調査区北部で急激に低下しており、比高は0.8～1.2ｍである。

層序は単純で東半部と西半部で堆積状態に若干の差異が

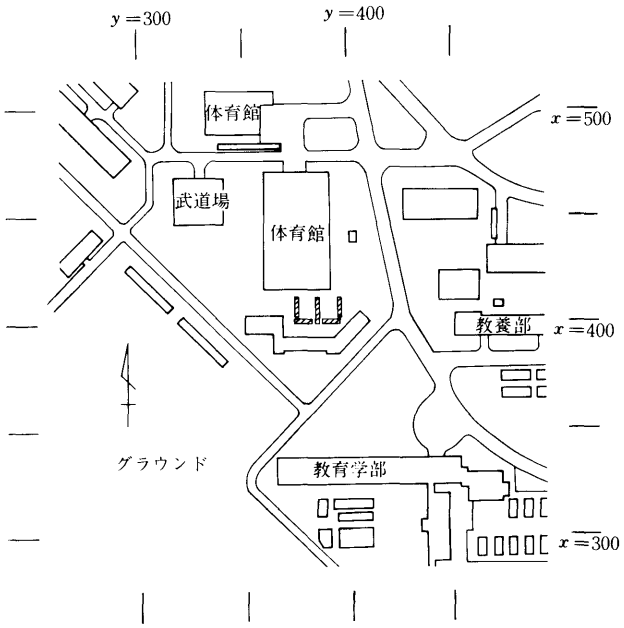


Fig.26　調査区位置図（3600分の1）

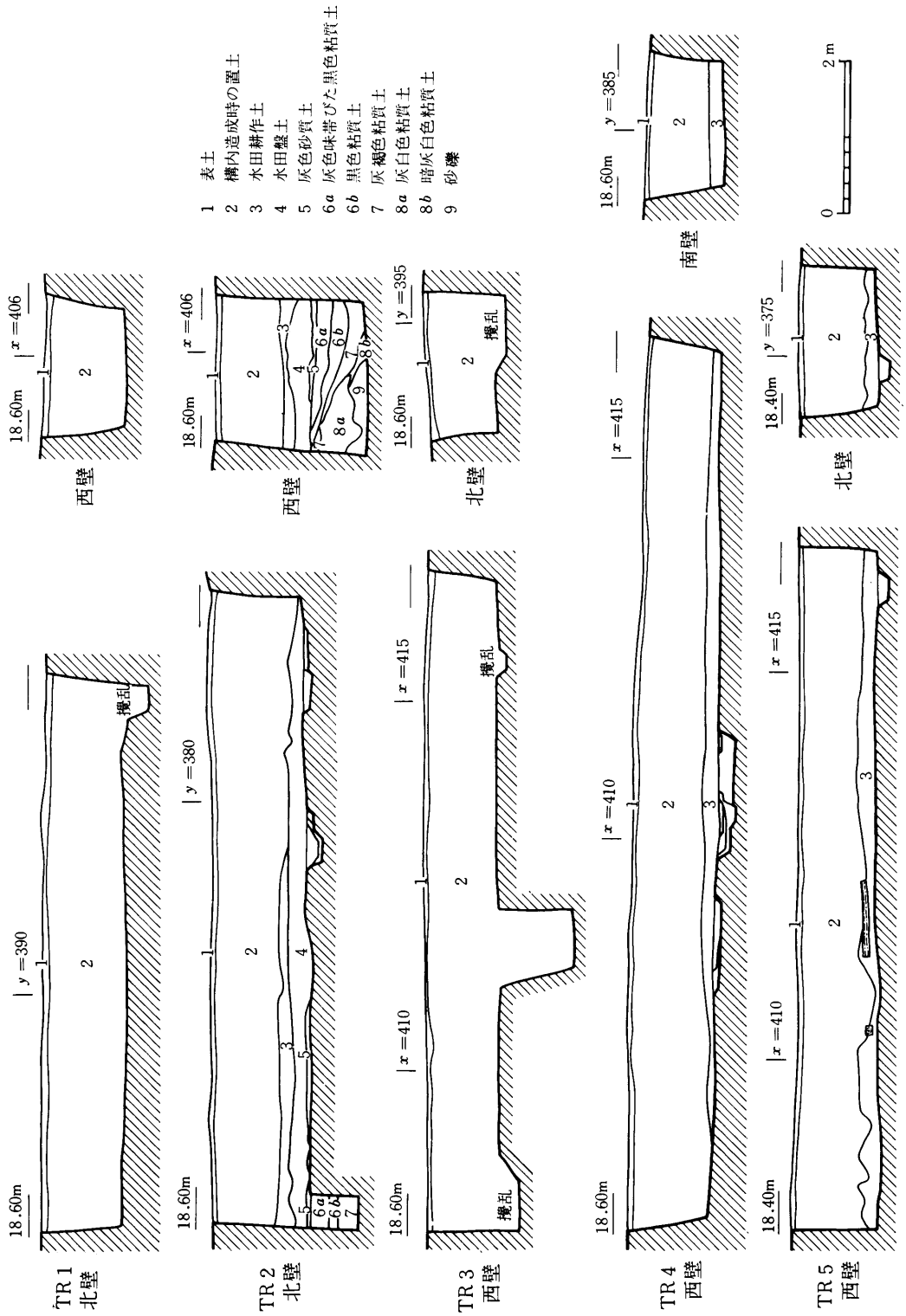

1 表土
2 構内造成時の置土
3 水田耕作土
4 水田盤土
5 灰色砂質土
6a 灰色味帯びた黒色粘質土
6b 黒色粘質土
7 灰褐色粘質土
8a 灰白色粘質土
8b 暗灰白色粘質土
9 砂礫
TR 1 北壁
TR 2 北壁
TR 3 西壁
TR 4 西壁
TR 5 西壁
西壁
北壁
南壁
撹乱
18.60m
18.40m
y =390
y =380
x =415
x =410
x =406
y =395
y =385
y =375
0
2 m

Fig.27 土層断面図

みられる(Fig.27, PL.20～22)。すなわち、東半部TR1およびTR3では80～90cmの第２層：構内造成時の置土直下が黄褐色粘質土の地山となっており、地山面の標高はＴＲ１で18.40ｍ前後、ＴＲ３で18.50ｍ前後である。西半部ＴＲ2では第２層の下部に第３層：暗灰色砂質土層（水田耕作土)、第4層：灰黄褐色土層(床土)、第５層：灰色砂質土が堆積しており地山へと続く。地山はあまり安定しておらず東壁部分では砂礫を含み、y＝377付近から西壁に向かうにつれて漸移的な色調の変化がみられた。6ａ～8ｂおよび９層は無遺物層であった。地山面の標高は約18.20ｍである。ＴＲ4およびＴＲ5では85～100cmの置土直下は暗灰色砂質土層を介して地山に続く。地山面の標高は18.10～18.20ｍ前後である。なお、９層において湧水をみた。

3　遺構と遺物

検出された遺構には溝と土壙とがありＴＲ2、ＴＲ4、ＴＲ5においてみられた(Fig.28～30 PL.21・23)。遺構が検出される地山面の標高はＴＲ２、ＴＲ４で約18.20ｍ、TR5で約18.10

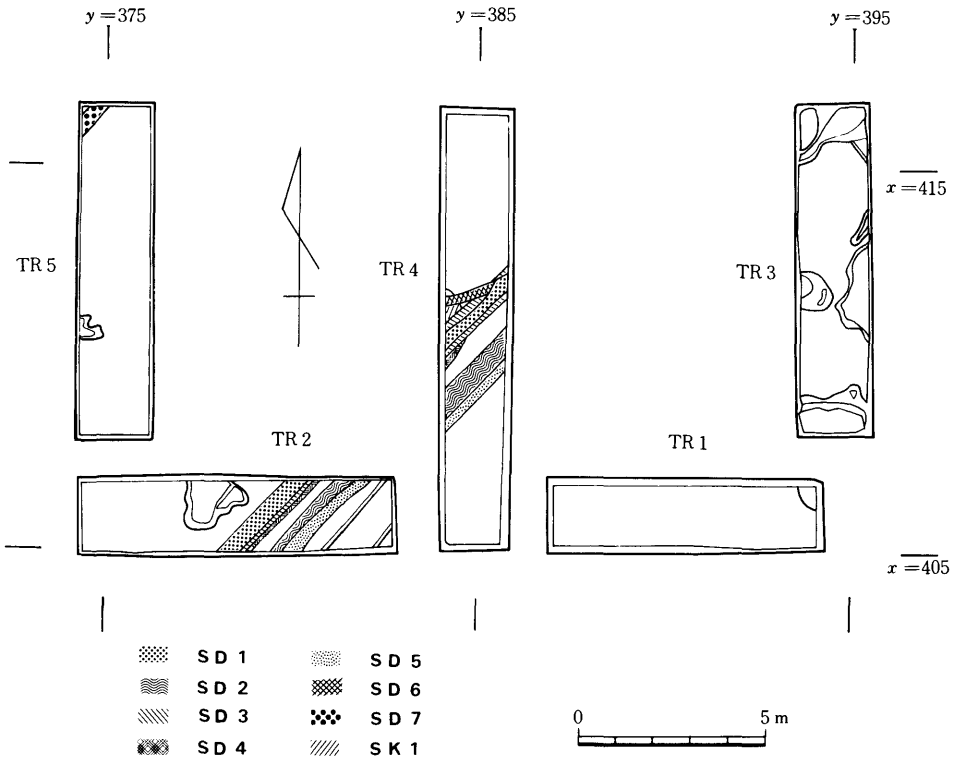


Fig. 28　遺構配置図

mである。溝はいずれもＴＲ２におけるx＝405、y=381からx=406.5、y=383 を結ぶ落ち込みラインと平行して、北東から南西方向に営まれている。この落ち込みは教育学部構内Ｈ－19区における調査で検出された落ち込みと同様の性格を有するものと思われ、ＴＲ２における所見では約12cmの段差をもつ。また、同一溝の再掘削の可能性も十分考えられるが、いずれの面も上面をかなり削平され、かつまた単一覆土で単期間に埋没したものと思われ、断面観察等による判断材料に乏しく、検出された個々の溝すべてについて便宜的に名称を与えた。以下、各遺構について述べる。

(1)　溝

溝１

最も新しい時期の溝で溝３を切っている。

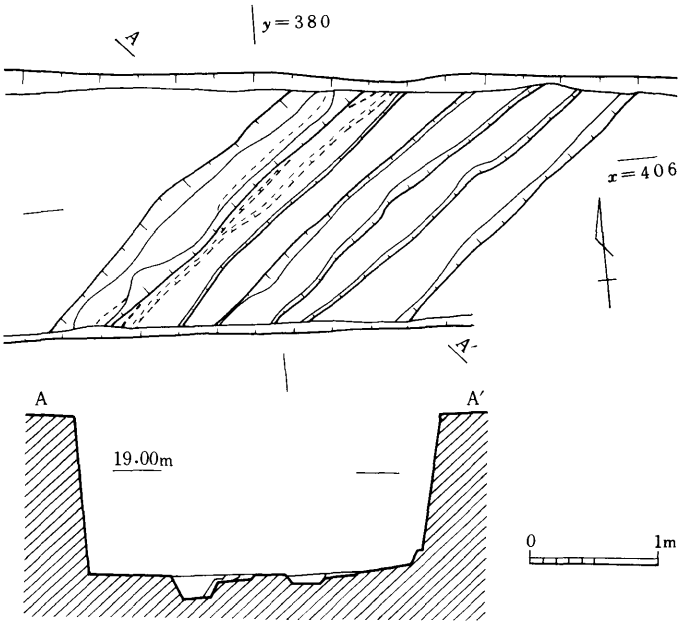


Fig. 29　ＴＲ２遺構配置図(1/60)

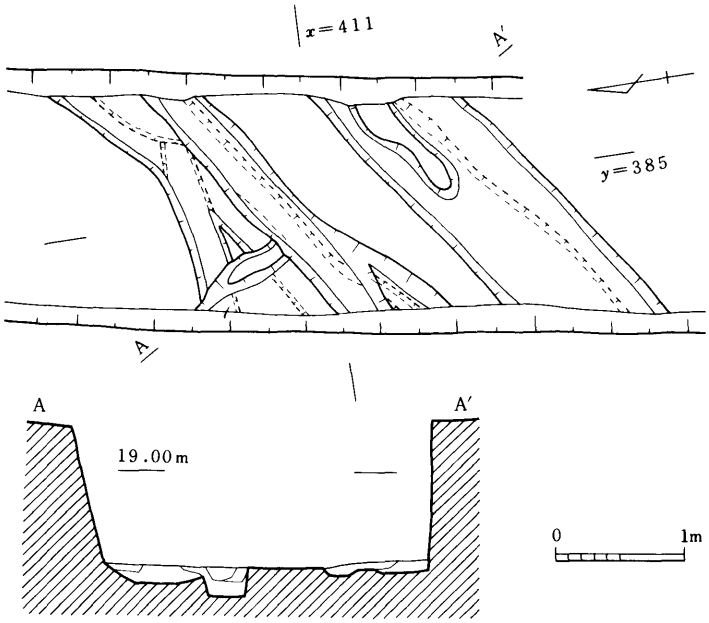


Fig. 30　ＴＲ４遺構配置図(1/60)

TR2では西側肩部が２段掘りで幅45～55cm、深さ18cm前後の規模をもち断面形態は逆梯形に近い。暗灰色微砂土の覆土中より溝底から約12cm上面で陶器片が出土したが図示不可能であった。ＴＲ４では西側肩部北側のみ２段掘りとなっており、幅はこの部分で約60cm、他は25cm前後である。深さは約14cmで断面形態は逆梯形に近く、覆土から遺物は出土しなかった。

溝２

溝５を切つて営まれている。ＴＲ２では幅30～40cm、深さ８～10cmで断面形態は逆梯形に近い。ＴＲ４では幅60～70cm、深さ３～９cmで溝底は東側において島状に隆起している。灰褐色を呈す粘質の覆土からの出土遺物は皆無であった。

溝３

溝４を切っている。ＴＲ２では東側肩部は２段掘りで幅約55cm、深さは最深部で19cmである。ＴＲ４では幅36～40cm、深さ12cmの規模をもち、断面形態は逆梯形に近い。内部に充塡した暗茶褐色粘質土からの遺物は皆無であった。

溝４

ＴＲ４で土壙１を切っており溝６に切られている。西側肩部は２段掘りになっており、幅60～75cm、深さは最深部で23cm。淡茶褐色粘質の覆土からの出土遺物はみられなかった。

溝５

溝２によって切られている。幅は判然としないが、深さはＴＲ２で３cm、ＴＲ４で７cmである。内部に充塡した黒褐色粘質土よりの遺物の出土はない。

溝６

ＴＲ４で土壙１を切っている。幅約25cm、深さ５cmの残存で、断面形態は逆梯形に近い。他の溝と異なりほぼ東西方向に存在する。覆土は灰色味をおびた茶褐色粘質土で内部から遺物は出土していない。

溝７

ＴＲ５の北西隅で検出された溝である。幅42cm、深さ約25cmの規模をもち、断面形態は「U」字形に近い。覆土は暗灰色微砂土で遺物は全く含んでいなかった。

(2)　土壙

１号土壙

ＴＲ４西側中央部で検出された土壙で溝４によって切られている。全体の形状は不明であるが最深部で深さ25cmである。覆土は黒色粘質土で内部から遺物は出土しなかった。

(3)　小結

今回の調査で明らかになった遺構は単純計算すると溝７条、土壙１基である。その新旧関係は下記の如くである。（旧→新）

１号土壙⟶溝４⟶溝３⟶溝６⟶溝１

溝５⟶溝２

各遺構の時期比定は極めて困難であり、わずかに概括的に中世のものとして溝１をとらえうるにすぎない。覆土でみる限りでは土壙１、溝３・４・５を弥生時代から古墳時代のものとみることができるが詳細は不明である。溝３は溝４の掘削の所産であるかもしれない。

東半部ＴＲ１およびＴＲ３では構内造成時の置土直下が黄褐色粘質土の地山となっており、地山上部に水田耕作土ならびに床土の残る西半部ＴＲ２とは様相を異にする。また、現地山面の比高差は30～40cmあり東半部が西半部とくらべ高くなっている。このことは、水田造営時および構内造成時の削平を考慮に入れても旧来の地山は東から西に向けて傾斜していたことをうかがわせる。また、黄褐色粘質土は本大学構内においては基本的に住居跡、土壙等の遺構が掘り込まれる地山面であるが、本調査区においてはＴＲ５北隅、ＴＲ２、ＴＲ４で溝、土壙を検出したのみであった。これにはおおむね次のことが考えられよう。(1)住居跡の基本的要素が削平により消失。(2)本調査区のトレンチ間に住居跡の基本的要素が存在する。(3)本調査区が居住区としての性格を有していなかった。(1)については東半部では不明であるが今回検出した溝が小規模のものであるにもかかわらずその流路を検出しえたことにより困難がある。(2)については従来の調査等により検出した住居跡の要素、特に柱穴等は居住区とみなされる地域については普遍的に存在し、しかもその密度が比較的高いことにより肯首できない。したがって(3)の可能性が強いものと考える。それは、本調査区においては混地化の傾向をうかがわせる資料は検出しておらず、意識的に居住区としての機能を持たせず、用、排水の流路として機能したと思われる溝の掘削地域として充てたものと思われる。しかし、本調査区の南約 130 m に位置する教育学部構内Ｈ－19地点では少なくとも弥生時代中期から後期にかけての住居跡で検出され、さらに北に延びる様相を示している。周辺地域の調査が不十分なため今後の調査に期するところがおおいが(3)として捉えられるのであれば居住区および非居住区としての地域範囲の検討は集落立地、規模さらには生業形態を知るうえで興味ある問題である。

〔註〕　(1)　山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」1976

第４節　教育学部構内Ｊ－19・20区の発掘調査

１　調査目的および経過

本調査区は大学キャンパスの南西部にあたり、第２節で述べた教育学部構内Ｈ－19区調査地点の西約110ｍに位置する。吉田遺跡調査団の呼称する第Ｖ地区の西部に相当し、遺跡保存地区と約50ｍの距離にある(Fig.31, PL.24)。

昭和42年および昭和45年の調査では経済学部の西南隅から第１食堂の南にかけて弥生時代中期を上限とする自然河川が検出されている。また、教養部から経済学部の地域においては泥炭層が広がり湿地化していたことをうかがわせる。

本地区に教育学部美術科・技術科実習棟が新営されることになり、昭和56年11月18日から翌昭和57年１月６日まで調査を行なった。調査は既設の実習棟部分を除外した拡張によって影響を受ける約130㎡について実施した。

なお腐蝕土および構内造成時の置土は機械を使用して排除し、それより下部は分層発掘を行なった。

２　層序(Fig.32)

第１層：腐蝕土層
第２層：構内造成時の置土層
第３層：暗灰色砂質土層
　　(水田耕作土)
第４層：黄褐色粘質土層
　　(水田床土)
第５層：淡黄褐色粘質土層
第６層：灰褐色粘質土層
第７層：淡茶褐色粘質土層
第８層：黒色粘質土層
第９層：灰色粘質土層
第10層：砂礫層
第11層：暗灰色微砂土層
第12層：暗茶褐色粘質土層
第13層：茶褐色微砂土層
第14層：茶褐色微砂土層（第13にくらべ明るい）
第15層：砂礫層

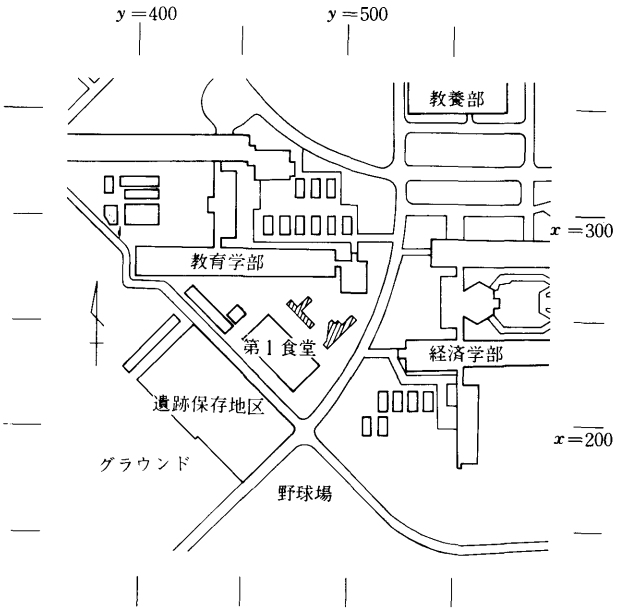


Fig. 31 調査区位置図(3600分の1)

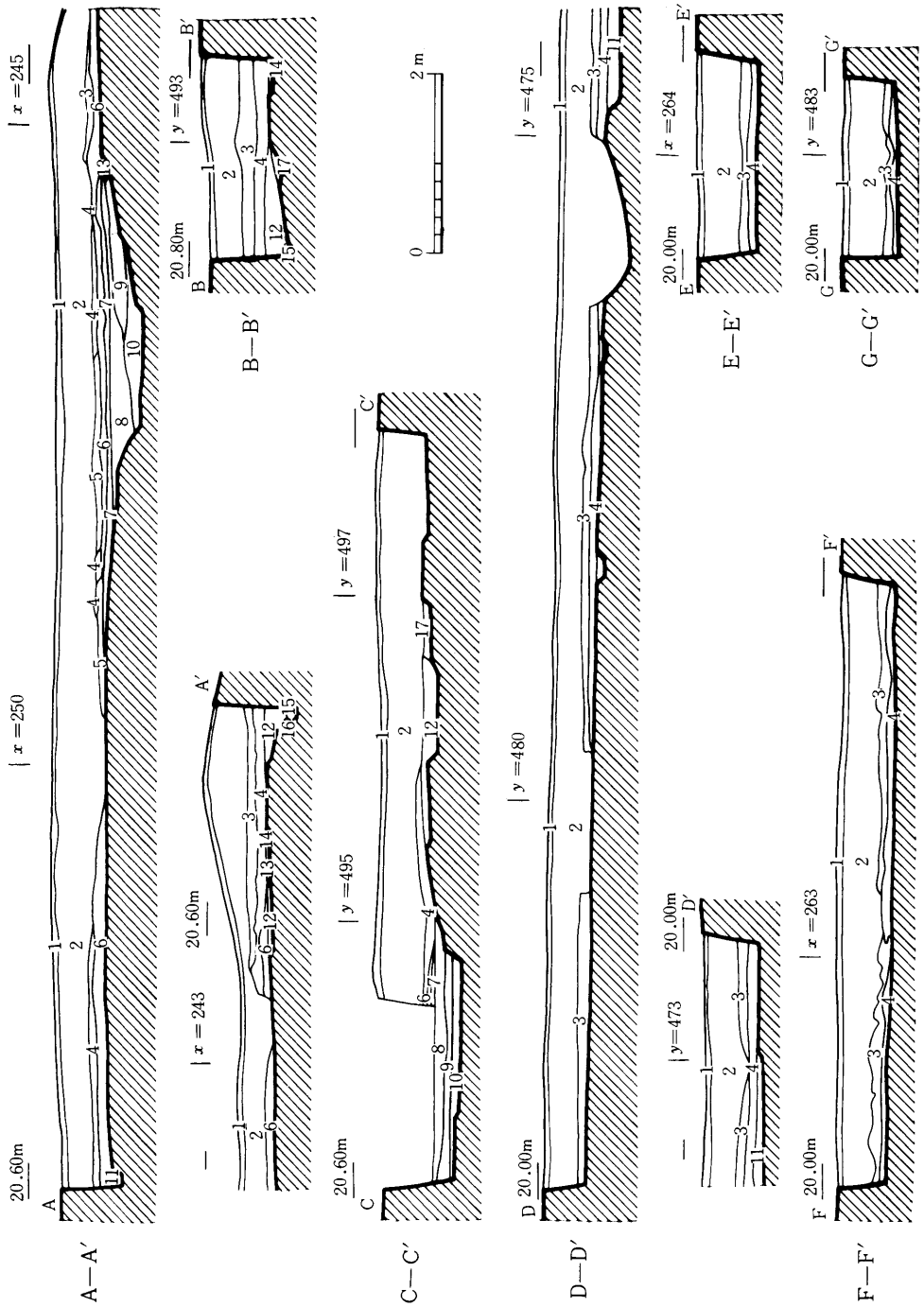


Fig. 32 土層断面図(1/80)

第16層：青灰色粘質土層

第17層：明茶褐色粘質土層（第12層にくらべしまり悪い）

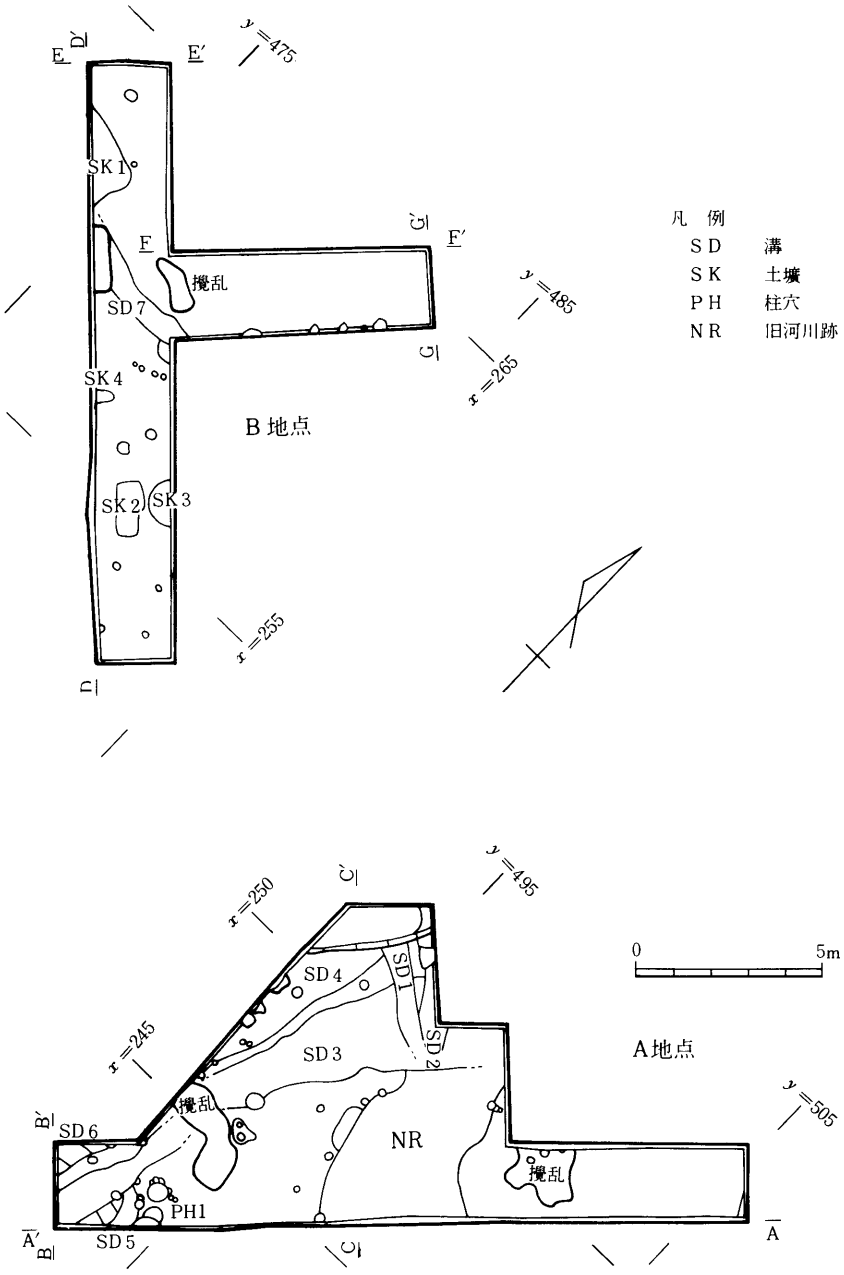


Fig. 33　遺構配置図(1/200)

現地表面の標高はＡ地点で約20.30ｍ、Ｂ地点で約19.80ｍで東から西に傾斜している。土層の堆積状態は両地点により若干の差異がみられ、Ａ地点では第３層は南部においてのみ観察され、第４層も普遍的にはみられないが両地点とも南部に厚く堆積している。黄褐色乃至青灰色粘質土の地山はおおむね第６層下部に存在し、遺構検出面の標高は19.70～19.95ｍで南部から北部へ傾斜している。東部においては第７層あるいは第２層直下に地山が存在する。

Ｂ地点では各層ともほぼ整合状態で堆積しており、おおむね第４層直下が地山で西部のみ第３層直下に地山が存在する。遺構検出面の標高は西部で19.50ｍ、東部で19.20ｍで西部から東部に向かって傾斜している。

3　遺構と遺物

Ａ地点では溝６条、旧河川跡、柱穴、Ｂ地点では溝１条、土壙４基、柱穴が確認された(Fig. 33, ＰＬ．24)。各遺構とも上面の削平が著しく遺存状態はあまり良好ではない。

以下、各遺構について述べる。

Ａ地点 (Fig.33, PL.25)

(1)　溝

溝１ (Fig. 33, PL. 26)

北隅で検出された溝で溝２・３・４を切っている。北西から南東方向に存在し幅50～60cm、深さ９cmの規模をもつ。断面形

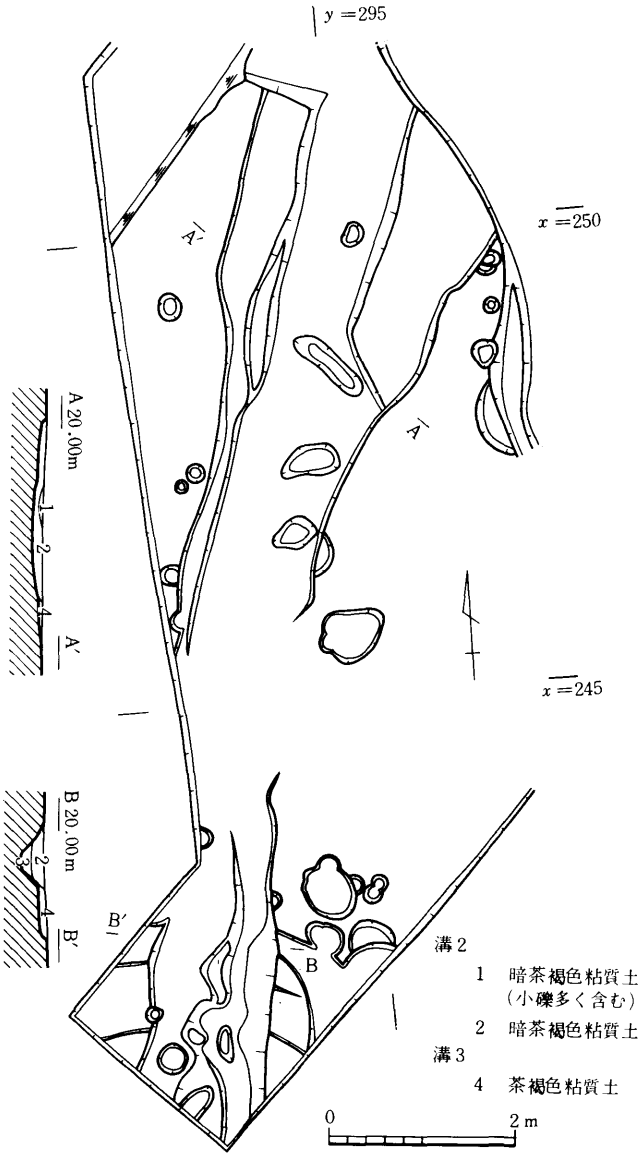


Fig. 34　溝３・４・５・６実測図(1/80)

態は逆梯形に近い。覆土は淡黄褐色微砂土で遺物は出土しなかった。

溝 2（Fig.33，PL.26）

溝1と同一方向に存在し、溝3・4を切っている。断面形態は逆梯形で幅約70cm、深さ約5cm。溝内に充塡した濁黄褐色微砂土からの出土遺物はなかった。

溝 3（Fig.34，PL.27～29）

南北方向に存在し、溝4を切っている。全体に削平が著しくx=245付近では流路を明確にとらえることができない。最大溝幅はx=250付近で230cm、最小溝幅はx=243付近で60cm、溝深はA－A′で18cm、B－B′で24cmの規模をもつ。溝深は北部においてはほぼ同一であるが南部では最南端で34cmを測り徐々に深くなっている。また、南部では溜り部を形成し、溝底に深さ10～15cmの砂礫が堆積しており、北部にくらべ溝底が下がる。

遺物は第2層から縄文式土器、および弥生式土器が（Fig.35，PL.40－(2)）、第3層から須恵器、土師器が出土した。図示しうるのは第2層出土の3点のみである。1はx=247.2、y=294.4付近で出土した壺の口縁部である。いわゆる「鋤先」状口縁をもち口縁部上面は平坦である。内部への突出は小さく、断面形態は三角形である。現存する破片では浮文等はみられない。内外面とも丁寧な横ナデにより仕上げている。胎土良好、濁黄褐色を呈し焼成は堅緻。口径40.4cm。2は胴部が「く」の字に内側に屈曲する甕の口縁部である。屈曲はさほど顕著ではない。磨滅著しいが外面に左上り、内面に右上りの刷毛目調整を施し、口縁端部よりやや下位に断面三角形の篦状工具によると思われる扁平な刻目突帯を貼りつけている。胎土に多量の石英粒、長石粒を含み、焼成は良好。外面黄褐色、内面黒色を呈す。3は壺の頸部から胴部。3条の篦描き沈線下に無軸羽状文を施す。外面は器面の荒れにより調整不明、内面はナデ仕上げ。石英粒を主とした砂粒を多量に含み、焼成は良好、濁黄褐色を呈す。

溝 4（Fig.34，PL.27～29）

流路は溝3と同一方向で溝3によって切られている。x=245付近は削平により失われて

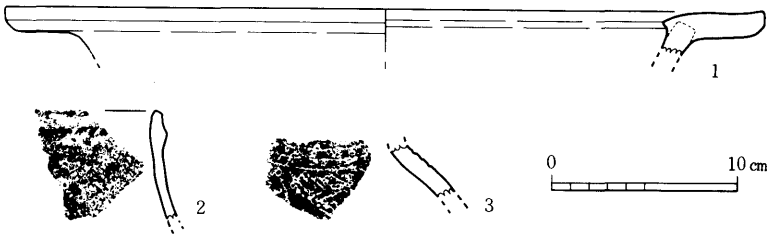


Fig.35 溝3出土遺物実測図（1/4）

いる。現存する溝深はＡ－Ａ′で６cm、Ｂ－Ｂ′で11cmである。溝内に充填した暗茶褐色粘質土から遺物は出土しなかった。

溝５（Fig.34, PL.30）

南西隅において検出された溝で東西方向に存在する。溝６を切り、溝４に切られている。断面形態は逆梯形に近く、幅約30～45cm、深さ約５cm残存するのみである。茶褐色微砂土の覆土からは遺物は出土しなかった。溝底標高は約19.90ｍである。

溝６（Fig.34, PL.30）

溝５によって切られており東西方向に存在する。幅50～75cm、深さ約４cmの規模をもち、断面形態は逆梯形に近い。溝内に充填した明茶褐色微砂土からの出土遺物は皆無であった。溝底標高は約19.92cm前後である。

(2)　旧河川跡（Fig.36, PL.31～32）

調査区中央部に位置し、南北方向の流路をもつ。溝３に切られており幅は2.70～3.90ｍ、深さは24～40cmで南に向かうにつれてやや幅が広がり深くなる。すなわち溝底標高はＡ－Ａ′で約19.60ｍ、南壁付近で19.30ｍであり溝底は北から南に向かって傾斜してい

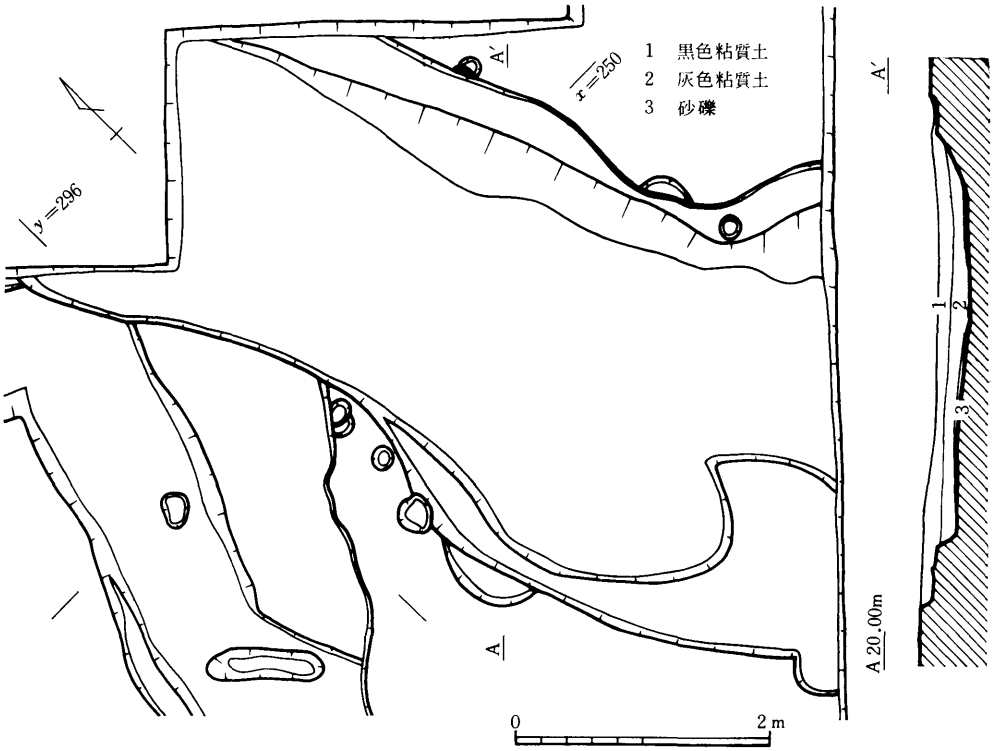


Fig. 36　旧河川跡実測図（1/60）

る。溝底には砂礫の堆積をみた。また、南部西壁付近では溜り部を確認した。覆土は3層に分層されるがいずれも遺物を包含する。最上層の黒色粘質土からは須恵器、土師器、弥生式土器、灰色粘質土からは土師器、弥生式土器、最下層の砂礫層からは弥生式土器が出土したが、図示しえたのは灰色粘質土よりの出土遺物のみである(Fig.37,PL.40—(3))。砂礫層は流木、木葉を含んでいた。1は壺の口縁部。内面3分の2を篦磨きし、その他はすべて横ナデにより仕上げる。焼成不良、胎土精良、濁黄褐色を呈す。口径18.9cm。2はやや上げ底の甕の底部。外面は底面ナデ、側面は丁寧なハケ目調整を施し、内面はナデ。胎土、焼成とも良好で外面赤褐色、内面褐色を呈する。3はいわゆる複合口縁壺で口縁端部を欠損する。短い頸部にほぼ直立する口縁部をもつ。内外面とも横ナデにより仕上げる。胎土不良、焼成良好、黄褐色を呈する。4・5は「く」の字に屈曲する甕の口縁部。4は張りの小さい胴部をもち、口縁部内外面横ナデ、他は刷毛目による調整を施す。胎土不良、焼成良好で内面褐色、外面黄褐色を呈する。5はやや屈曲の強い口縁部をもち、外面は横ナデで仕上げるが内面は不明。胎土、焼成とも良好で赤褐色を呈する。6は甕の胴部。刷毛目調整後の篦描きによる沈線が2条確認できる。内面はナデ仕上げ。胎土良好、焼成堅緻、黒褐色を呈する。

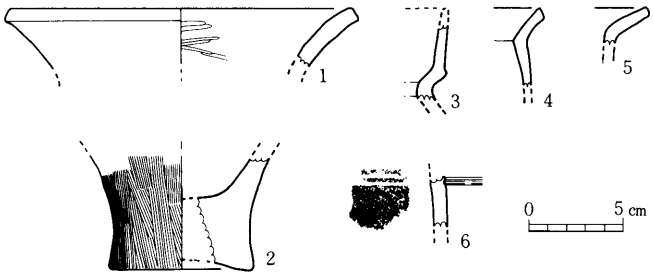


Fig. 37 旧河川跡出土遺物実測図(1/4)

(3) 柱穴

総数40個弱確認した。若干の平面的規模の差異は存在するが、顕著な削平によりいずれもも深さは5～10cm前後で柱穴掘削状態も十分に観察しえなかった。したがって、灰色微砂土、暗茶褐色粘質土、茶褐色微砂土に大別される各柱穴の覆土によって建物復原を試みたがかんばしい結果は得られなかった。

B地点(Fig.33, PL.33)

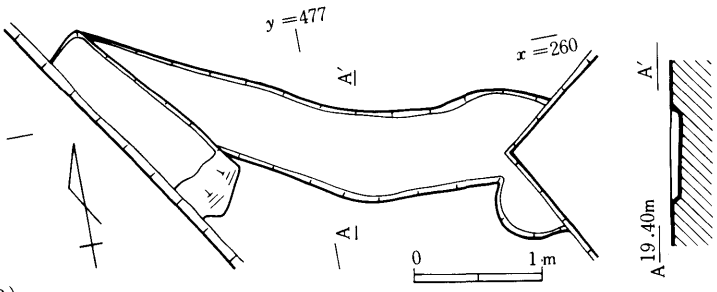


Fig. 38 溝7実測図(1/60)

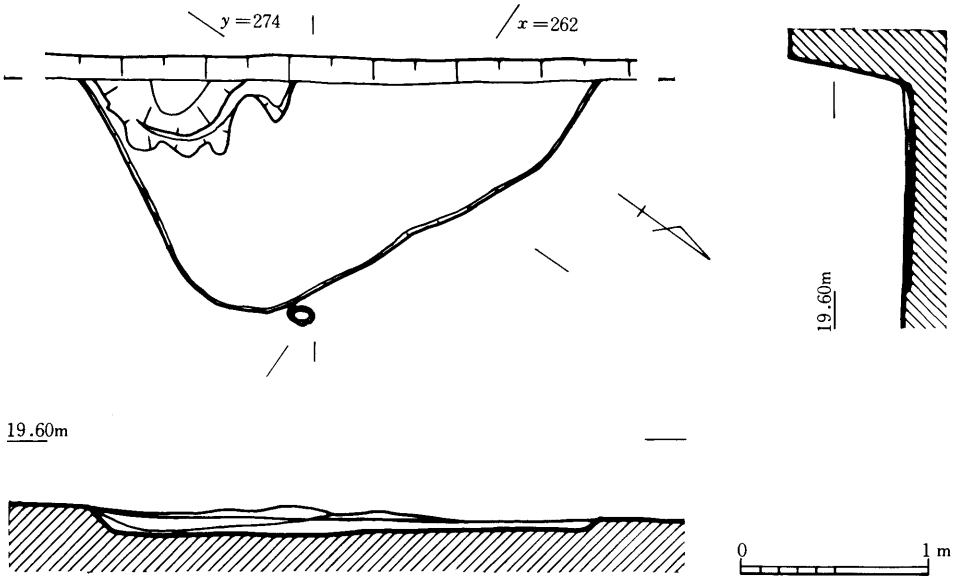


Fig. 39　1号土壙実測図(1/40)

(1)　溝

溝 7（Fig. 38, PL.34）

調査区中央部に位置しほぼ東西に存在する。西に続く部分は削平により消失している。幅62～70cm、深さ２～６cmの規模をもち溝底標高は東西両側とも 19.28 m である。覆土は灰色微砂土で遺物は出土しなかった。

(2)　土壙

１号土壙（Fig.39, PL.34）

調査地点の西部に位置する土壙で近接する自転車置場のために完掘に到っていない。深さは東側で６cm、西側で２

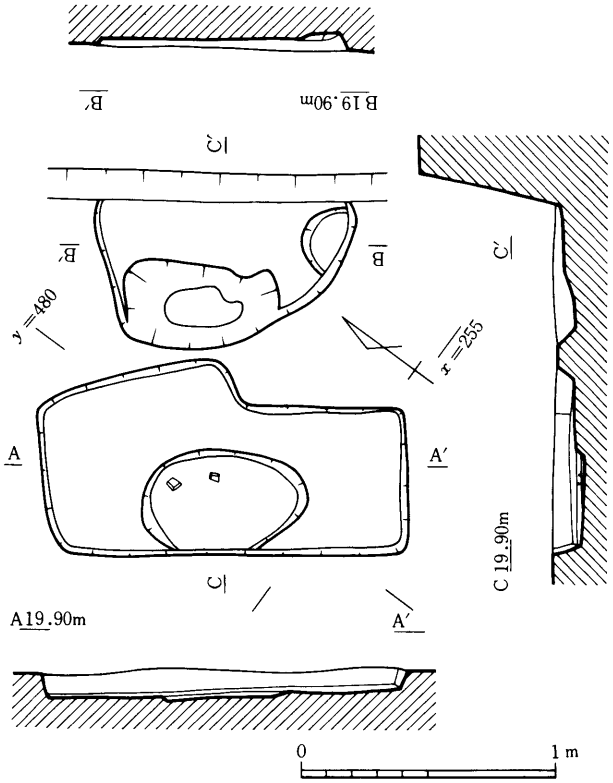


Fig.40　２・３号土壙実測図(1/30)

cmを測るのみである。東壁傍には深さ10cm前後の不整形な掘り込みが検出された。内部に充塡した灰色微砂土からの出土遺物はなかった。

2号土壙(Fig.40, PL.35)

調査区東部で検出された土壙である。平面形態は東辺の突出した長方形で南北軸143cm、東西軸73cm、深さ10cmの規模をもつ。床面は南から北へわずかに傾斜しており標高19.65mである。また、西側辺に接して南北64cm、東西39cm、床面からの深さ3cmの楕円形の掘り込みが確認された。壙内には黄色味をおびた茶褐色粘質土が充塡しており、弥生式土器2点が出土したが図示不可能であった。長軸方位はN－36°－W。

3号土壙(Fig.40, PL.35～36)

2号土壙の東傍に近接して営まれており、既設建築物が存在するため完掘していない。平面形態は円形乃至楕円形に近いものと思われ南北軸97cm、東西軸55cm以上である。床面は東から西に向かって傾斜しており、標高は約19.70mである。また、西部および南部に掘り込みが認められ、深さはそれぞれ4cm、2cmである。覆土は茶褐色粘質土で遺物は包含していなかった。

4号土壙(Fig.11, PL.36)

溝7の南に位置する土壙で調査区外に及ぶため完掘に到っていない。平面形態は東西に長い楕円形状になるものと思われ長軸121cm以上、短軸72cmの規模をもつ。壙深は最深部でも19cmを測るにすぎず、床面標高は19.95m前後である。灰色微砂土の充塡した壙内から遺物は出土しなかった。

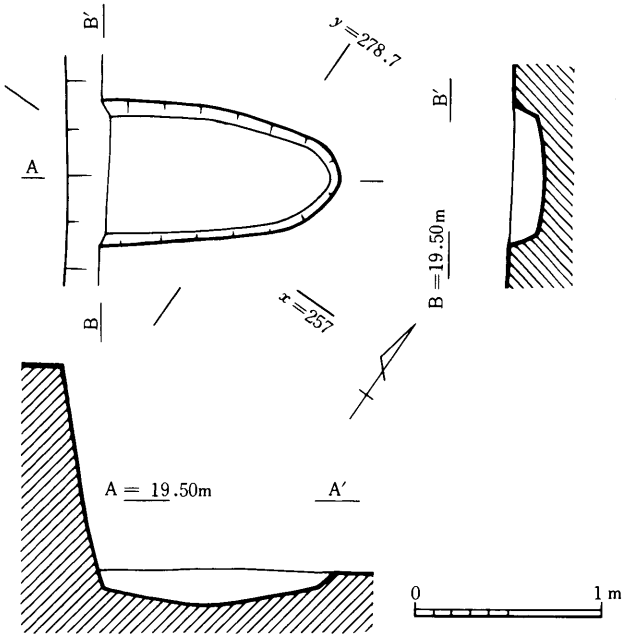


Fig.41 4号土壙実測図(1/40)

(3) 柱穴

14個検出した。各柱穴の覆土は灰色微砂土、茶褐色粘質土に大別される。$x=250$以南の四柱穴は茶褐色粘質土の覆土でいずれも上面径

25cm前後、深さ15cm前後の規模をもち住居跡の可能性が強い。

(4)　その他

第４層、第６層、第11層から遺物が出土している。第４層からは弥生式土器が出土した(Fig. 42)。壺の底部で磨滅著しく調整は不明。胎土、焼成とも良好で黄褐色を呈する。第６層からは瓦器擂鉢片が出土したが図示できなかった。　第11層からは土師器小皿が出土した。底部の破片で底径４.0cm。磨滅著しく調整不明であるが、糸切りの痕跡は観察される。胎土、焼成とも良好で黄褐色を呈する。また、ＰＨ１より黒曜石の剝片が出土している。

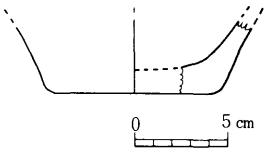


Fig. 42　第３層出土遺物
実測図（1/4）

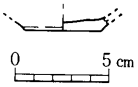


Fig. 43　第11層出土遺物
実測図（1/4）

４　小結

本調査区では既設建築物による調査面積の制約を受けつつも溝７条、土壙４基、旧河川跡１条、柱穴を検出した。溝１・２は遺物が出土しておらず時期比定は困難であるが従来までの構内各地区における調査の所見からみると近世に下がる可能性が強い。溝３は南部において溝幅を減じ、強い流水によって側壁および底面が抉られたような凹みを形成し砂礫が堆積している。また、少なからず常に流水があり溝内堆積土の反転、再堆積が起きたためか出土遺物の時期的逆転、混在が認められる。第２層において縄文時代晩期夜臼式の比較的新しい時期の甕が出土しており、溝の上限を捉えることができる。さらに溝３に切られて平走する溝４は再掘削によって溝３として機能した可能性も考えられるが、上面を削平されており遺物も出土していない為積極的な論拠は得られない。溝５・６についても覆土による切り合い関係のみの相対的新旧関係をとらえうるのみで溝４が掘削された段階ですでに廃絶したものと思われる。また、旧河川跡は溝底レベルでみる限り北から南へ流路を持っていたようであり溝３および溝４と相関関係が認められるようである。本調査区の南西、第１食堂南部の調査でも溝３、４の延長部を検出しており流路を南に向け規模を拡大しつつさらに南西に続くようである。なお、Ｂ地点で検出された２号土壙は規模、形態等から推して土壙墓の可能性があるが粘土、炭化物等は認められなかった。

以上概括的に述べたように本調査区では溝、河川が主体を占め明確な住居跡は検出されなかった。しかし、溝、河川の管理、運営とあわせて縄文時代晩期に遡る資料が得られ、特にＩ－20区に埋存する集落の立地、規模、時間的推移を知るうえで貴重な問題提起となった。

第4章　考察

キャンパス内において現在まで明確に検出された遺構は数量的に多くはない。このことは調査面積の狭小さとも相俟って従来の調査が本学の統合移転にともなう緊急調査であり、遺構・遺物の埋存状況の把握に重点が置かれた結果でもあった。このような背景のもとに先にも述べた如く吉田遺跡調査団による調査はキャンパス内を南部を中心として五地区に大別し、調査規模は各々異なるが各地区について実施されており集落構成要素としての遺構を検出している。しかし、立地、住居の分布等から推して集落全体の規模はキャンパス内において収束するとは考えられず、集落全体の住居数、分布状況、変遷について知るすべをもたないが、ここでは吉田遺跡調査団による成果を踏まえた上で今回の調査をもとに断片的な姿としてキャンパス内で把握される集落の構造、変遷について概括的にまとめておくことにする[(1)]（Fig.44)。

現在のキャンパス内は後世の水田経営および本学の統合移転による造成工事のため旧来の丘陵、台地が削平され著しい景環の変化をみせているが、統合移転前の旧地形、水田地割および湖沼の分布等によって景環の復原はある程度可能かと思われる。すなわち、北部は標高約200mの姫山から南に向って延びる丘陵がキャンパス内中央部 $x=460$、$y=600$ 付近まで舌状に張り出し、東部においては標高約284mの今山から派生した丘陵が緩やかに西に向って延び台地状を呈していたものと思われる。そして、これら丘陵の基部には小規模な谷が数ケ所認められ谷奥部標高30～40m付近には谷頭池が点在する。

南部および西部は大塚川によって形成された扇状地上に立地している。現在の大塚川はキャンパス外約200m西方を南東から北西への流路をもっているが、水田地割から推してキャンパス内 $x=130$、$y=350$ 付近を北に向って流れていたことが伺われる。このことは吉田遺跡調査団によって昭和42年に検出された河川跡と符号し、少なくとも縄文時代晩期から古墳時代にかけての基本的な流路であったのであろう。この大塚川はキャンパス南部からその南方にかけての微高地西面を流路としている。このようにしてみると、キャンパス内中央部ならびに西部は大塚川による沖積作用および谷頭池よりの湧水作用によって広範囲に沖積低地が形成されていたことが推察される。

また、キャンパス内北端部は姫山西麓に沿って流れる九田川の、また、$x=950$、$y=150$ 以北は椹野川の氾濫原であることも確かめられている。

考　　察

以上のような集落立地が考えられるが、現段階ではキャンパス内においては縄文時代の住居は検出されておらず、南部において河川跡からわずかに晩期の遺物が出土しているにすぎない。住居跡として明確に把握されるのは弥生時代前期末頃で大塚川に近接して臨む $x=50$、$y=500$付近の微高地（A地点）西縁に立地する。検出されている住居は1基のみであるがキャンパス外へも微高地が延びていることを考えれば集落の規模はさらに拡大するものと思われる。しかし、全般的に前期末の集落はこの微高地の一部に展開した小規なものであったであろう。

弥生時代中期になると、南北二つの地域に集落が形成されるようになり[(2)]前期末に南部に営まれた集落は北および東への平面的、垂直的な居住区の拡大傾向を示すようになる。しかし、微高地の西面が大塚川、東面が周辺の谷頭池に源を発する河川の流路となっており、両河川に狭まれた地域、すなわち北限 $x=300$付近、東限 $y=650$付近、西限 $y=400$付近の範囲内をその居住区としたことが推察される。なお、この期の住居は $x=200\sim250$付近、$y=400\sim450$付近の区域（旧調査区第II地区北区）約1,400m²の調査で6基、$x=50$、$y=500$付近の調査で少なくとも1基検出されている。居住区と推定される範囲内において未調査地区も多くその詳細は不明であるが、前者の地域での住居の分布密度から推して少なくとも微高地北縁部への進出傾は伺えよう。

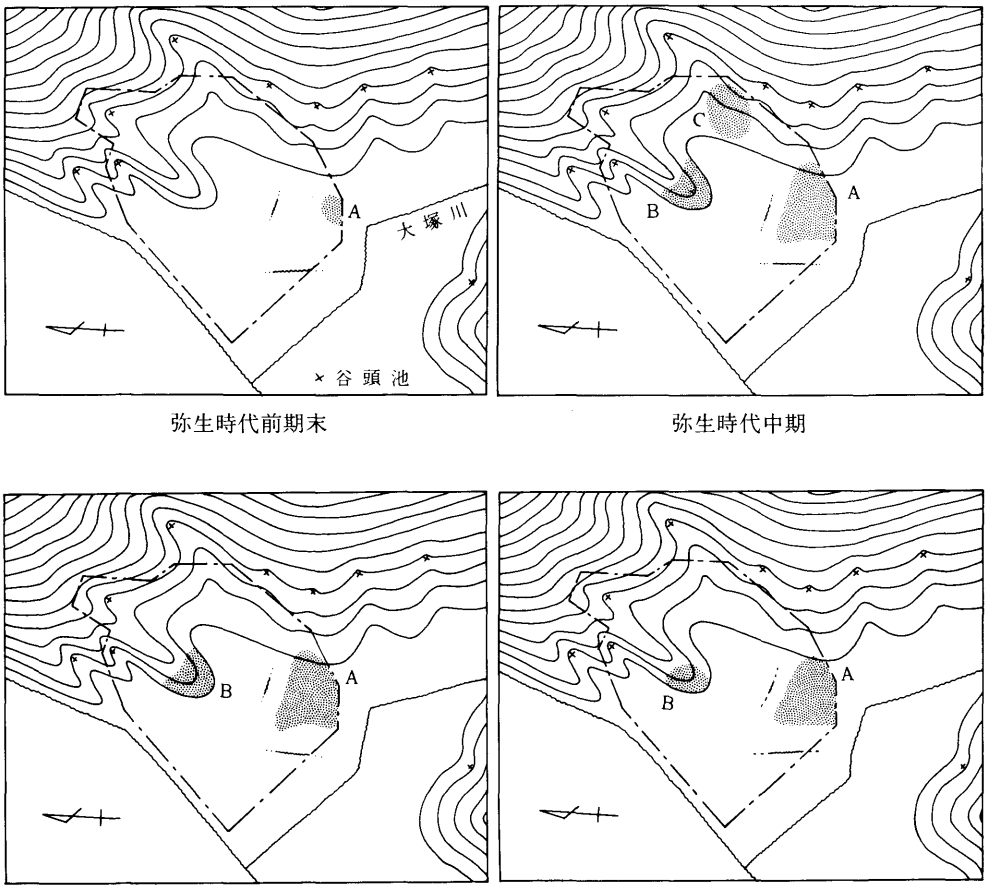
また、この期には南部に営まれた集落と直線距離にして約350m北方の丘陵（B地点）西縁部にも集落が形成されるようになる。検出されている住居は2基以上であるが、調査自体丘陵全体に及ぶものでなく、かつまた調査面積も狭小なため各住居の配置、分布状況、集落の構造等について不明な点が多い。しかし、昭和54年に実施したL－14区の調査で調査区中央部においてこの期の土壙が検出されており、$y=575$付近から南西に向って地山は急激に下降している。また、昭和46年には $x=480$、$y=690$付近（N－14区）で約2000m²に及ぶ調査が実施されているが、この調査区域内にこの期の住居は検出されていない。丘陵基部への集落の展開は北西部への丘陵の延びが小さいことも勘案すると、少なくとも東西幅約120m、南北幅約200mの範囲内にこの期の集落が営まれていたようであり、微高地上に形成された南部の集落にくらべ集落規模は小さかったことが伺える。

しかし、具体相として把握されている中期の住居は少なく時期的に細分されたなかでの各住居のあり方、群としてのあり方については不明な点が多い。集落構成要素としての資料の増加が期待されるが少なくともこの期においては二つの集落がキャンパス内に営まれており、南部の集落においては立地条件および住居の分布密度から推してかなりの数の住居

が存在していたことが予想され、北部の集落に対して拠点集落的な性格を具備していたことが考えられる。

また近年、集落構成単位としての生産・消費の基礎単位となる住居群（単位集団[3]、家族集団[4]）の抽出が行なわれ集落の具体的な構造、性格の解明が試みられている。本遺跡においても中期後半の時期に前面にひろがる低湿地における水田耕作を基盤とした経営、消費単位としての住居群が南部の微高地上では少なくとも３グループ、北部の丘陵上では少なくとも１グループ存在したことが予想され、個々の住居群の有機的な連関、相互補完的な連鎖のなかで集落が形成され、より高度のレベルで集落が結びついていたことが予想される。

後期において知られている住居はわずかでＡ、Ｂ両地点とも各１基である。Ｂ地点にお



弥生時代前期末　　弥生時代中期

弥生時代後期　　古墳時代前期

Fig.44　集落変遷模式図

いては丘陵の東部縁辺にも住居が営まれるようになるが、基本的には中期における居住範囲を大きく逸脱することなく集落が展開したものと思われる。

ここで中期後半から後期（前半）にかけての住居の平面形態および床面積の平面的変化をみてみよう。中期後半における円形および方形の平面形態の割合は、井上山遺跡[5]で円形と方形の割合が８：３、本遺跡においては４：１である。後期（前半）においてはまとまって検出された住居は少ないが本遺跡においてその割合は２：３と逆転する。

Tab.7 竪穴住居平面形態および床面積

	平面形態	床面積(㎡)
弥生中期後半	円　形	23.2
	円　形	32.2
	円　形	38.5
	円　形	62.2
	隅丸方形	27.4
弥生後期（前半）	円　形	19.1
	円　形	34.2
	隅丸方形	12.7
	長方形	13.2以上
	長方形	16.0

従来、北部九州においては弥生時代中期中葉から後葉にかけて円形から方形への住居の平面形態変化がおこり、後期以降方形プランの一般化によって円形のものは消失し以後次第に長形化してゆくとされている。しかるに本遺跡を例にとると後期（前半）においても円形は残り、円形から方形への推移は中期後半～後期（前半）にかけておこっていると見てよく、北部九州地区よりも時期的にやや遅れるものと思われる。そして後期後半になると、朝田墳墓群第II地区[6]、北迫遺跡[7]等でみられるように方形が一般化する。このように、平面形態の移行は床面積の縮少をともない少なくとも後期（前半）の段階で方形プランの住居の床面積は20㎡以下となり、以後平均的な床面積を保つようになるものと思われる。

中期後半から後期（前半）にかけての円形から方形への平面形態の変化並びに床面積の縮小は、前期から中期にかけての平面形態の変化ともあわせて単なる住居のもつ構造に起因するものなのか、さらには集落内部での個々のあるいは全体としての住居のあり方に起因するものなのか今後検討を要するであろう。

古墳時代前期になると住居こそ検出されていないが、キャンパス内東部の微丘陵（Ｃ地点）上からこの期の遺物が出土しておりＣ地点にも集落が形成されていたことが予想され、三つの集落が存在していたことがうかがわれる。しかし、これらの三集落は無秩序に形成されたものではなく自然環境に規制された立地のあり方を示しているといえよう。特にＡ地点においてみられるごとく河川の流路によってとり残された微高地上に集落が展開しているようにＣ地点においても周辺の谷頭池に源を発する小川跡に狭まれた微高地上に集落が形成されている。

考　　察

個々の住居の規模はＢ地点においてその傾向が認められるが、４基検出された住居は少なくとも新旧二時期にわたって営まれたようである。古い時期の住居は２基で隅丸方形、隅丸長方形の二つのタイプの平面形態がみられ、床面積は前者が23.4m²、後者が31.6m²である。新しい時期の住居はいずれも平面形態隅丸方形で床面積は16.2m²、11.2m²の２基である。Ｂ地点でのわずかな例をとってみると古墳時代前期において時期的に後出のものには規模の小形化の傾向が伺える。

中・後期の明確な住居はＡ・Ｂ・Ｃ三地点においては検出されていないが、土壙、柱穴等が認められておりその存在は十分予想される。また $x=700$、$y=750$付近では後期の住居跡２基以上が検出されており狭い谷を臨んだ丘陵縁辺部高所にも集落が分散していたことを伺わせる。

以上述べたように弥生時代前期末頃にキャンパス内に形成された集落は、中期に移ってその前面にひろがる肥沃な低湿地における水田耕作を基盤に内部成長を遂げたであろう。それはとりもなおさず、血縁協同体として把握されるであろう家族集団の成長を意味し、中期後半における集落のあり方にも暗示されているといえる。しかし、こうした集落のあり方はそれ自体無秩序な膨張を意味するものではなく、生産基盤とする農業経営にかかわる協業を一つのモメントとして、より高位のレベルの集団の規制のもとに収斂していったものと推察される。

今後キャンパス内における資料の蓄積をまって、集落と不可分な葬制のあり方を含めて集落構成の基本単位としての家族集団の具体的なあり方、成長の過程についてアプローチしてゆきたい。

〔註〕
(1) 吉田遺跡調査団による調査の成果報告はなされておらずその詳細は不明である。
(2) 現在までのところ弥生時代中期前葉、中葉の住居は知られていない。
(3) 近藤義郎　「共同体と単位集団」『考古学研究』第６巻第１号　1959
(4) 高倉洋彰　「弥生時代社会の研究」　寧楽社　1981
(5) 井上山遺跡発掘調査団　「井上山」　1979
(6) 山口県教育委員会　「朝田墳墓群Ⅴ」　山口県埋蔵文化財調査報告第64集
(7) 小野忠熙他　「北迫遺跡」　『宇部の遺跡』　1968

第５章　昭和54・55年度調査の概要

第１節　昭和54年度調査の概要

昭和54年度は理学部（ＰＬ．１－13)、農学部（ＰＬ．1－14)、本部（ＰＬ．1－15）の構内において事前調査を実施した。現在、資料整理を継続中であり詳細は後日に譲ることにしその概要を述べておく。

理学部構内では校舎新営工事、農学部構内では動物舎新営工事にともないそれぞれ調査を実施した。両地区とも大学キャンパスの南部に位置し、前者は構内地区割のＯ－19区、後者はＰ－18区に該当する。両調査区とも道路を隔てた東側の農園との比高が５ｍ近くあり、調査当初より東からのびる低丘陵がこの地区でかなり削平を受けていることが予想された。したがって両地区とも予定地内に幅３ｍのトレンチを設定して遺構、遺物の有無ならびに土層の堆積状況を観察した。

Ｏ－19区では予定地内に南北方向３本、東西方向１本の合計４本のトレンチを設定して調査を実施した。その結果、現地表面から黄褐色粘質土の地山に到る堆積土はすべて厚さ30～40cmの構内造成時の置土であり遺構・遺物は認められなかった。現地表面の標高は約21.10ｍで平坦であった。

Ｐ－18区はＯ－19区調査地点の北約70ｍに位置する。現地表面の標高は約20.60ｍでほぼ平坦である。予定地内東西方向に２本のトレンチを設定したが、東側で約60cm、西側で約110cmの構内造成時の置土直下の黄褐色粘質土の地山となっており、遺構・遺物は確認されなかった。

また、本部構内では管理棟新営工事にともない予定地内約800m²について調査を実施した（Fig.45)。調査区は大学キャンパス内の北部に位置し、構内地区割のＬ－14区にあたる。北東から延びる丘陵の先端部附近に立地し、現地表面の標高は東部で22.20ｍ、東部で21.50ｍで東から西に向って傾斜している。黄褐色粘質土の地山面の標高は東部で21.80ｍ、南西部では19.40ｍであり、東部から西部にかけて緩やかに傾斜しており、特に南西部においては急激に下降している。地山面の下降する南西部においては地山上に２枚の無遺物層をはさんで下層から縄文時代晩期～弥生時代後期、弥生時代前期～弥生時代後期、弥生時代中期～古墳時代後期に属する３枚の遺物包含層を確認した。東部においては構内造成

時の置土直下が地山となっている。最上層の遺物包含層からは有孔円枚4、剣形品1、斧(鍬)3、楯1の滑石製模造品のほかに手捏土器多数が出土している。

遺構は南西部の地山が下降し始める部位から土壙4基を検出した。このうち2基の土壙からは多量の遺物が投棄された状態で出土した。弥生時代中期後半～後期初頭に属すると思われる土壙は平面形態楕円形を呈し、長軸188cm、短軸134m、深さ約45cmの規模をもつ。また弥生時代後期終末～古墳時代初頭に属すると思われる土壙は平面形態不整五角形を呈し、長軸174cm、短軸167cm、中心部での深さ47cmの規模をもつ。

他の2基は平面形態長楕円形で長軸174cm、短軸60cm、中心部での深さ29cmの規模をもつものおよび平面形態楕円形で長軸76cm、短軸50cm、中心部での深さ16cmの規模をもつもので、内部からの遺物の出土はない。

また、北部においては「コ」の字形にめぐる室町時代の溝の内部に井戸、土壙墓を備え持つ建物跡が検出された。囲繞する溝は幅80～110cm、深さ15～35cmで断面形態は東部で「U」字形、西部で逆梯形を呈する。井戸は環溝に囲まれた部分の南西部で検出された石組井戸である。石組上面径は71×81cm、深さ203cmで平面形態はほぼ円形である。内部からは土師器の坏および木器が出土し、底面には据えおかれた状態で曲物が認められた。土壙墓は南西部の環溝屈曲部附近に位置する。平面形態は長方形で長軸81cm、短軸49cm、深さ48cmの規模をもつ。底面から土師器の杯および骨片が出土した。

以上、述べてきたようにO－19区、P－18区における調査では後世の削平のため遺構・遺物は認められず、その内容については不明の点が多い。しかし、東部に位置する丘陵上には弥生時代中期から中世に到る住居跡、溝等が検出されており、削平の状態から推して両調査区一帯においても同様な遺構が存在していた可能性が大きい。

また、L－14区における調査では生活遺構を検出した。弥生時代に属するものとしては少なくとも2時期の土壙を検出したが、それらに伴うと思われる明確な住居跡は検出されていない。室町時代の建物跡は近年資料が増加しつつある環溝を有するもので内部に井戸、土壙墓を付設し、中世末期の生活形態のひとつのパターンを示唆するものとして興味深い。

Fig.45 L－14区遺構配置図（200分の1）

第２節　昭和55年度調査の概要

昭和55年度は経済学部構内（ＰＬ.1－16)、農学部構内（ＰＬ.1－17)において事前調査および本部構内（ＰＬ.1－18)、農学部構内（ＰＬ.1－19）において立合調査を実施した。

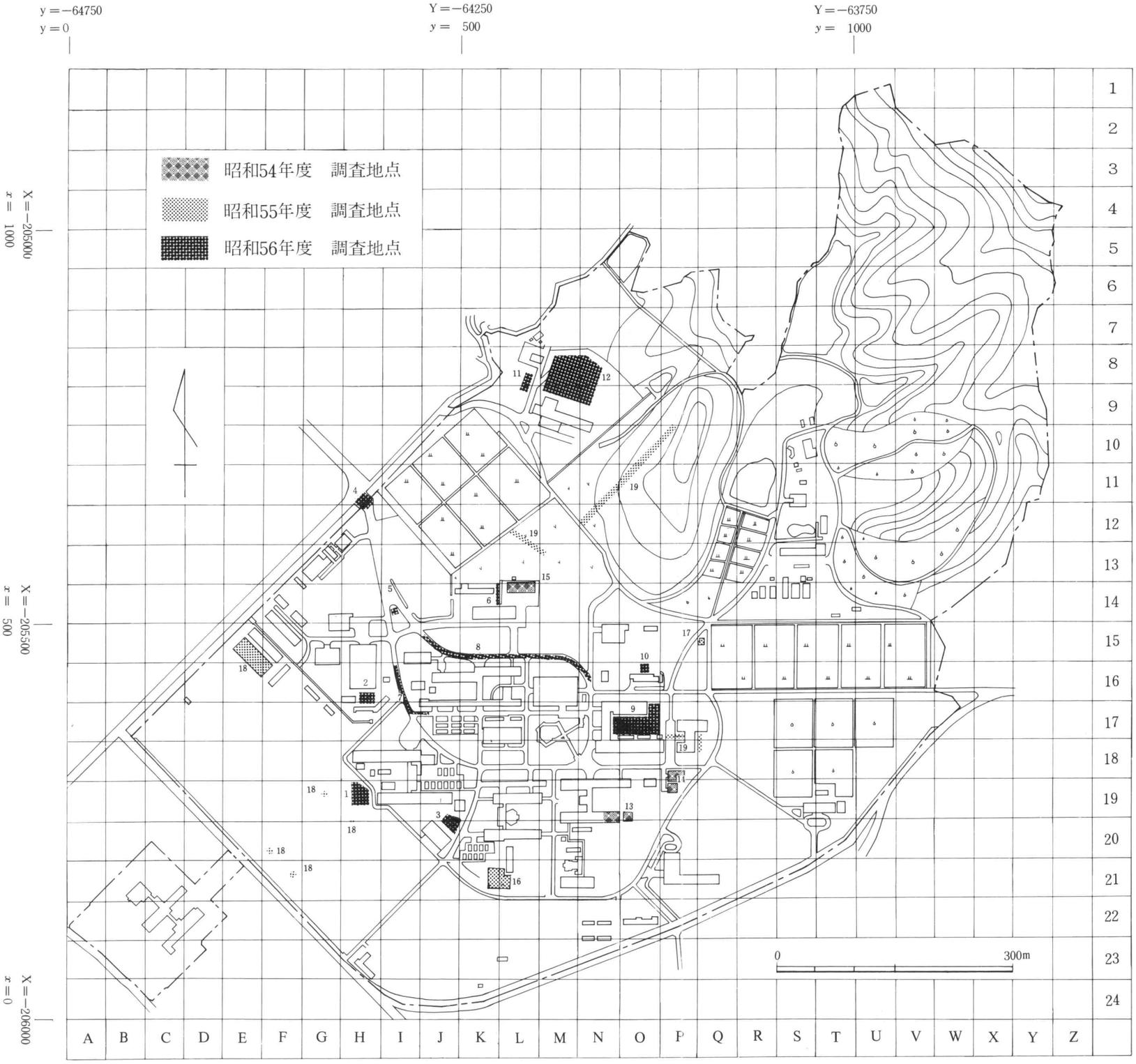
経済学部構内では校舎新営工事に伴い調査を実施した。調査区は大学キャンパスの南部に位置し、構内地区割のＫ－21、およびＬ－21区にあたる。現地表面および青灰色粘質土の地山は調査区南西部に向って高くなっており、標高20.20ｍ～21.30ｍ、地山面標高19.20～19.60ｍである。水田客土下は木葉、自然木を含み砂層および礫層となっており、激しい湧水が認められた。調査区内においては顕著な遺構、遺物は認められなかった。

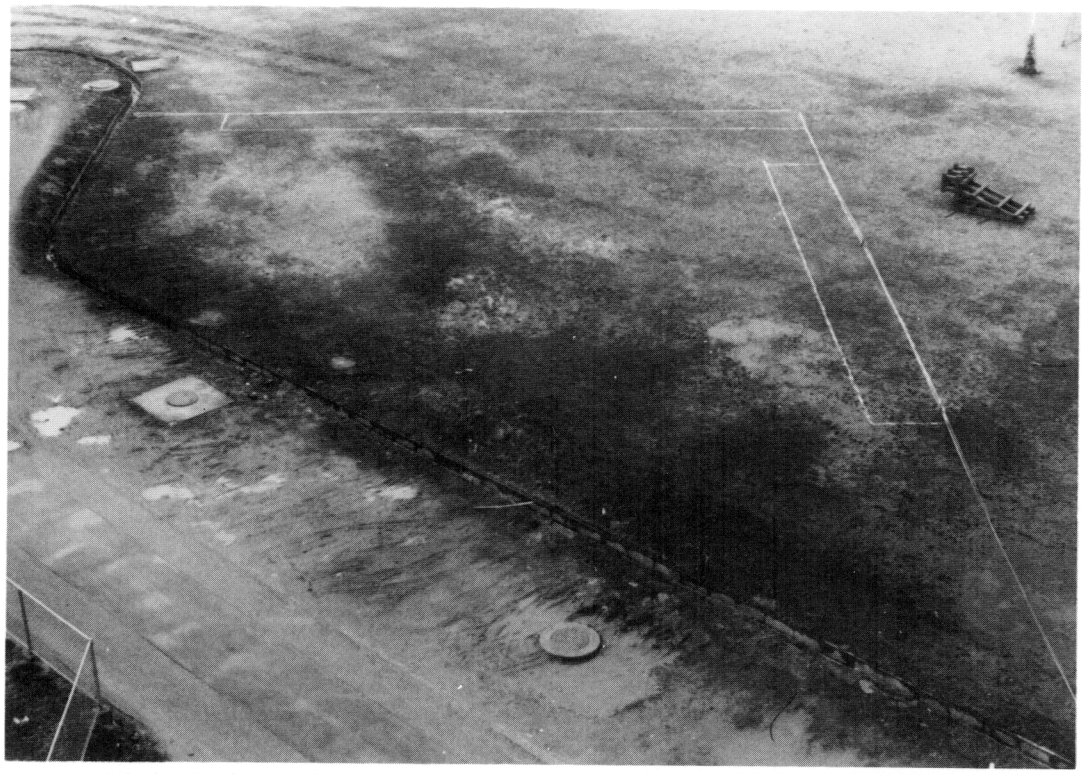
農学部構内では農業観測実験施設新営に伴い約50㎡について調査を実施した。調査区は大学キャンパスのほぼ中央部に位置し構内地区割のＱ－15区にあたる。現地表面の標高は約23.30ｍである。一般的に現地表下に堆積する厚さ約60～70㎝の構内造成時の置土直下が黄褐色粘質土の地山となっているが、調査区南西部においては置土直下に上位から灰褐色粘質土、暗褐色粘質土の堆積がみられ地山へと続く。地山面の標高は南西部がやや低く約21.50ｍ、他は約21.60～70ｍである。検出した遺構は溝３条、土壙４基であるが各遺構からの遺物の出土量は極めて微量であった。溝は弥生時代のもの、古墳時代後期のもの、時期不明のもの各１条である。土壙はいずれも古墳時代後期を上限とするものかと思われる。

弥生時代に属すると思われる溝は東西方向に存在し、幅約40～60㎝、深さ約10～18㎝の規模をもち南部が北部にくらべやや深まっている。土壙には楕円形、五角形等の平面形態がみられる。規模は長軸90～100㎝、短軸30～45㎝、深さは約40㎝前後のもので北部に偏在する。古墳時代後期に属すると思われる溝は弥生時代のものと思われる溝の南に位置し平行して走る。断面形態はおおむね「Ｕ」字形を呈し溝幅は東部、西部で約50㎝、中央部で約100㎝がある。また溝深は東部で約５㎝を測り西部に向うにつれて序々に深くなり最大溝深約20㎝である。遺物は周辺からの流れ込みと思われるものでそのほとんどが溝底より上位の位置から出土した。

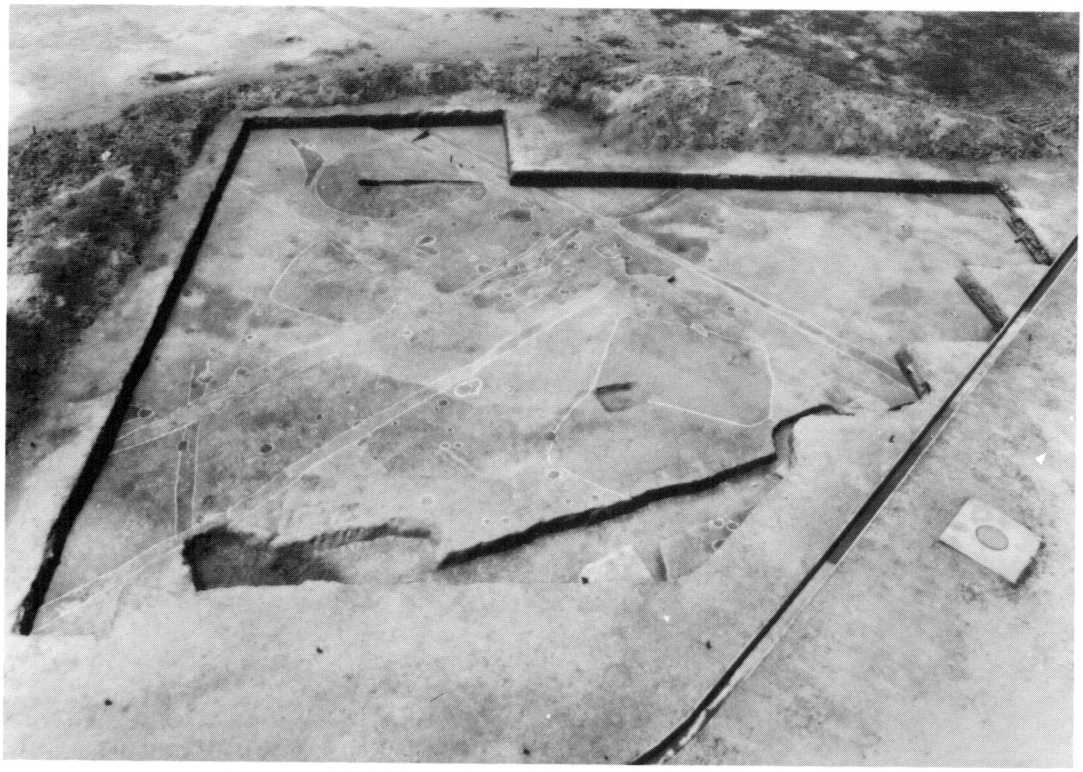
PLATES

山口大学構内地区割および調査区位置図

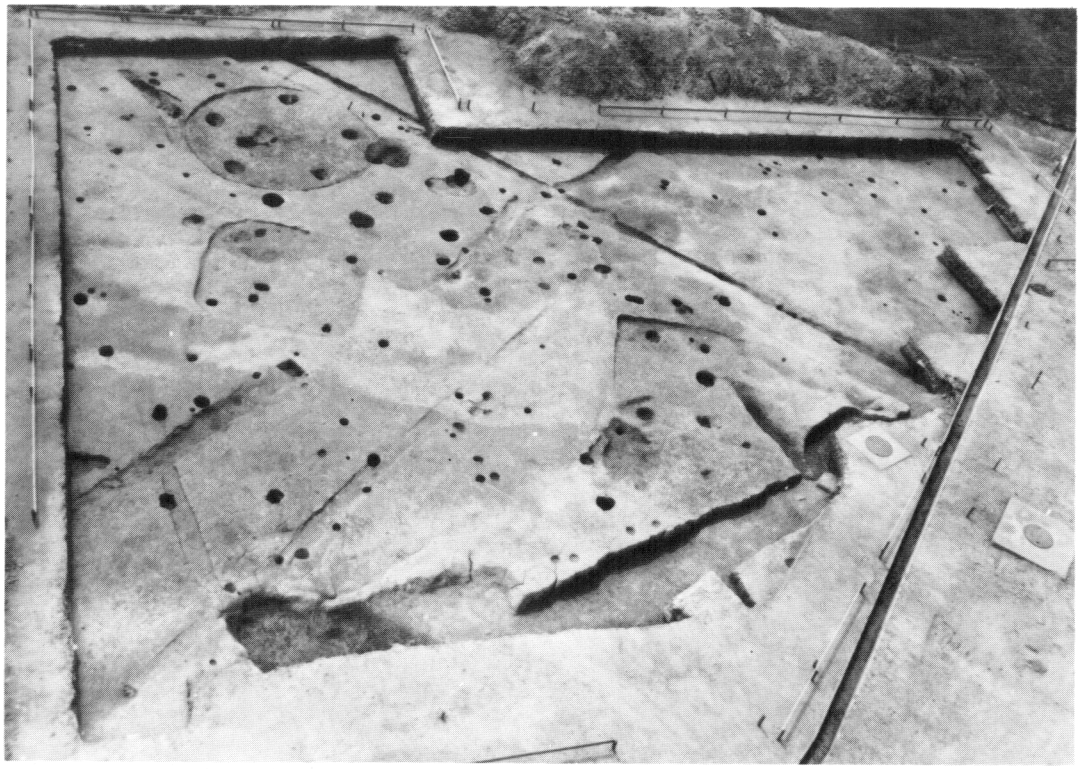




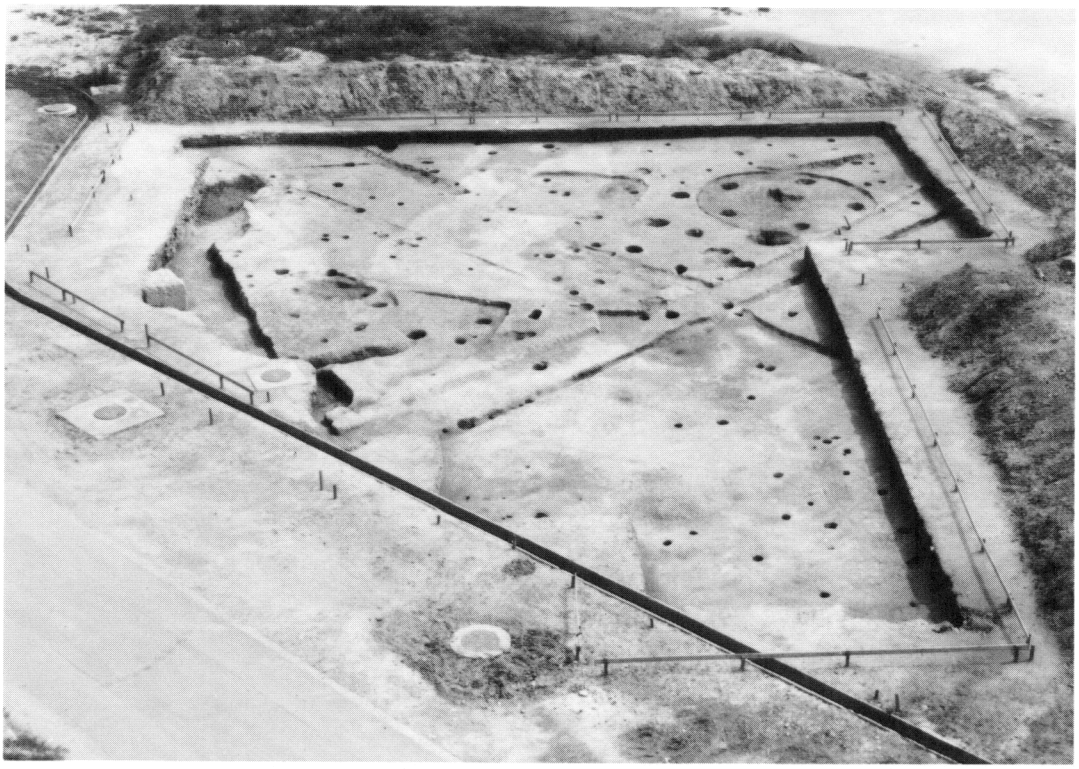
(1) 調査前全景（北から）



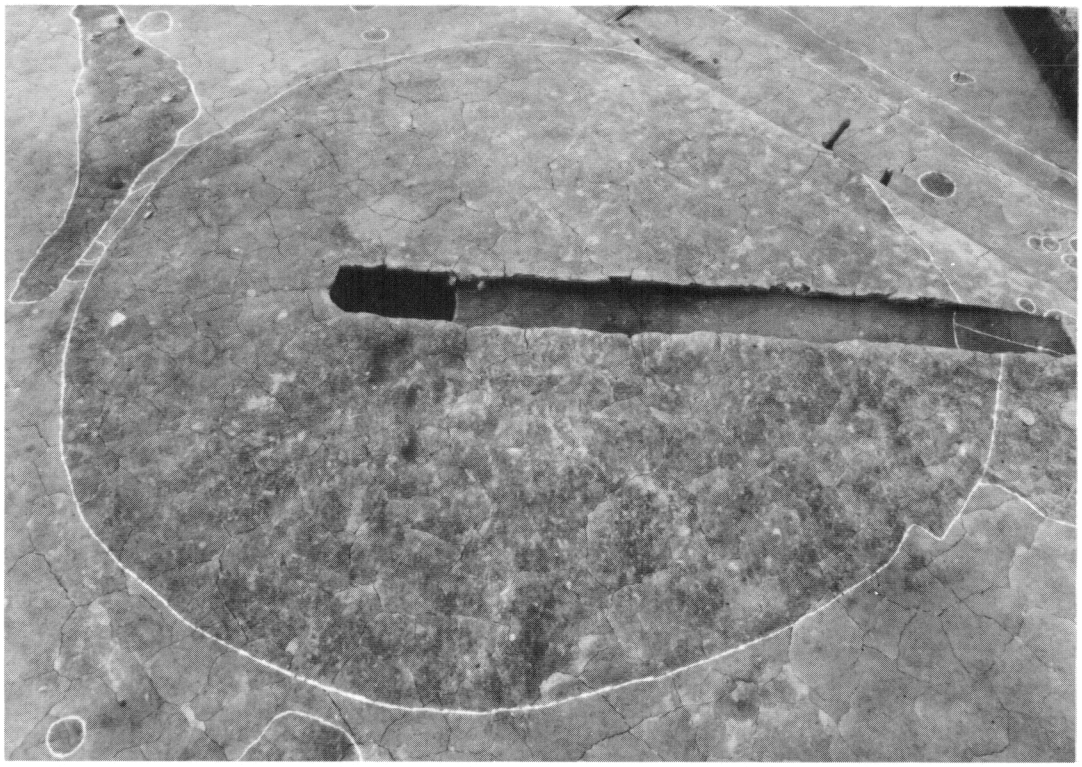
(2) 調査区遺構検出状況（東から）



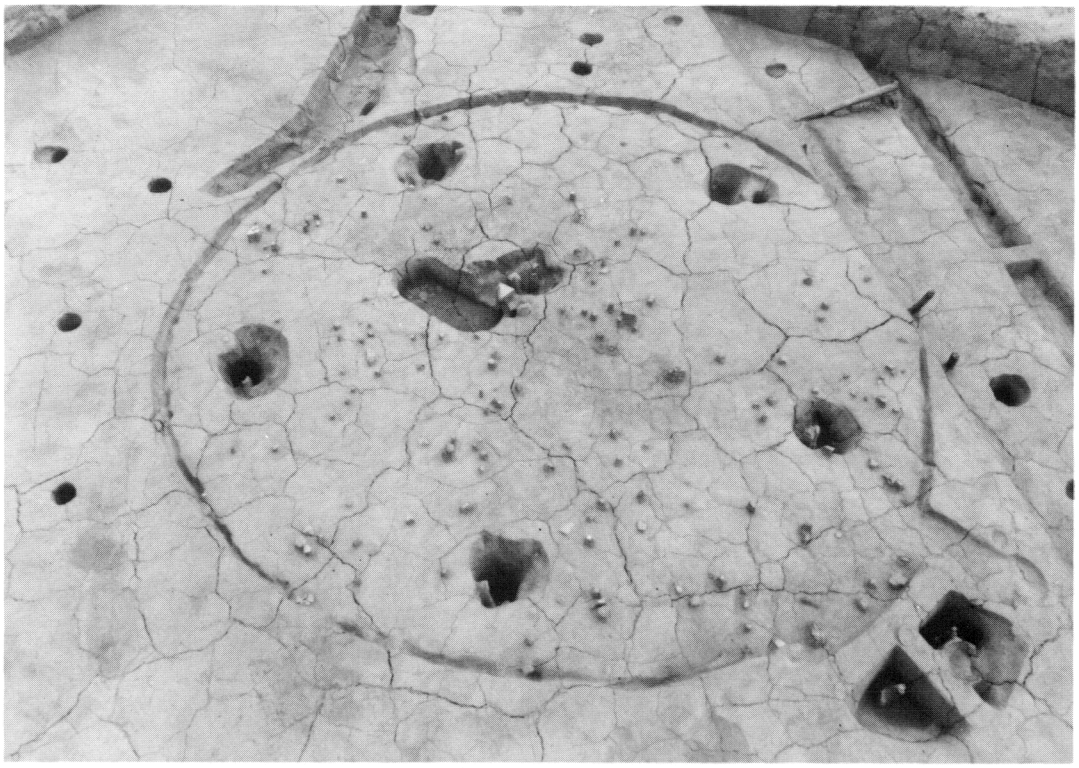
(1) 調査区全景（東から）



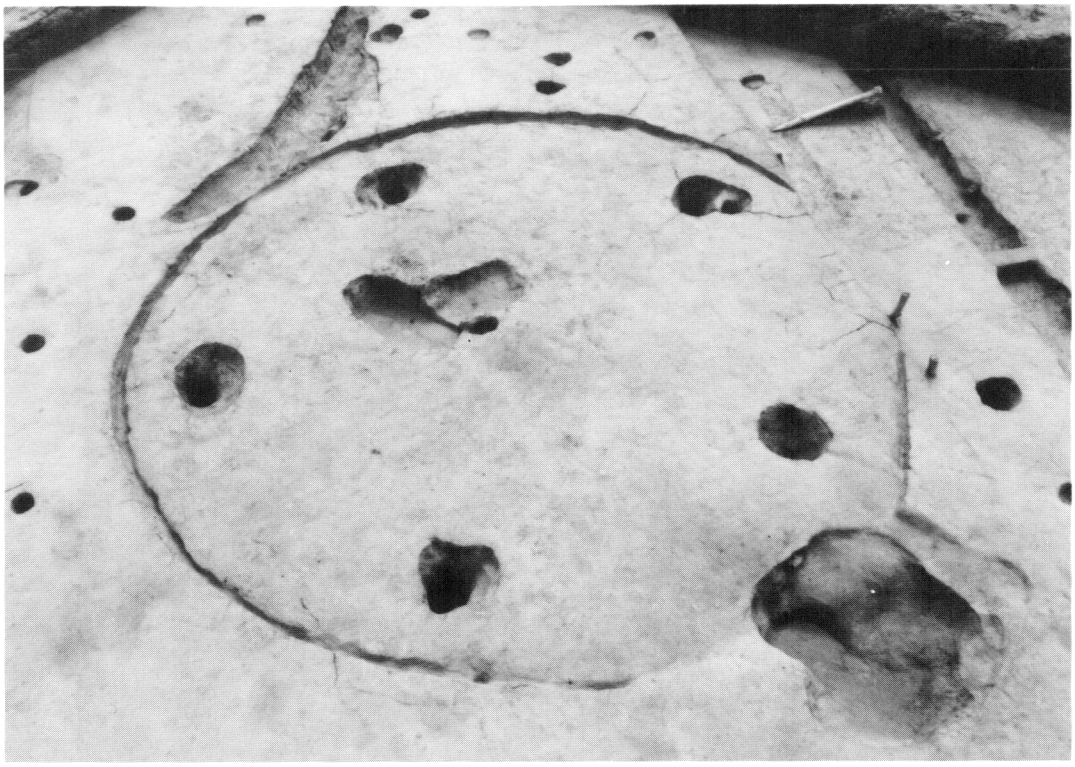
(2) 調査区全景（北から）



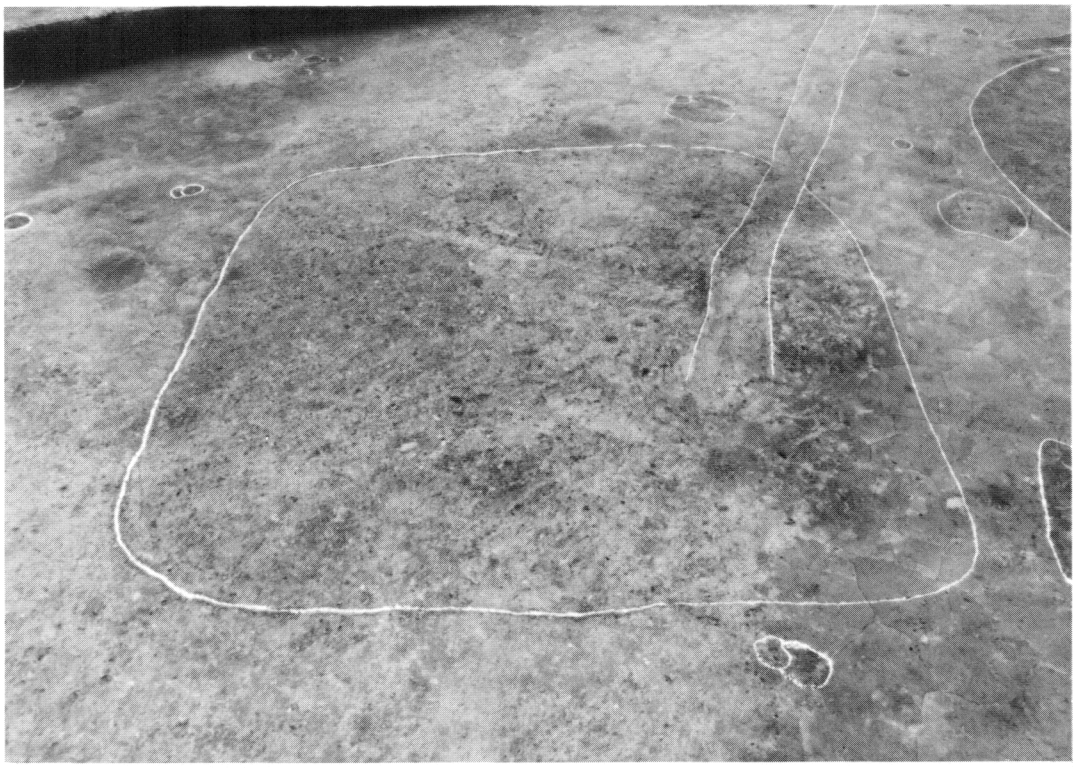
(1)　1号住居跡検出状況（東から）



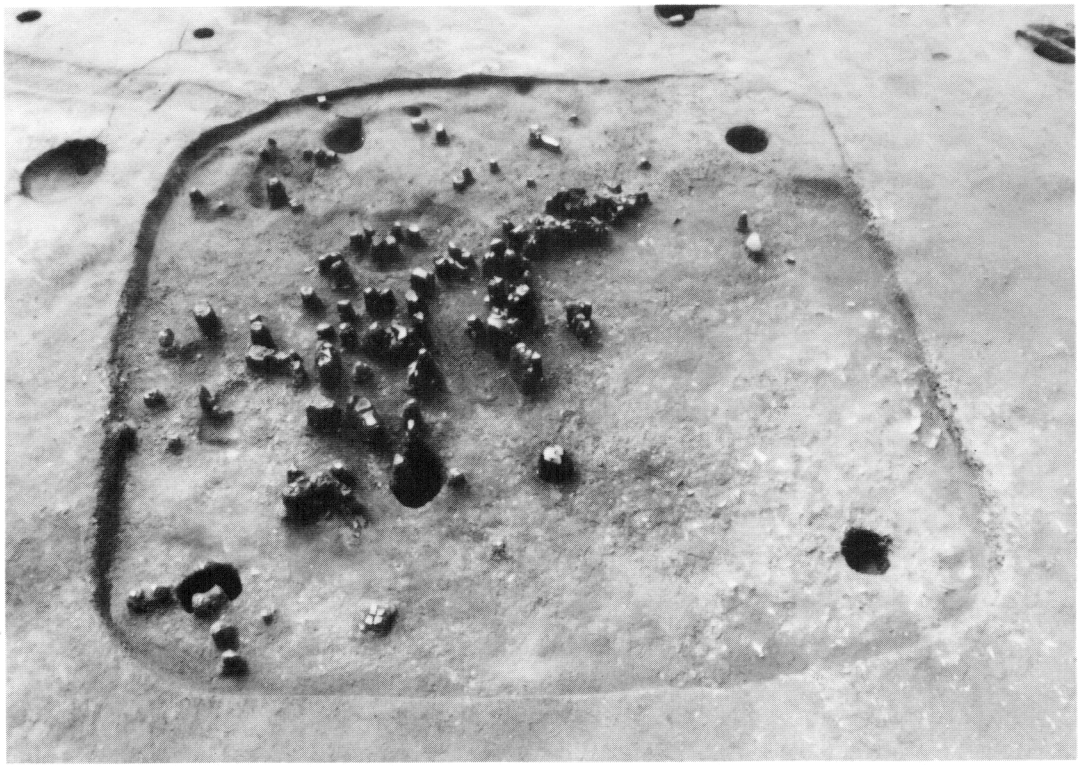
(2)　1号住居跡遺物出土状況（東から）



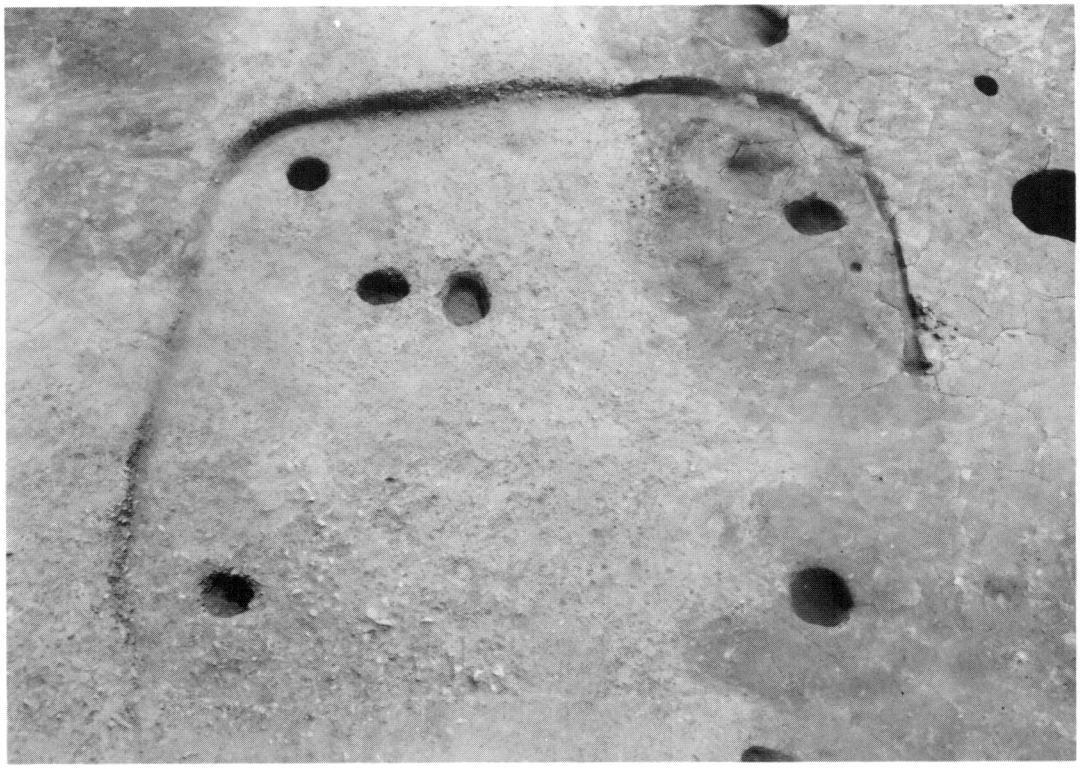
(1)　1号住居跡（東から）



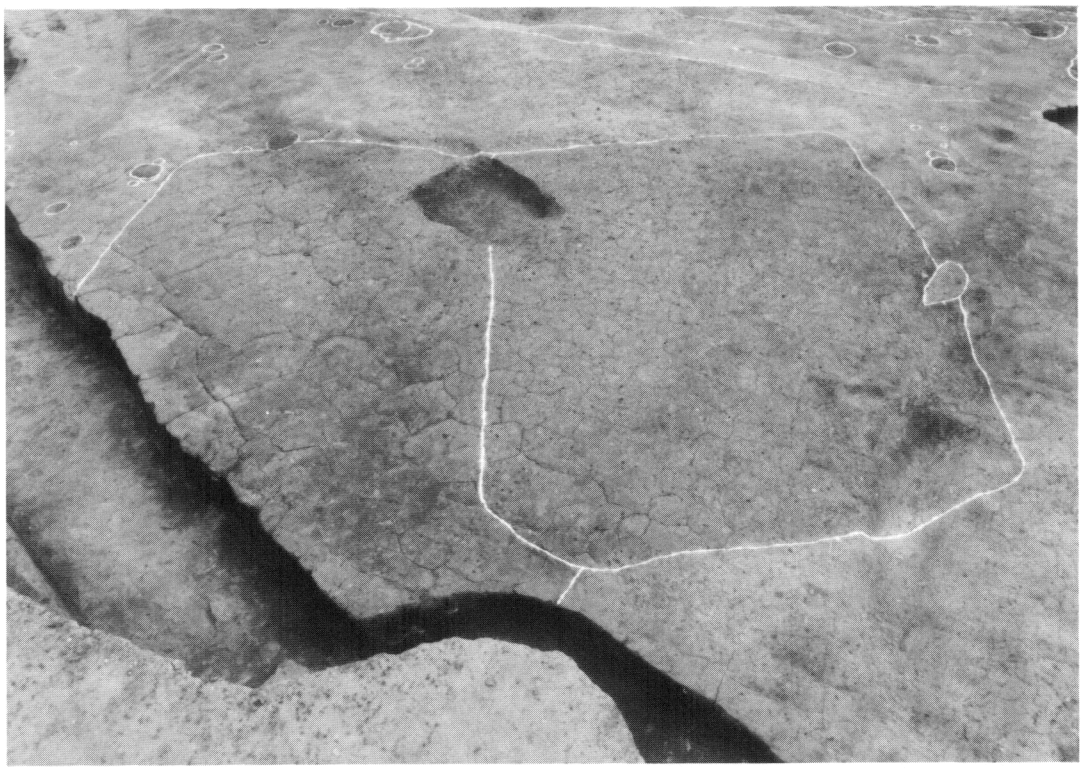
(2)　2号住居跡検出状況（北東から）



(1)　2号住居跡遺物出土状況（東から）



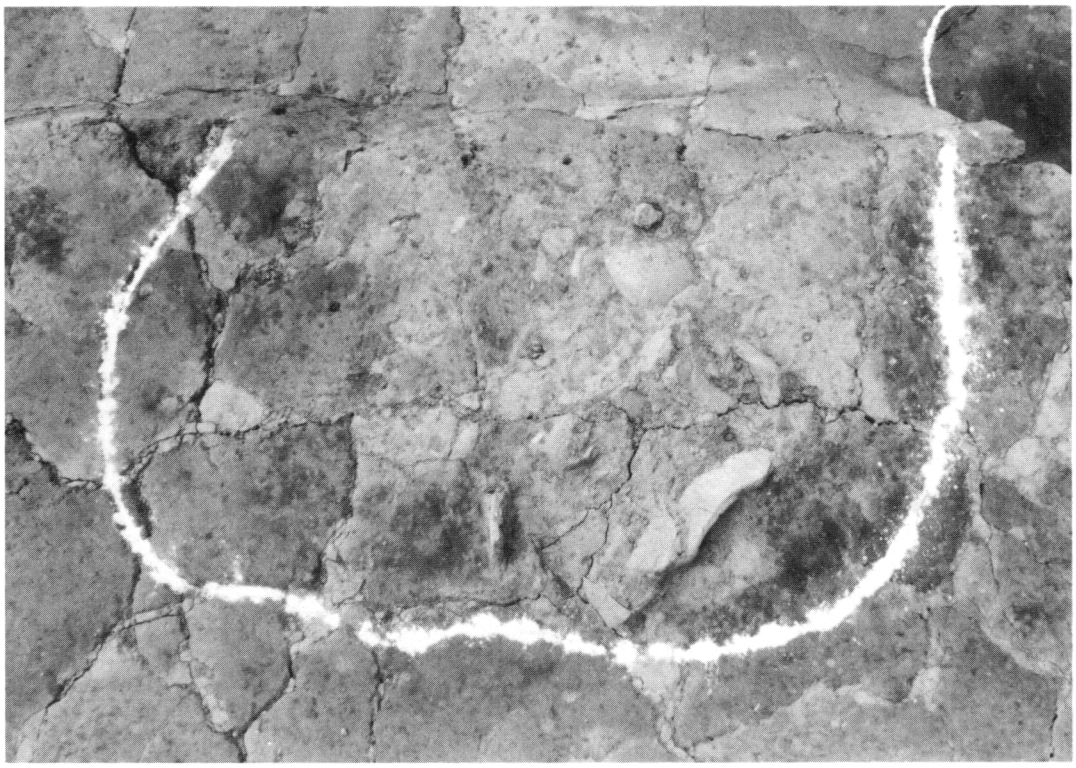
(2)　2号住居跡（北から）



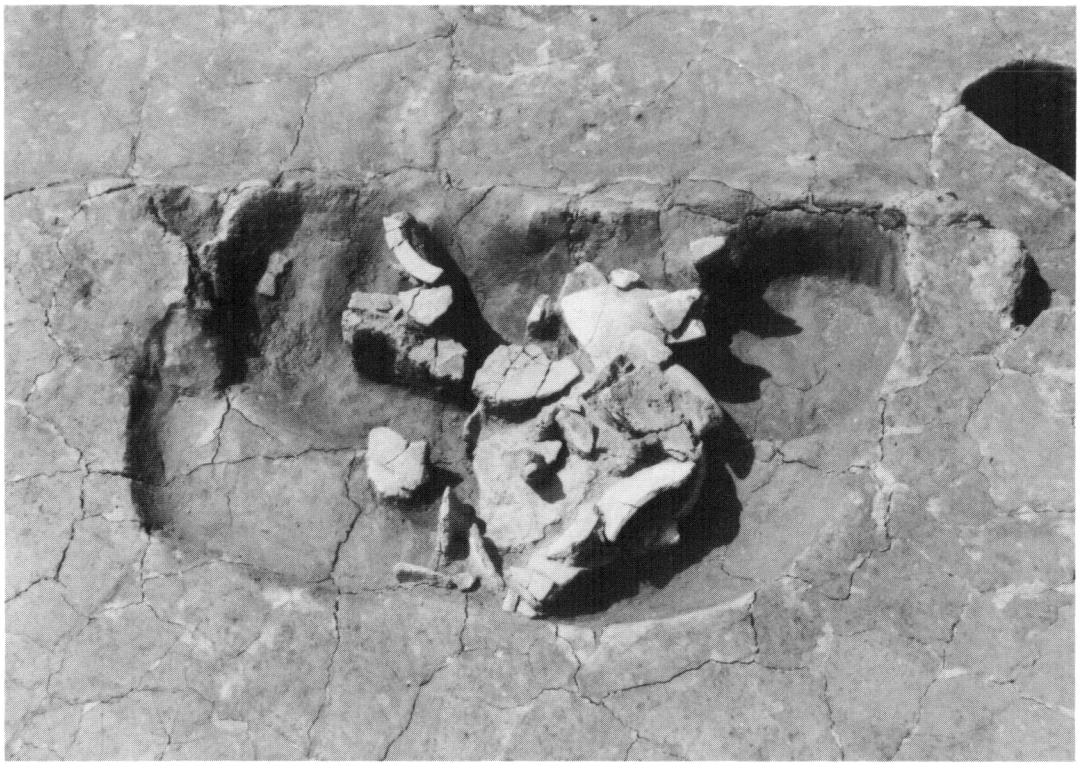
(1)　3・4号住居跡検出状況（北から）

(2)　3・4号住居跡遺物出土状況（南から）

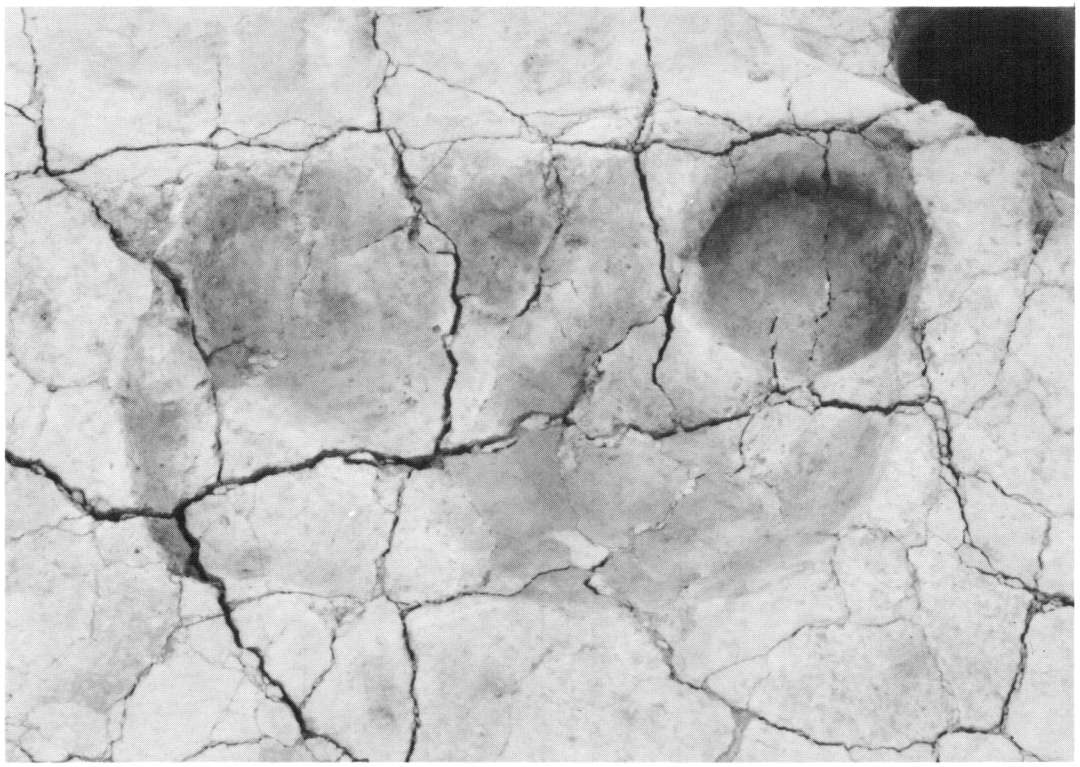
(1)　3・4号住居跡（南から）



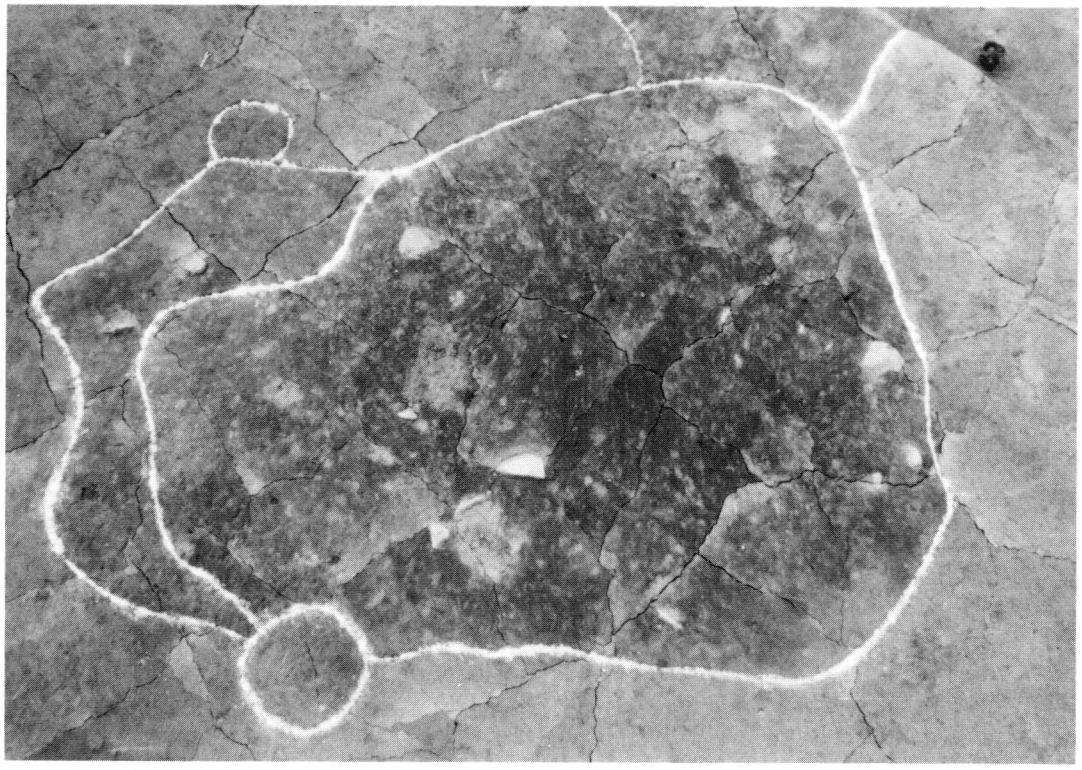
(2)　1号土壙検出状況（南から）



(1)　1号土壙遺物出土状況（南から）

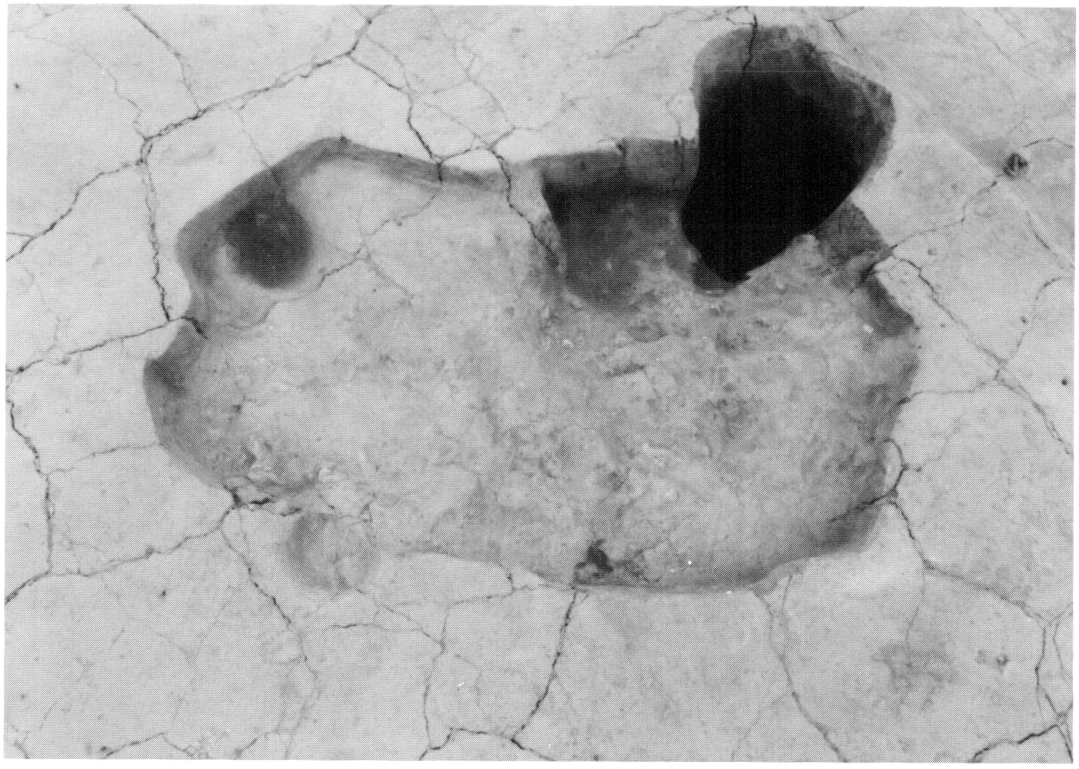


(2)　1号土壙（南から）

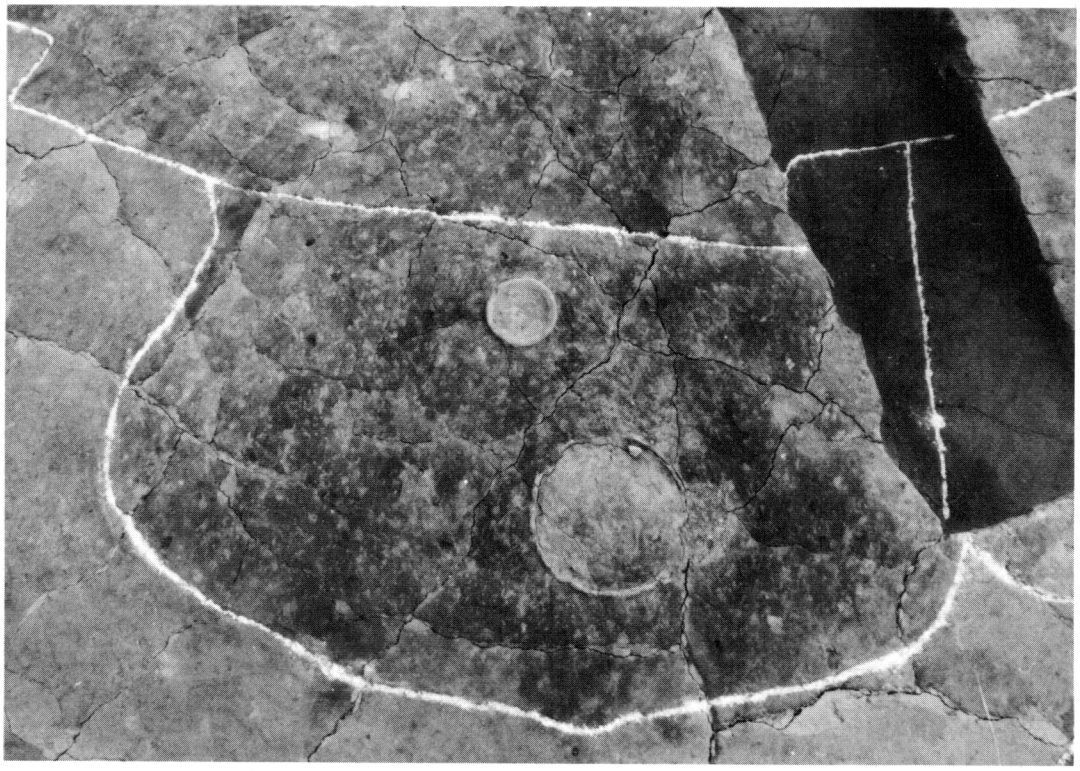


(1)　2号土壙検出状況（東から）

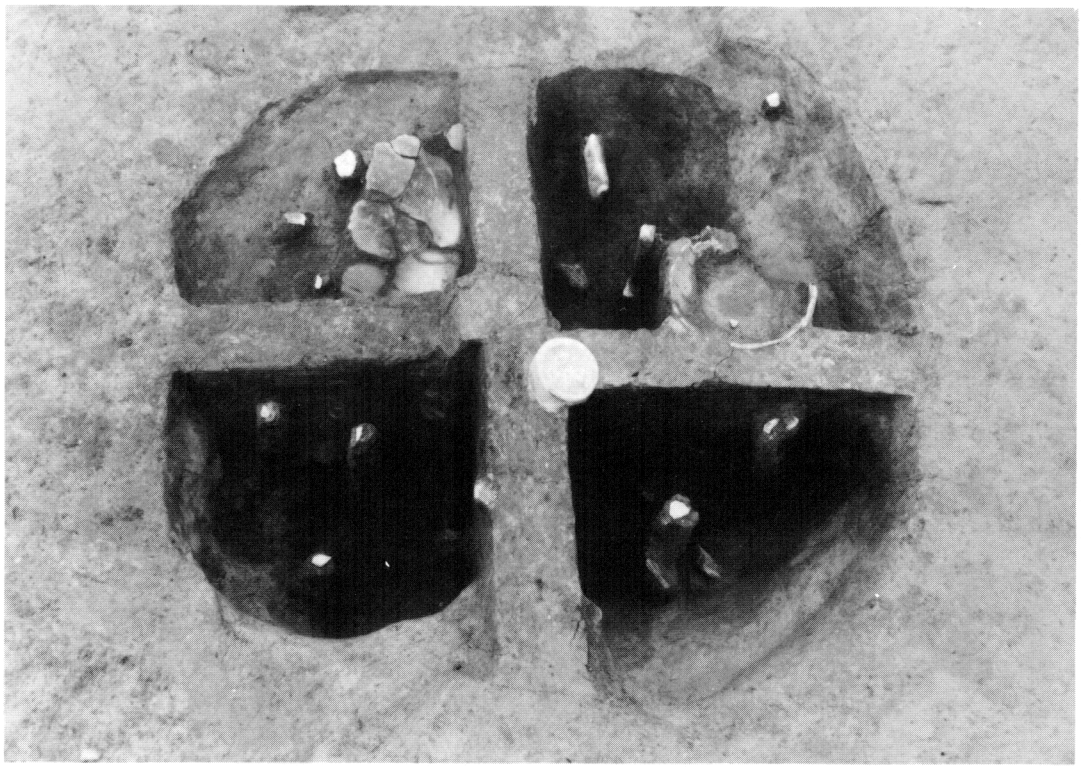
(2)　2号土壙遺物出土状況（東から）



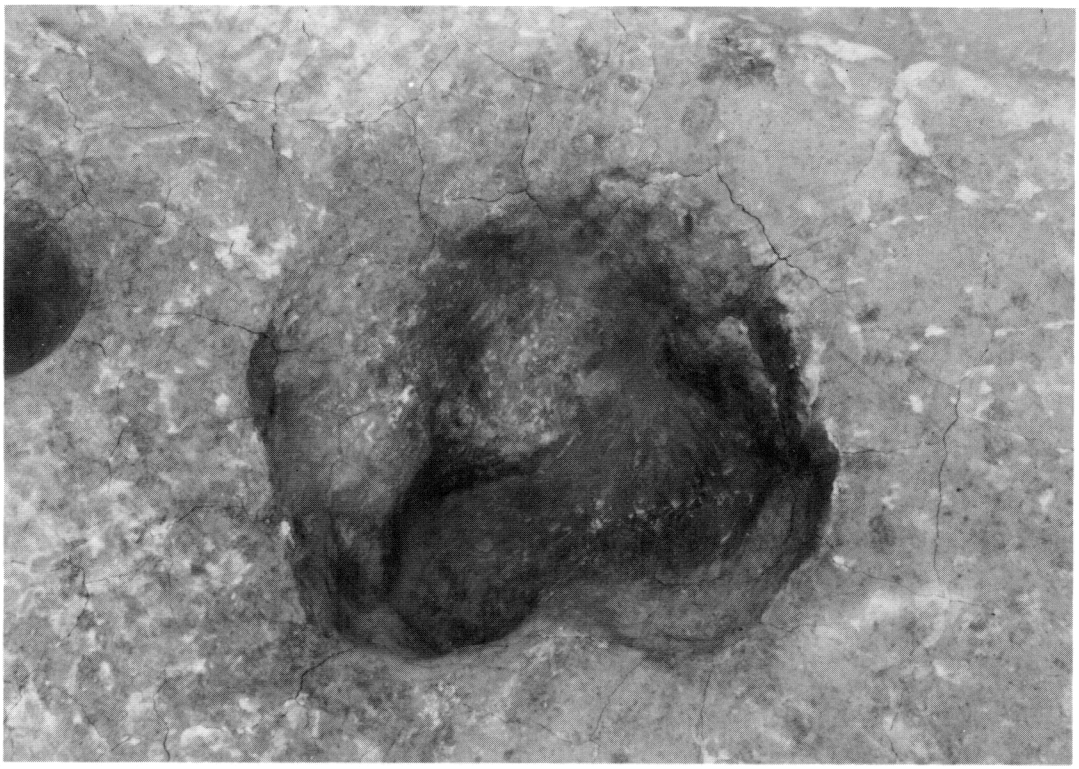
(1)　2号土壙（東から）



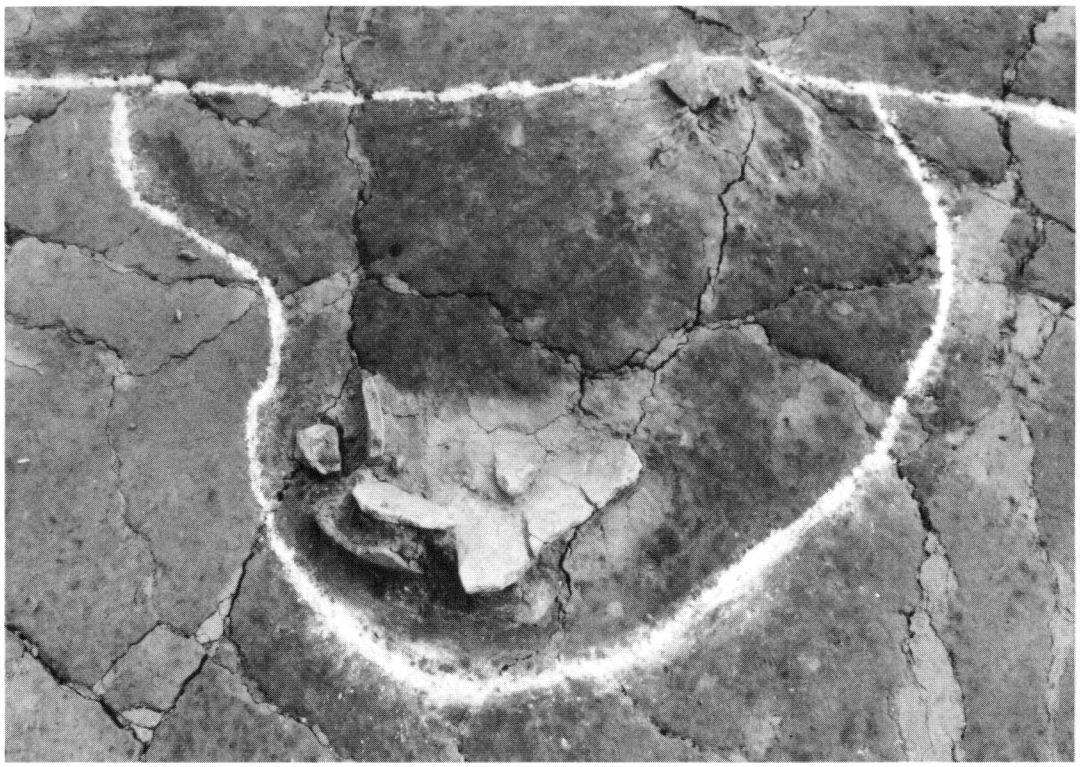
(2)　3号土壙検出状況（北東から）



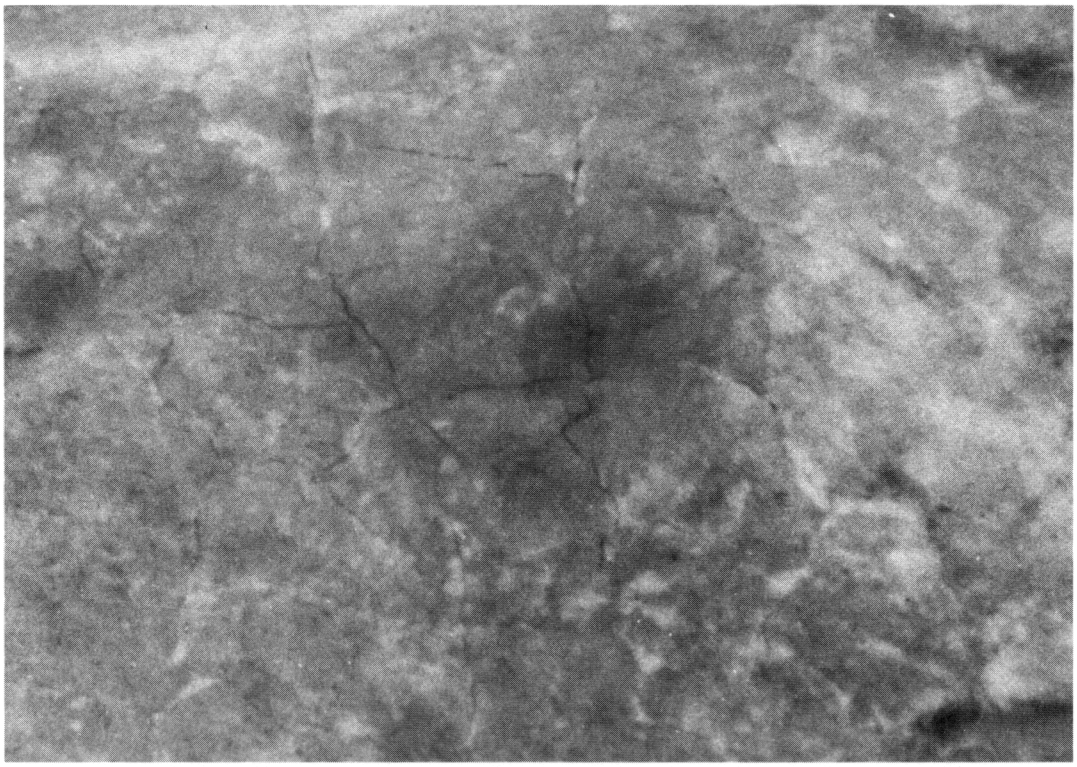
(1)　3号土壙遺物出土状況（東から）



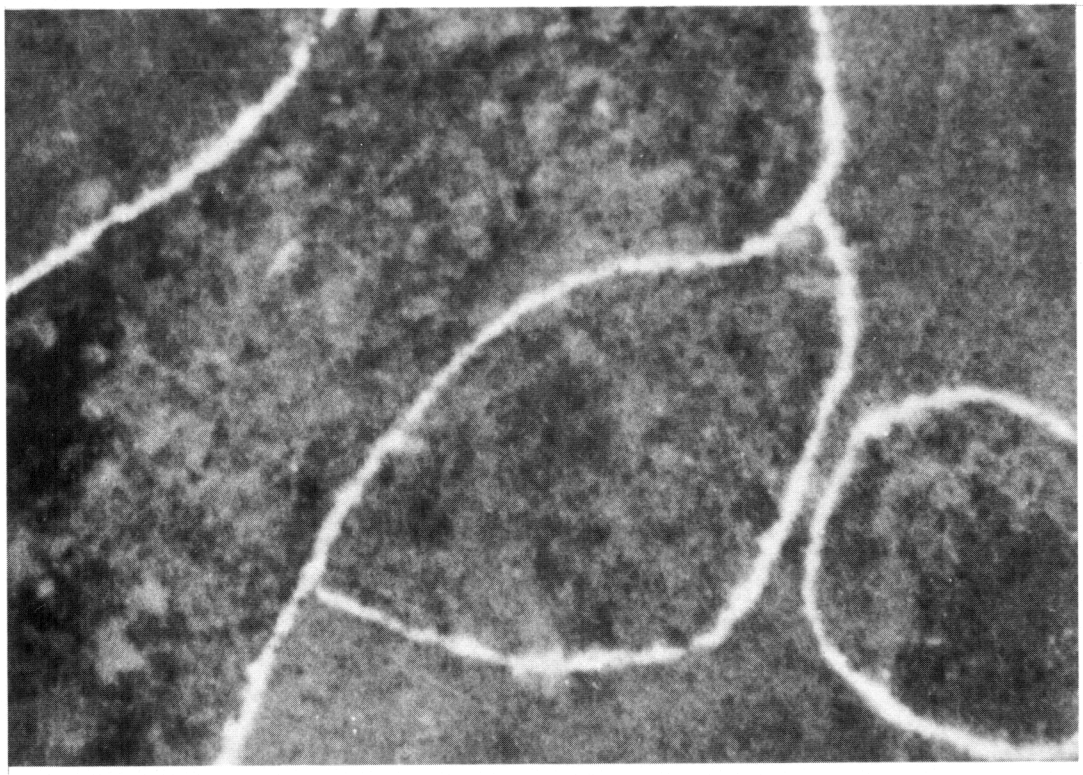
(2)　3号土壙（南から）



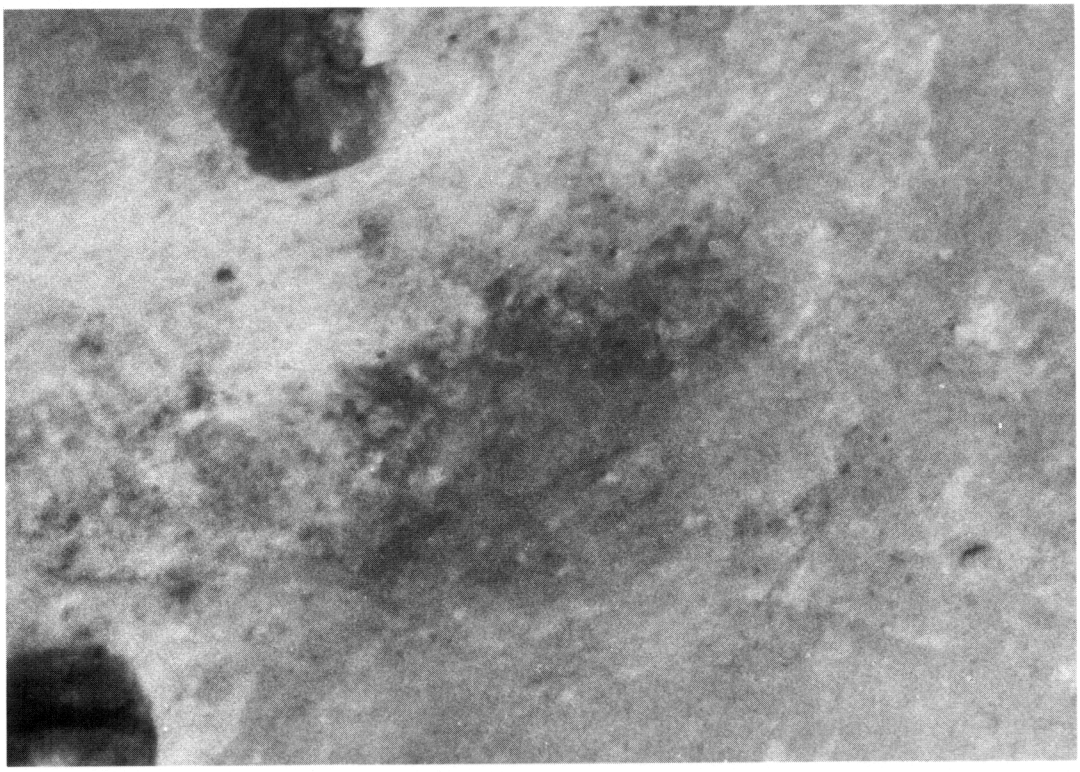
(1)　4 号土壙検出状況（北東から）



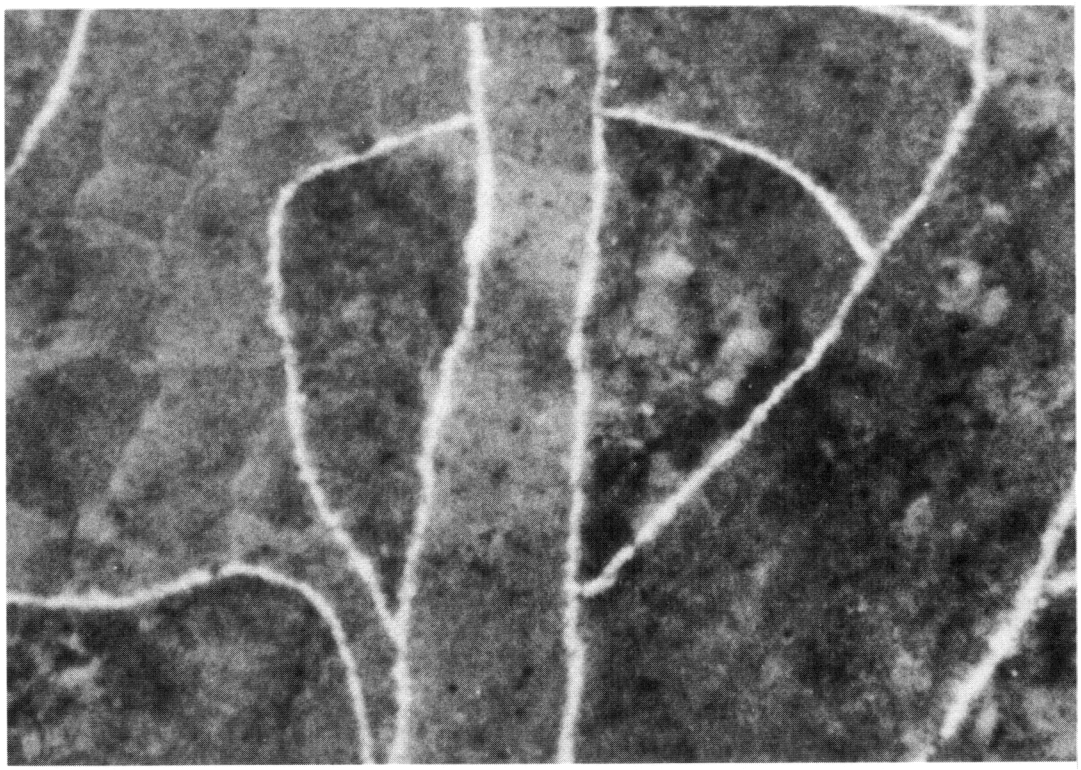
(2)　4 号土壙（北東から）



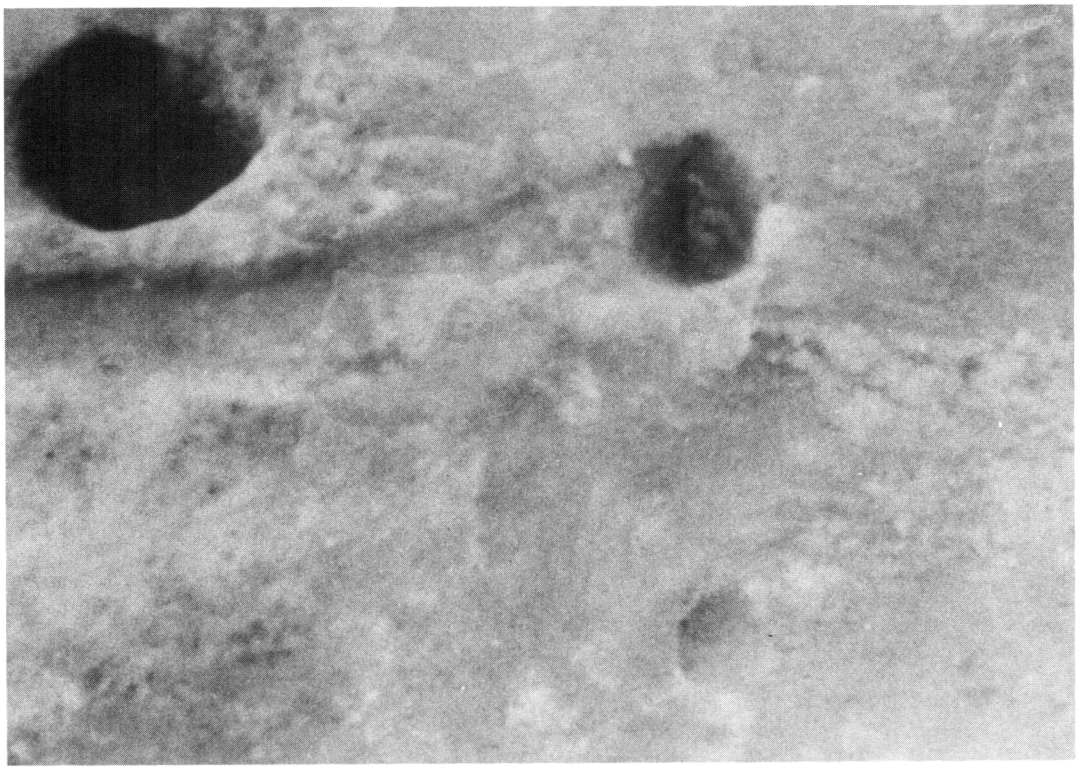
(1)　5号土壙検出状況（南東から）



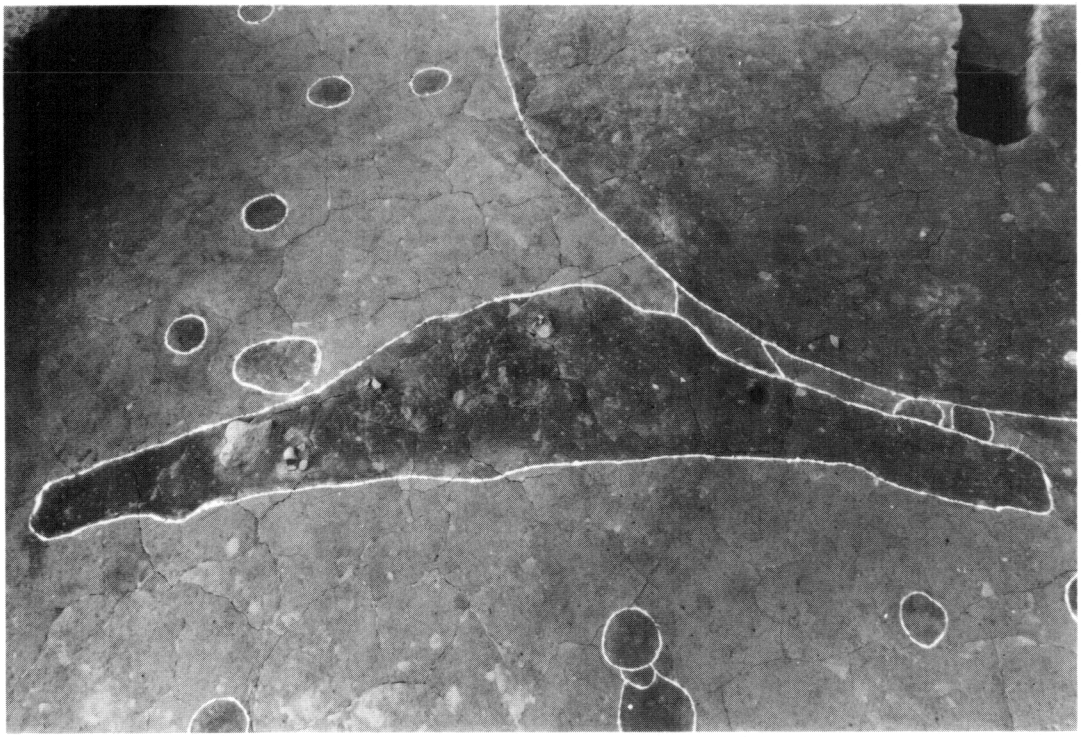
(2)　5号土壙（北東から）



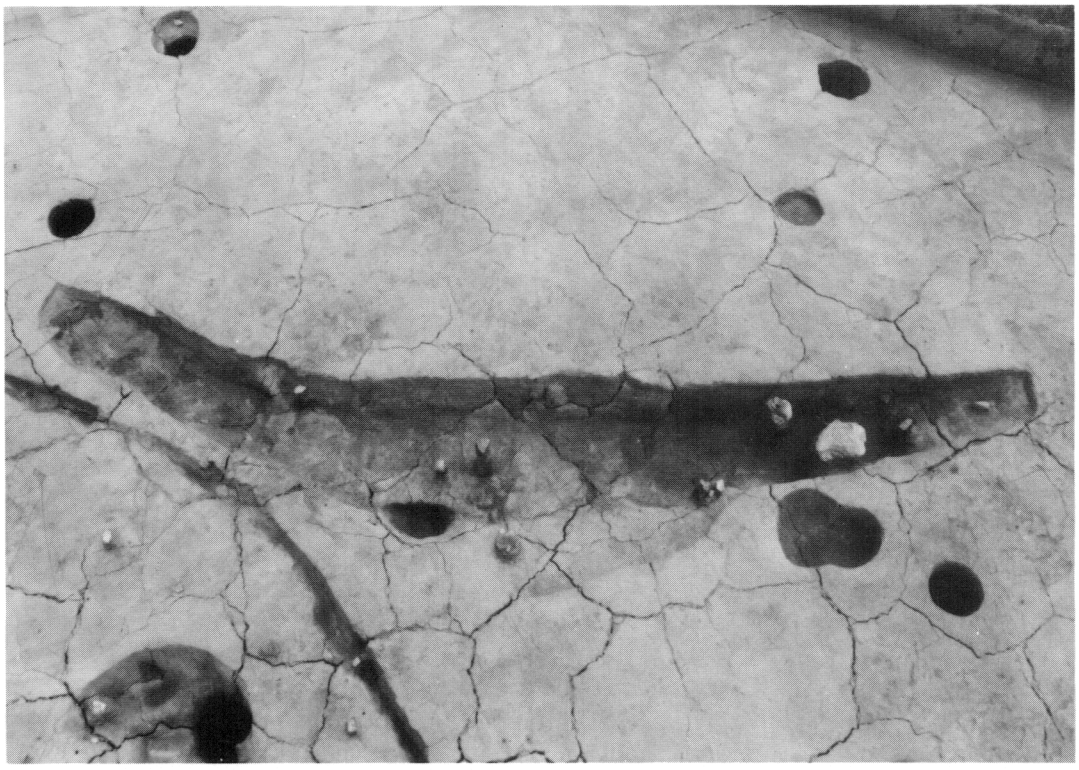
(1)　6号土壙検出状況（南東から）



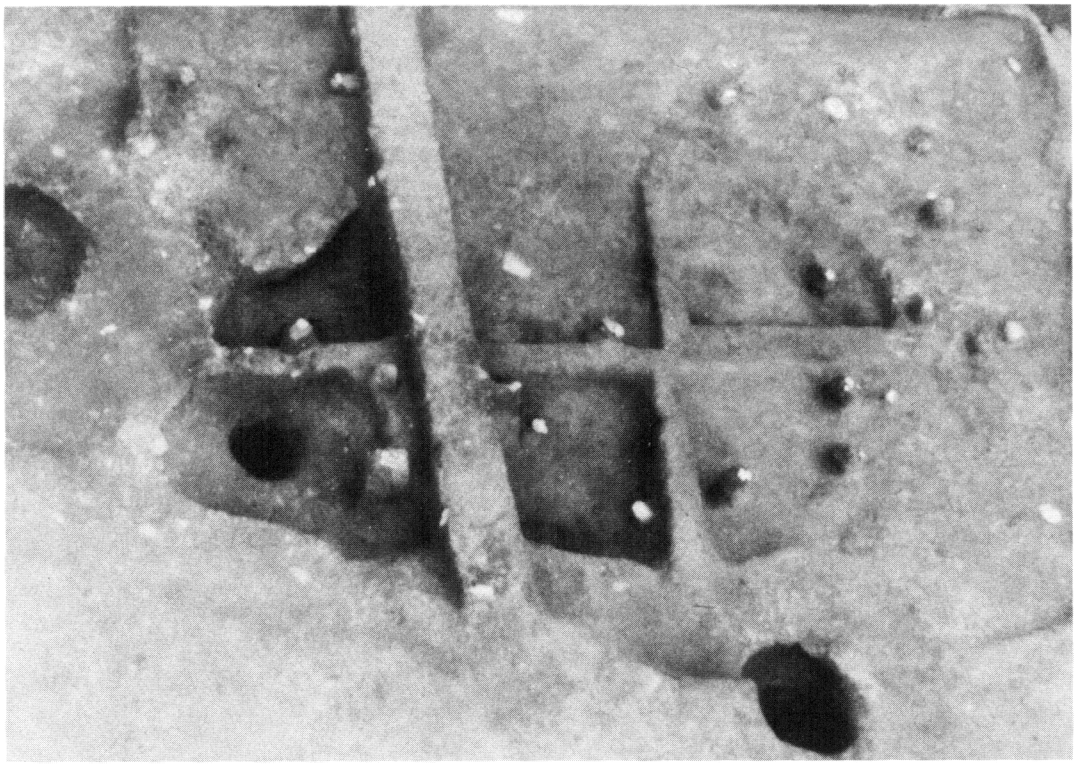
(2)　6号土壙（北東から）



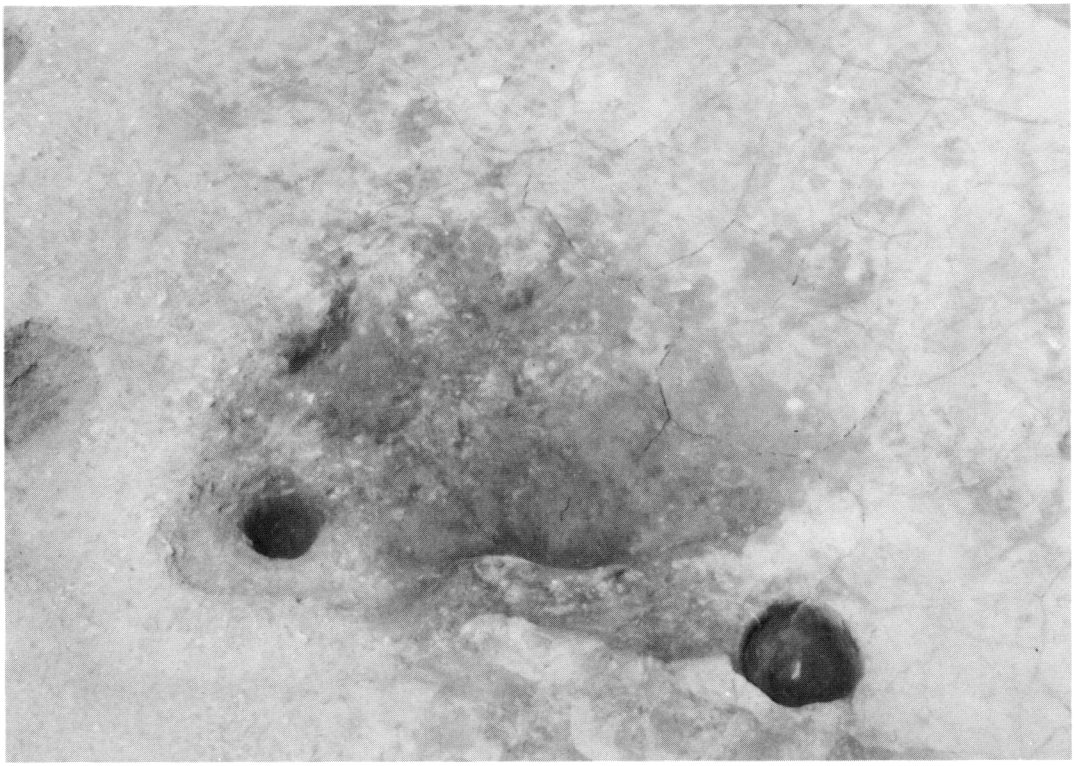
(1)　7号土壙検出状況（南から）



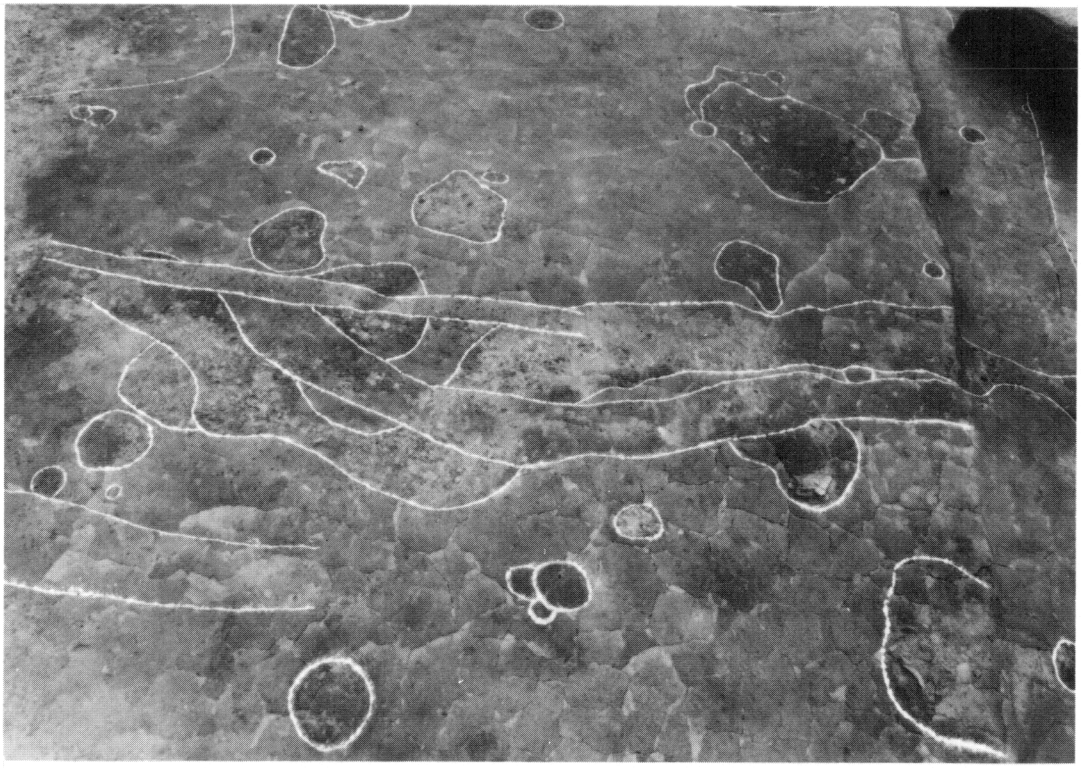
(2)　7号土壙（北から）



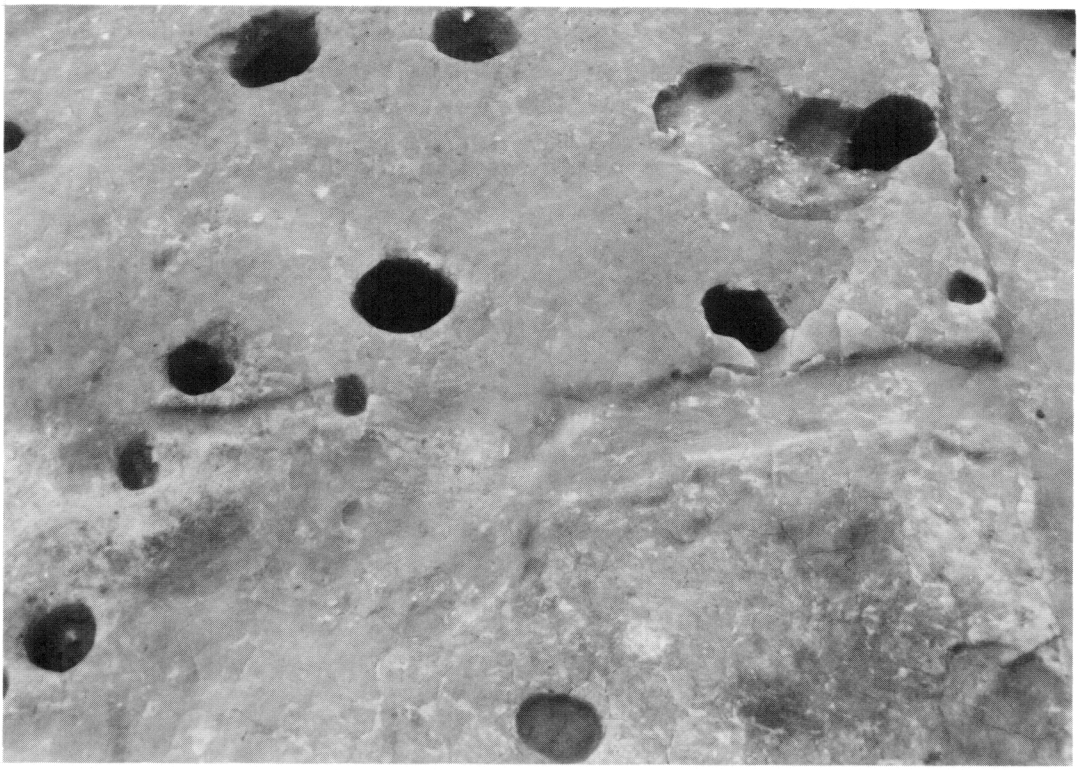
(1)　8号土壙遺物出土状況（南から）



(2)　8号土壙（南から）



(1) 溝２・６・７・８検出状況（北東から）



(2) 溝２・６・７・８（北東から）

(1)　溝５遺物出土状況（北西から）

(2)　溝５（南から）

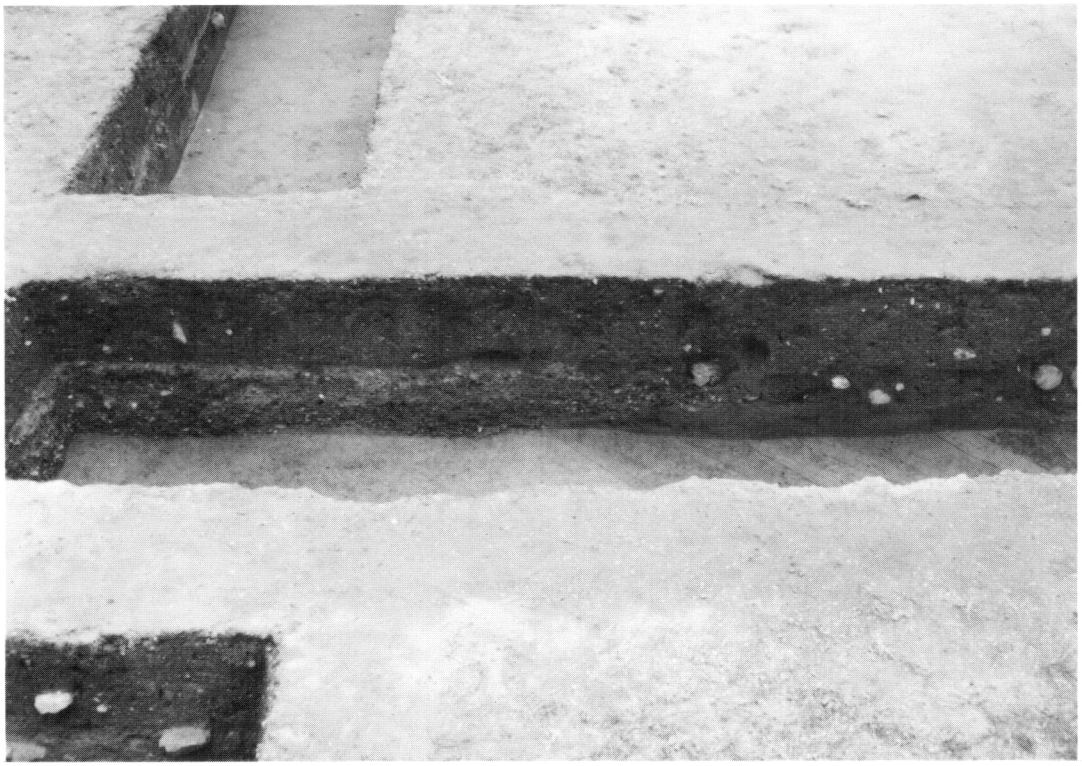
(1)　調査前全景（東から）

(2)　ＴＲ２西壁土層断面（東から）

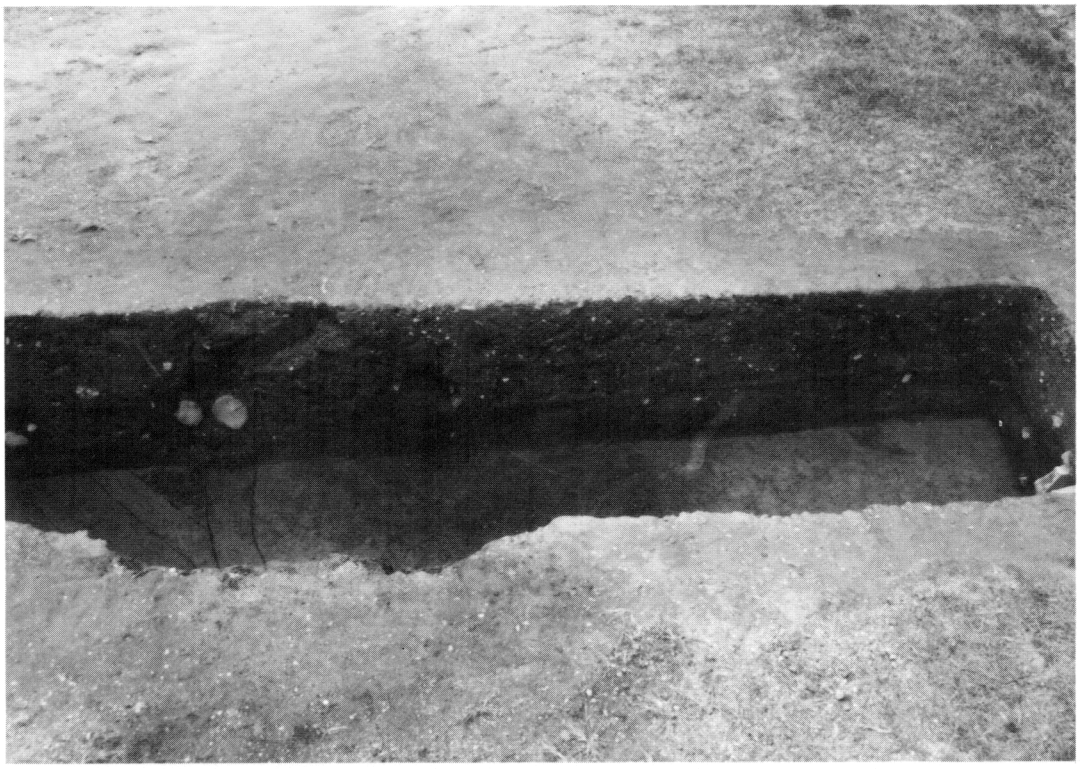
教育学部構内H－16区

(1)　TR2遺構検出状況（西から）

(2)　TR2溝（東から）



(1)　ＴＲ４西壁土層断面南半部（東から）

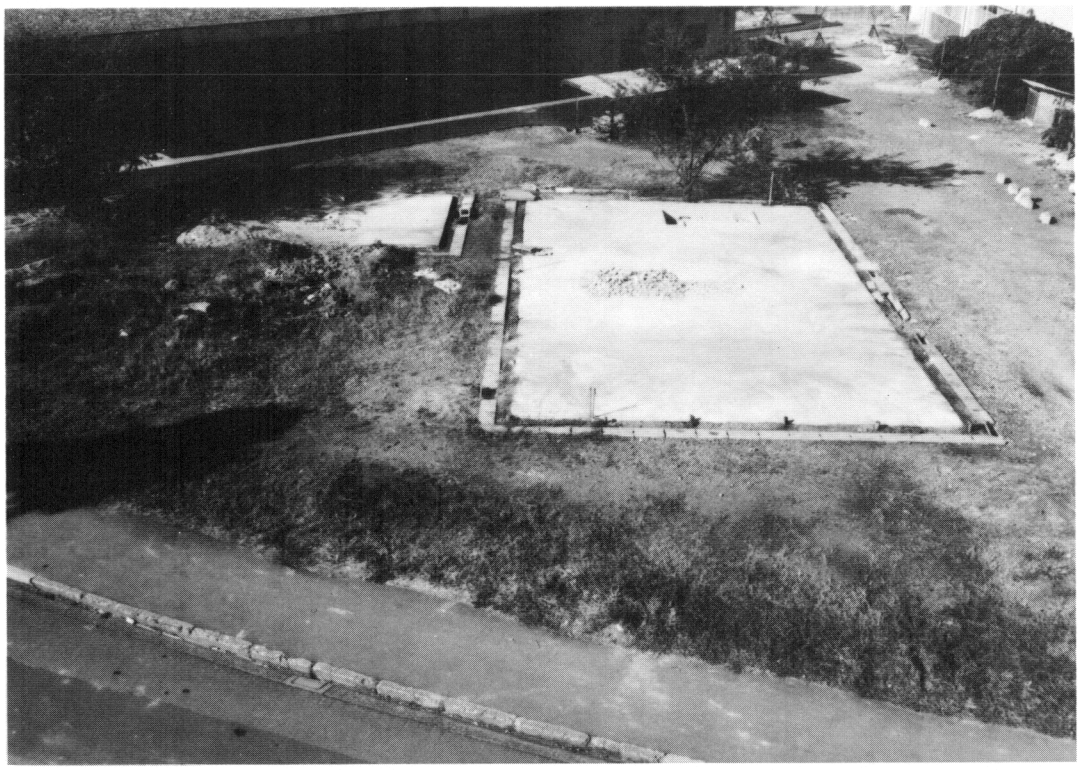


(2)　ＴＲ４西壁土層断面北半部（東から）

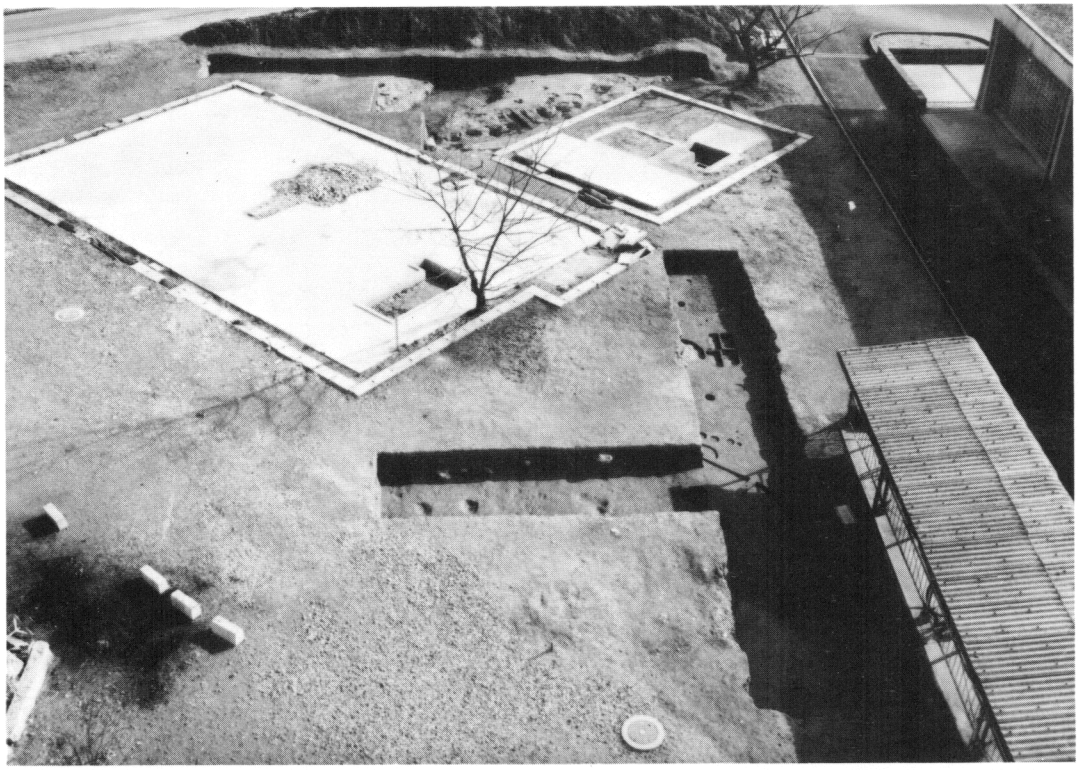
教育学部構内H—16区

(1) TR4遺構検出状況（北から）

(2) TR4溝および土壙（北から）



(1) 調査前全景（南東から）



(2) 調査区全景（北から）

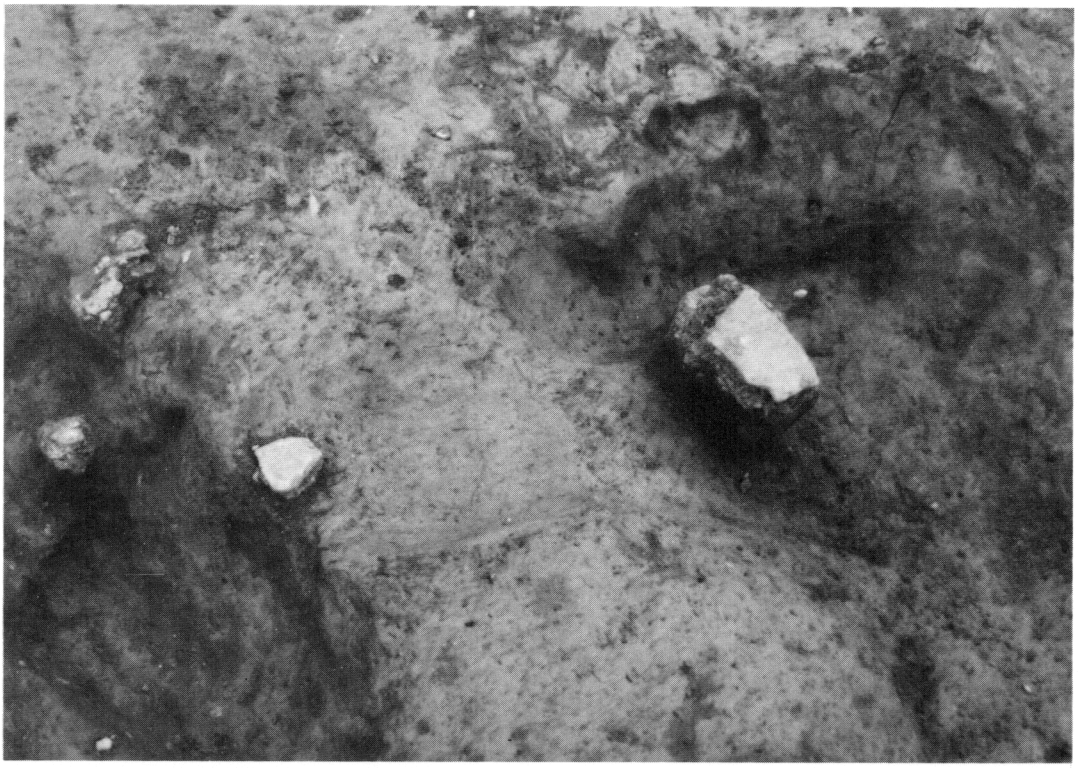
(1)　A地点遺構検出状況（北東から）

(2)　A地点全景（北東から）

(1)　A地点溝1・2検出状況（北から）

(2)　A地点溝1・2（北から）

(1)　A地点溝3・4検出状況（東から）



(2)　A地点溝3遺物出土状況（西から）

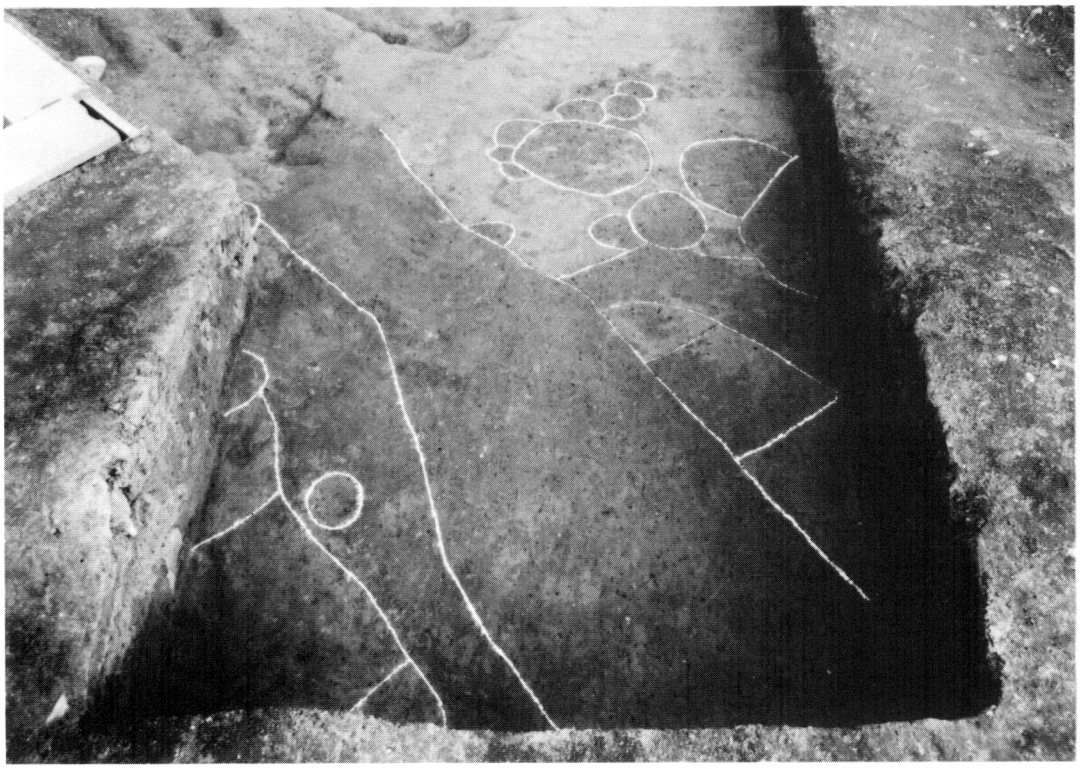
教育学部構内J—19・20区

(1)　A地点溝3（東から）

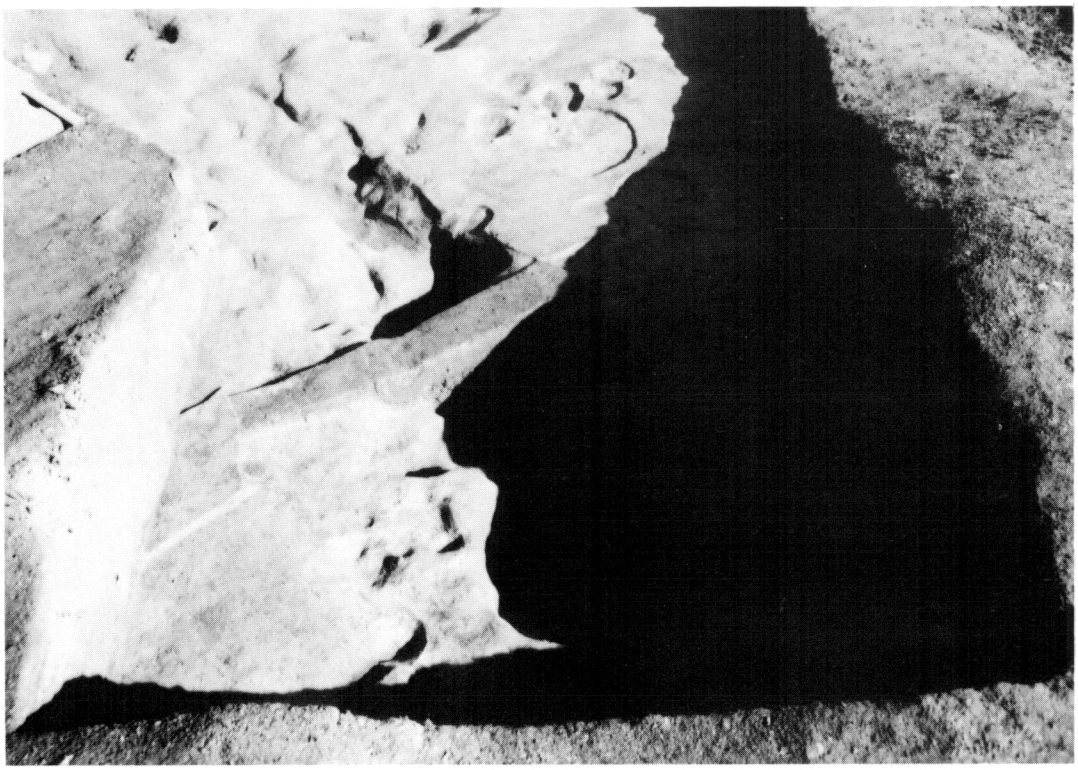
(2)　A地点溝3・4（東から）

(1)　A地点溝3・4埋土土層断面（東から）

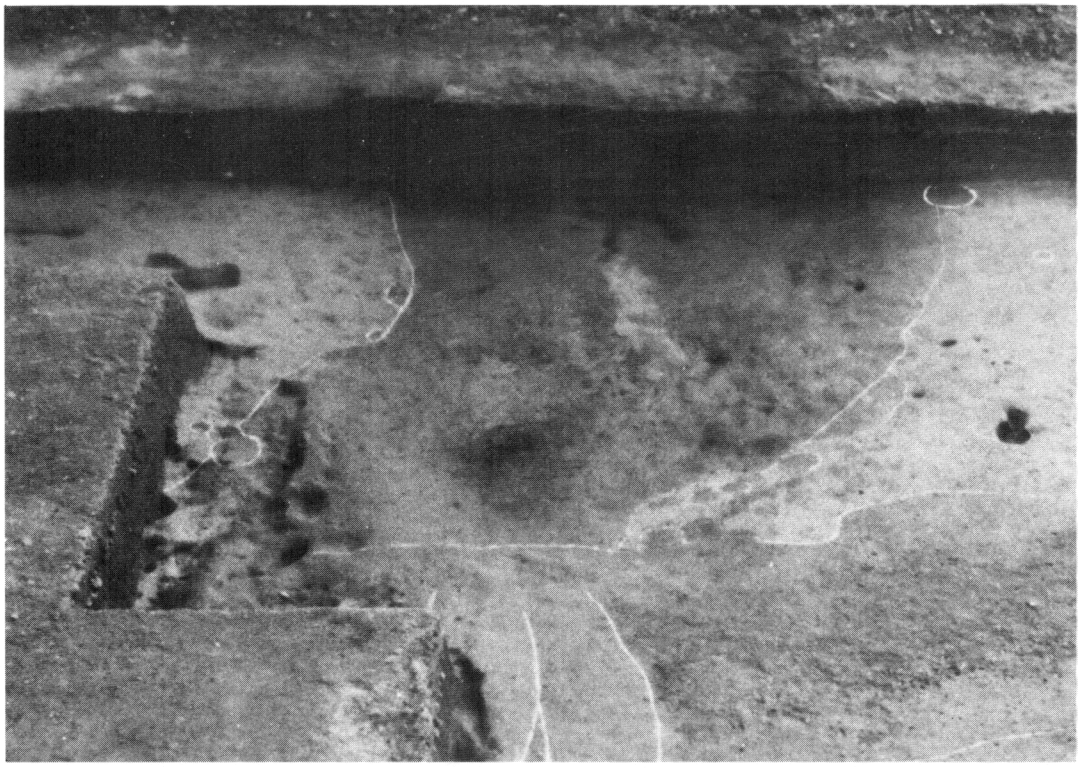
(2)　A地点溝3・4埋土土層断面（東から）



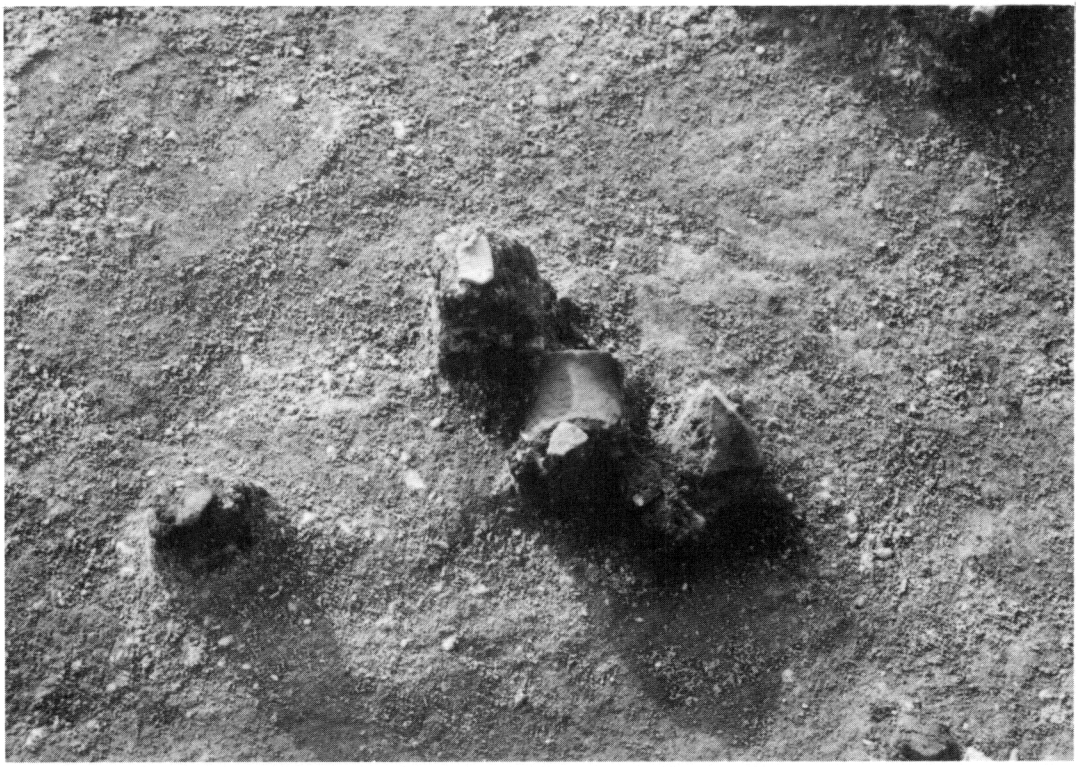
(1)　A地点溝5・6検出状況（西から）



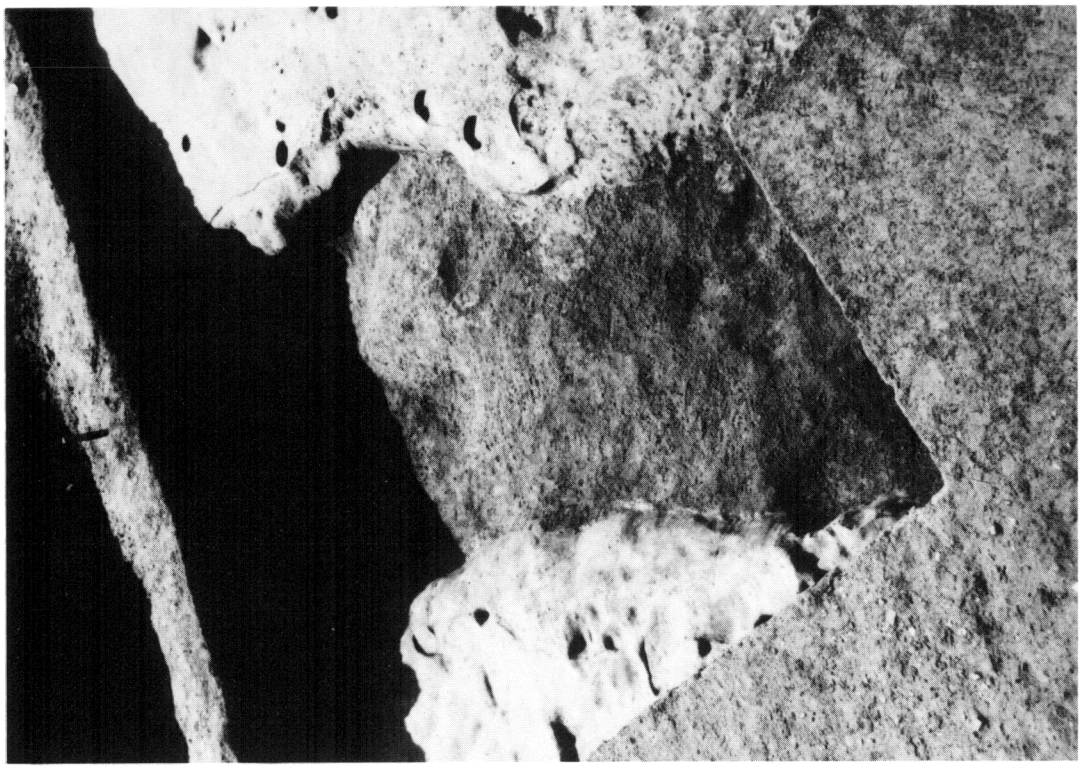
(2)　A地点溝5・6（西から）



(1)　A地点旧河川跡検出状況（北から）



(2)　A地点旧河川跡遺物出土状況（北から）

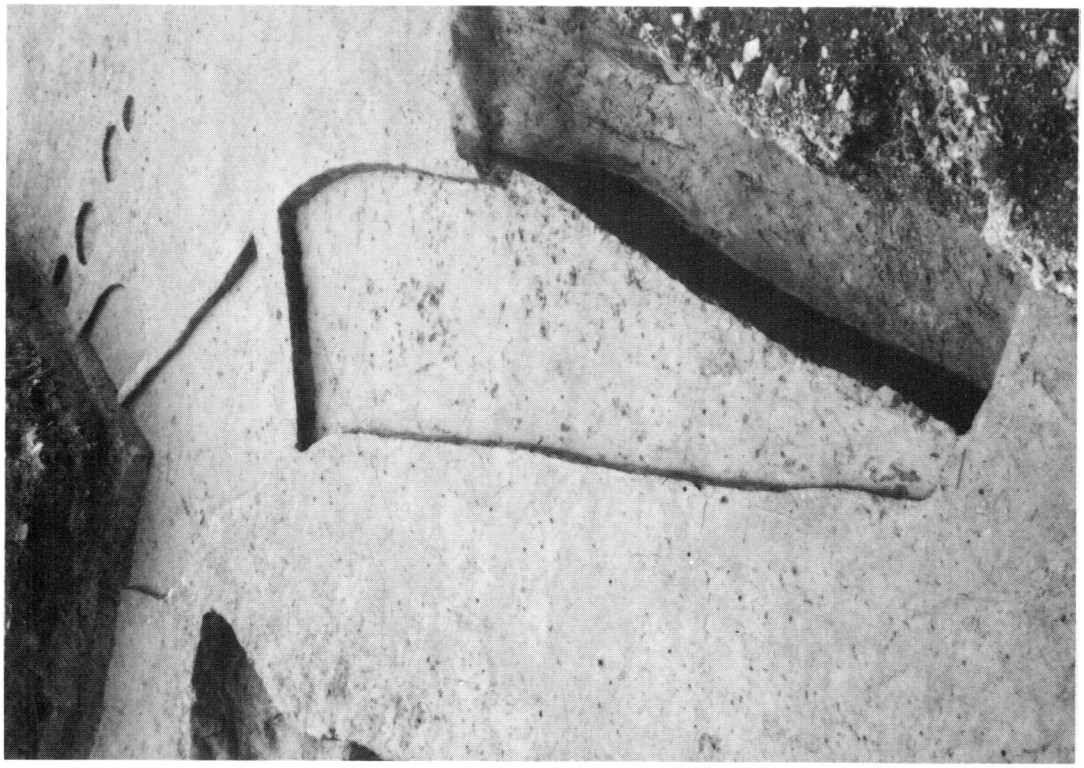


(1)　A地点旧河川跡（北から）

(2)　A地点旧河川跡埋土土層断面（北から）

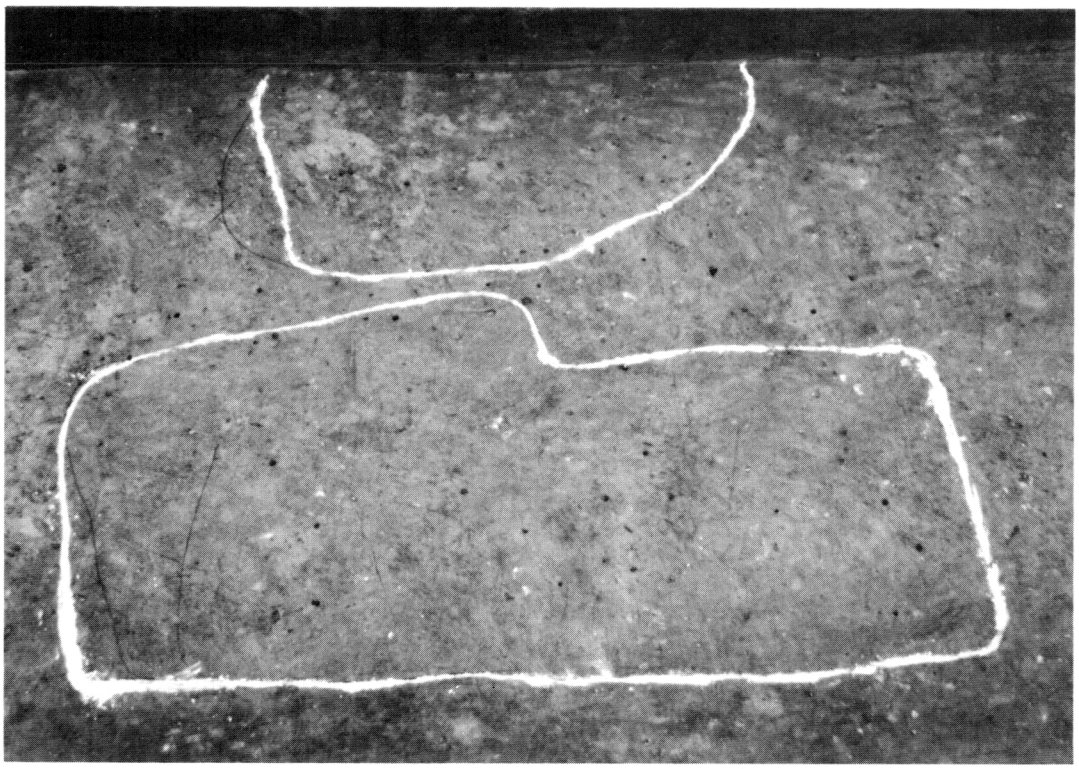
(1)　B地点遺構検出状況（北から）

(2)　B地点全景（北から）

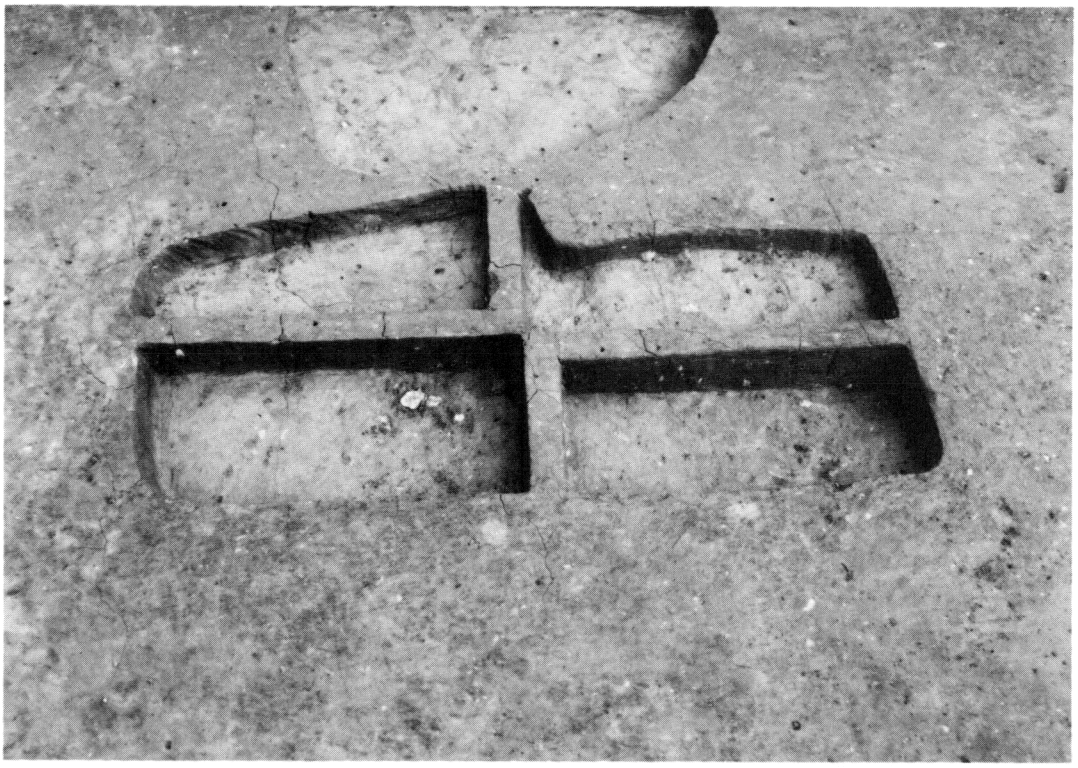


(1)　B地点溝7（北西から）

(2)　B地点1号土壙（東から）

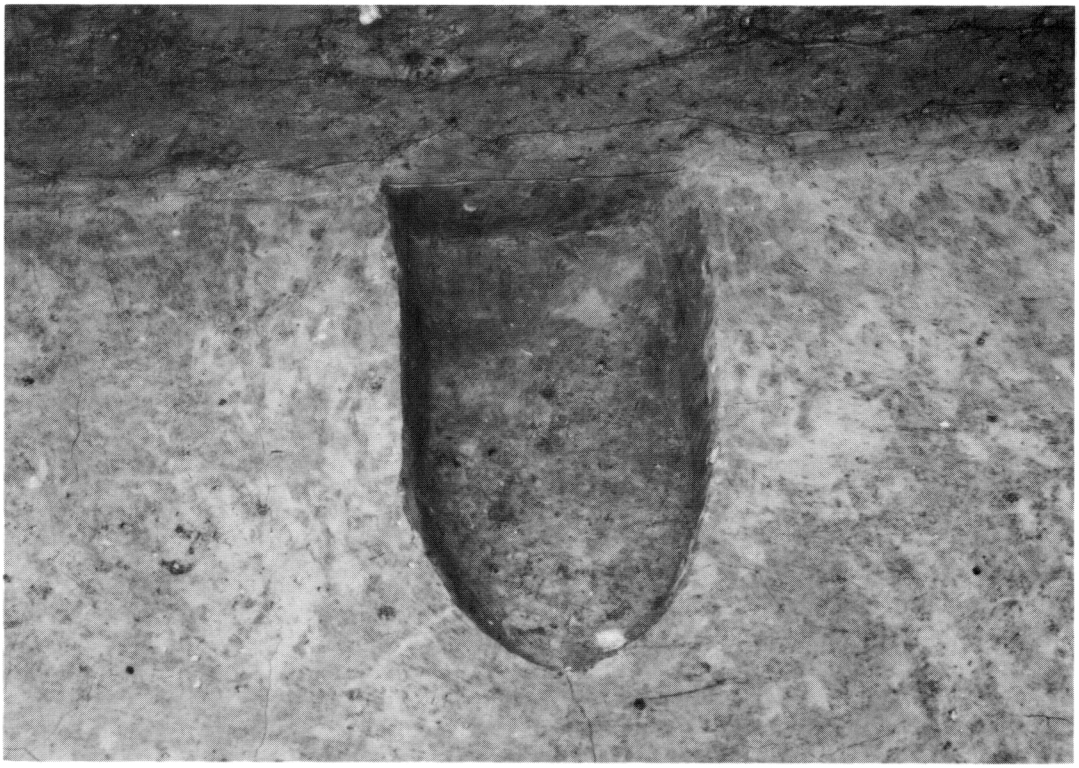


(1)　B地点2・3号土壙検出状況（西から）

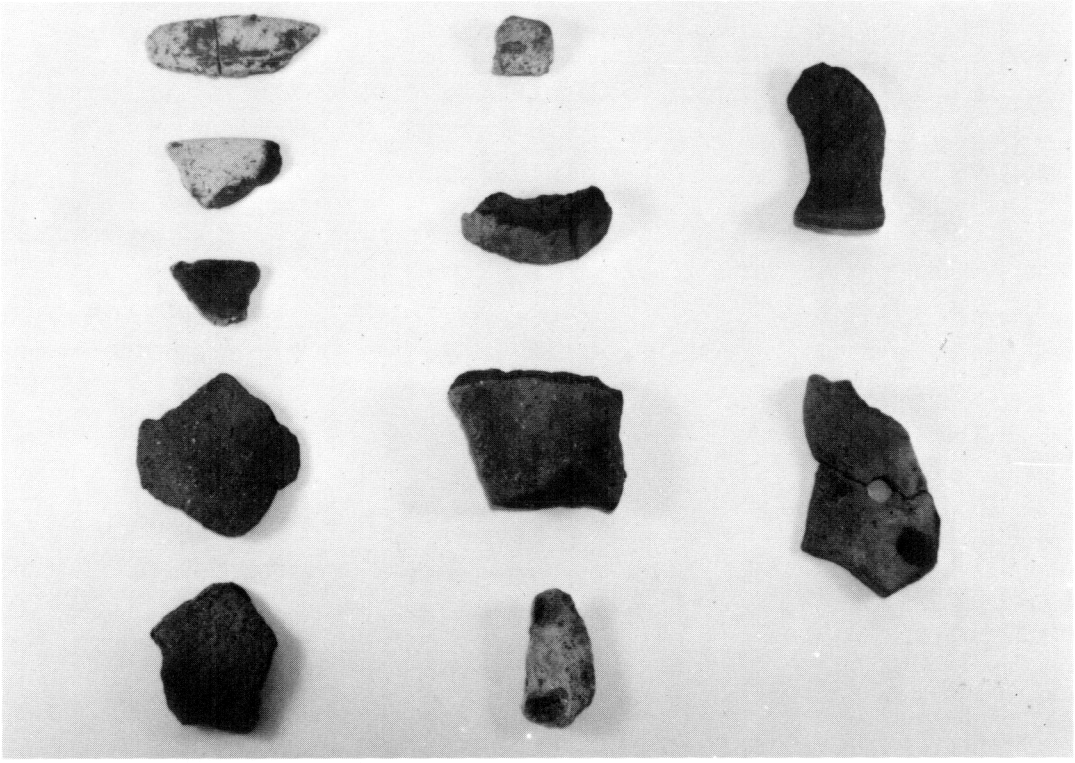


(2)　B地点2号土壙（西から）

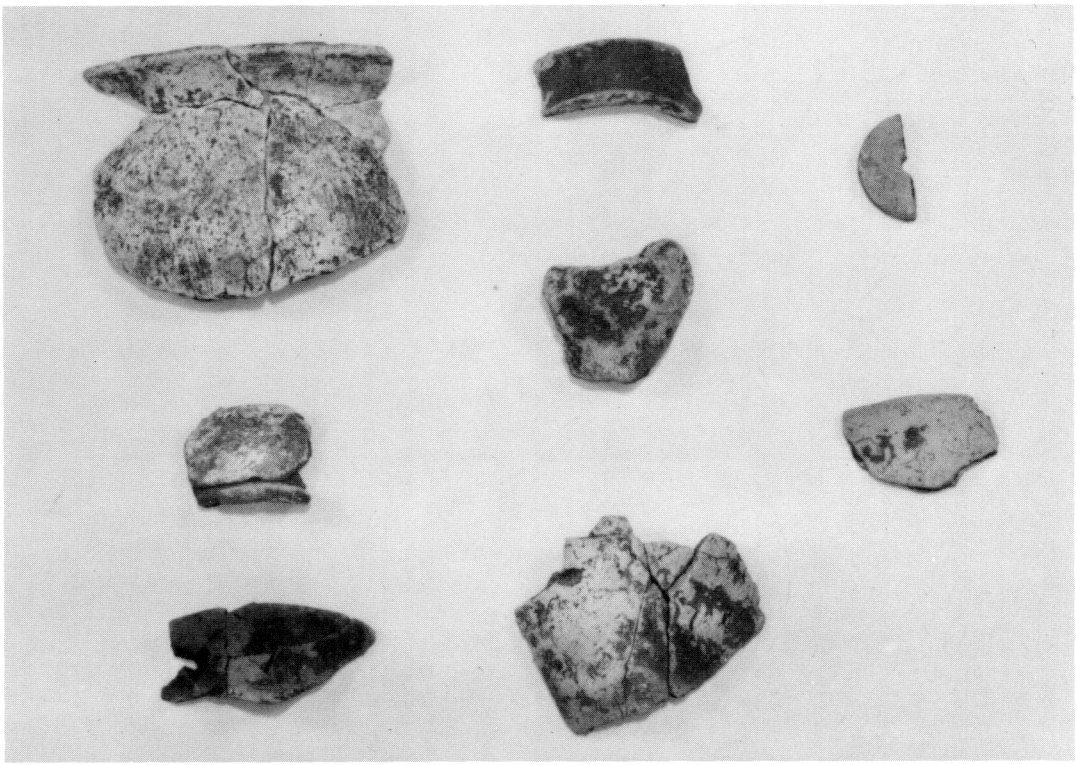
(1)　B地点3号土壙（西から）



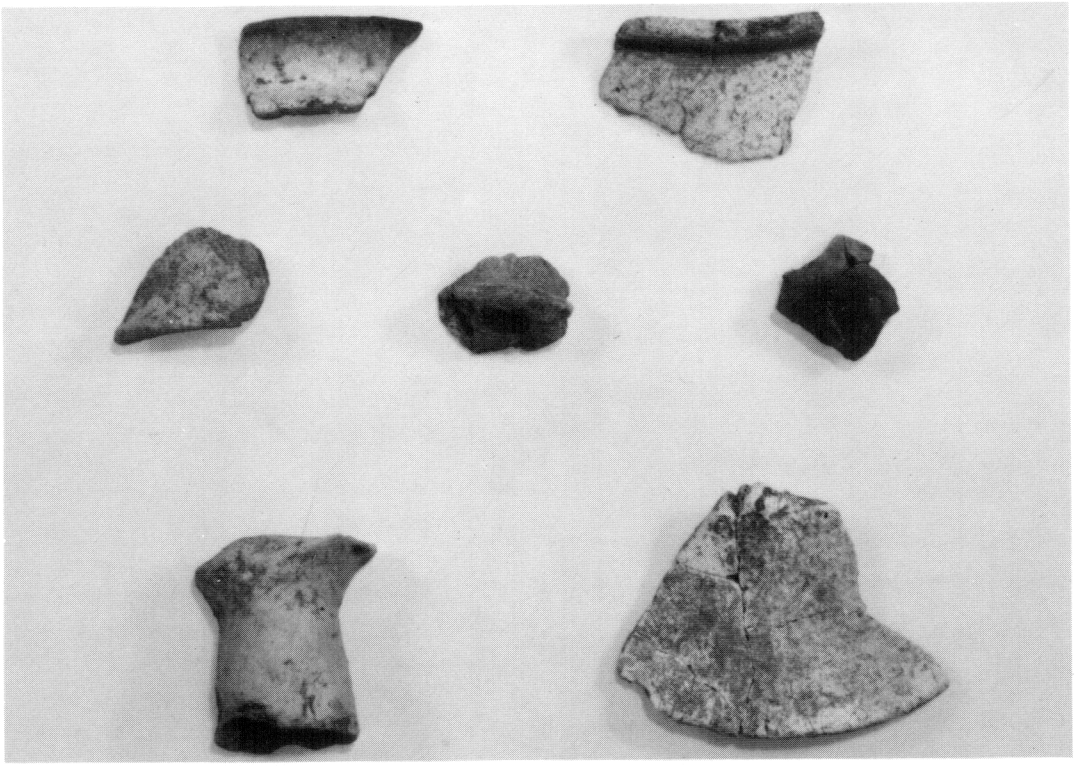
(2)　B地点4号土壙（東から）



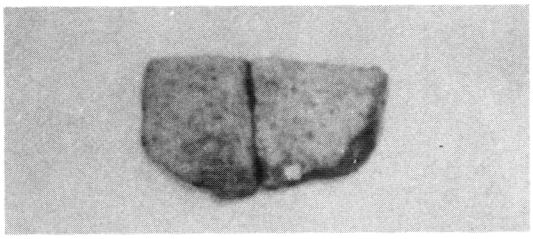
(1)　H－19区１号住居跡出土遺物



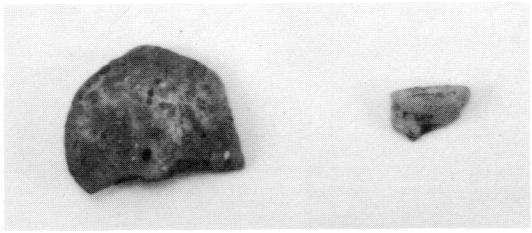
(2)　H－19区２号住居跡出土遺物



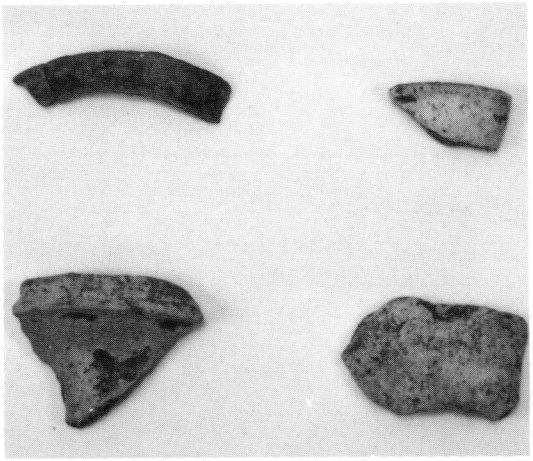
(1)　H－19区 3 号住居跡出土遺物

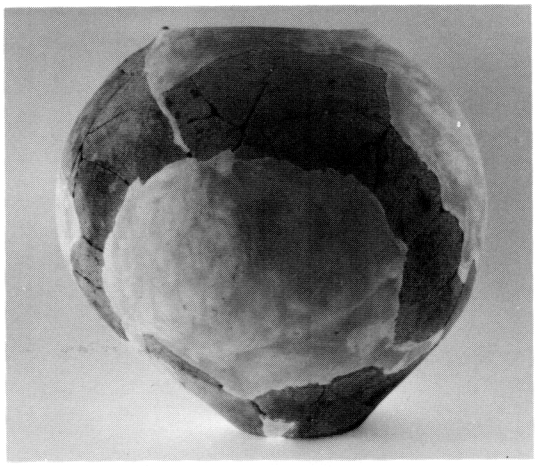


(2)　H－19区 4 号住居跡出土遺物

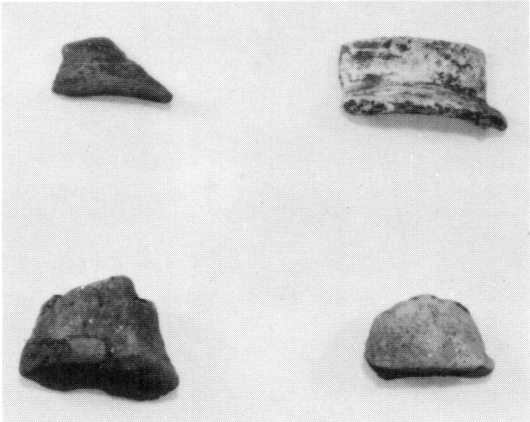


(3)　H－19区 6 号土壙出土遺物

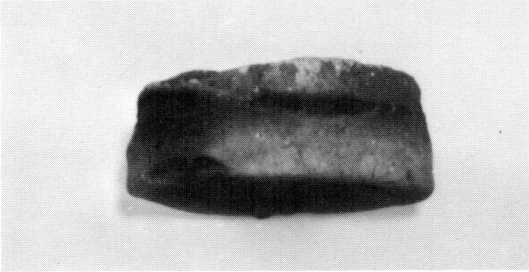




(4)　H－19区 1 号土壙出土遺物

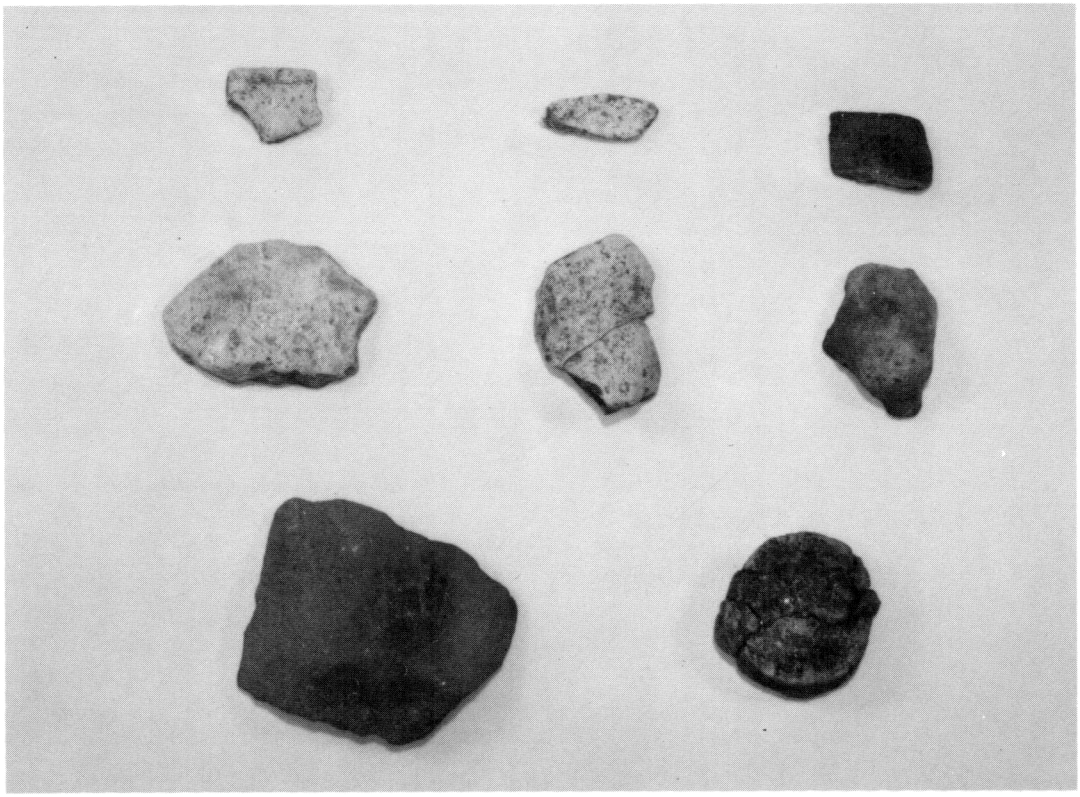


(2)　H－19区 7 号土壙出土遺物

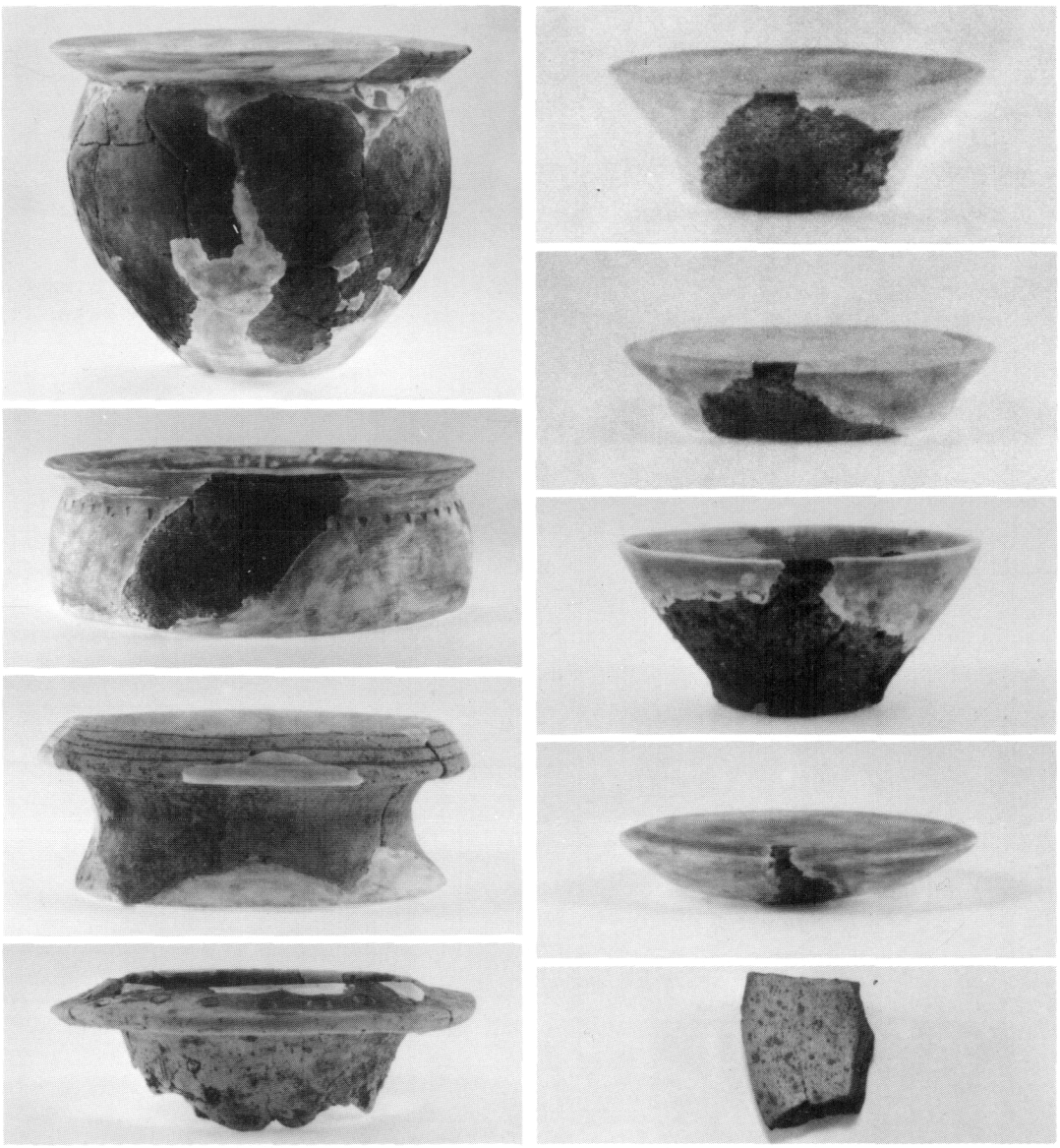


(1)　H－19区 3 号土壙出土遺物

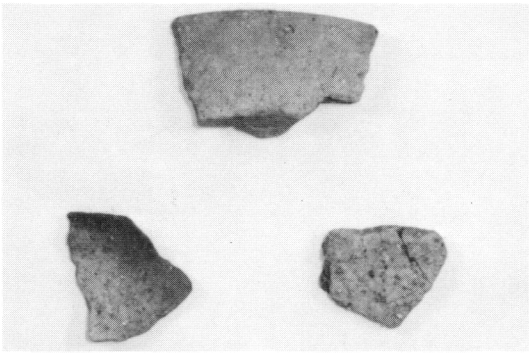
(3)　H－16区溝 6 出土遺物



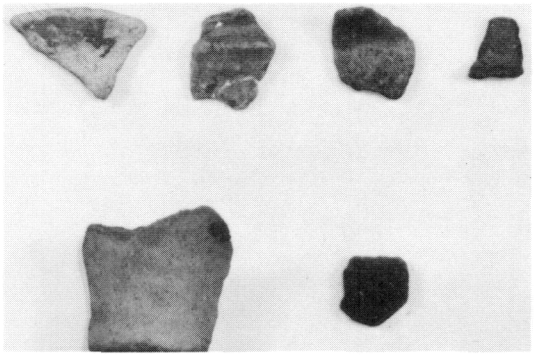
(4)　H－19区溝 5 出土遺物



(1)　H－19区溝 5 出土遺物



(2)　J －19・20区溝 3 出土遺物



(3)　J －19・20区旧河川跡出土遺物

あとがき

調査期間中、音もなく降る春雨の如く逝去された柿本春次学兄。生前貴兄によって点火された灯は永久に貴兄とともに燃え続けることでしょう。

生前の御指導、御助言に何ら報いることはできませんが、最大の尊敬と敬弔を奉げ、謹んで御冥福をお祈り申し上げますとともに、細やかではありますがこの報告書をもちまして哀悼の意を表させて戴きます。

山口大学構内遺跡調査研究年報

昭和56年度

昭和58年3月

編集　山口大学埋蔵文化財資料館

発行　山口大学

〒753 山口市大字吉田1677－1

印刷　大村印刷株式会社

〒747 防府市大字仁井令1505